とまどい本能寺の変

岩井三四二
Iwai Miyoji



PHP

とまどい本能寺の変

岩井三四二

Iwai Miyoji



PHP

とまどい本能寺の変

岩井三四二

Iwai Miyoji

PHP

ISBN978-4-569-81685-2

C0093 ¥1600E

9784569816852

1920093016001

定価:本体1,600円(税別)

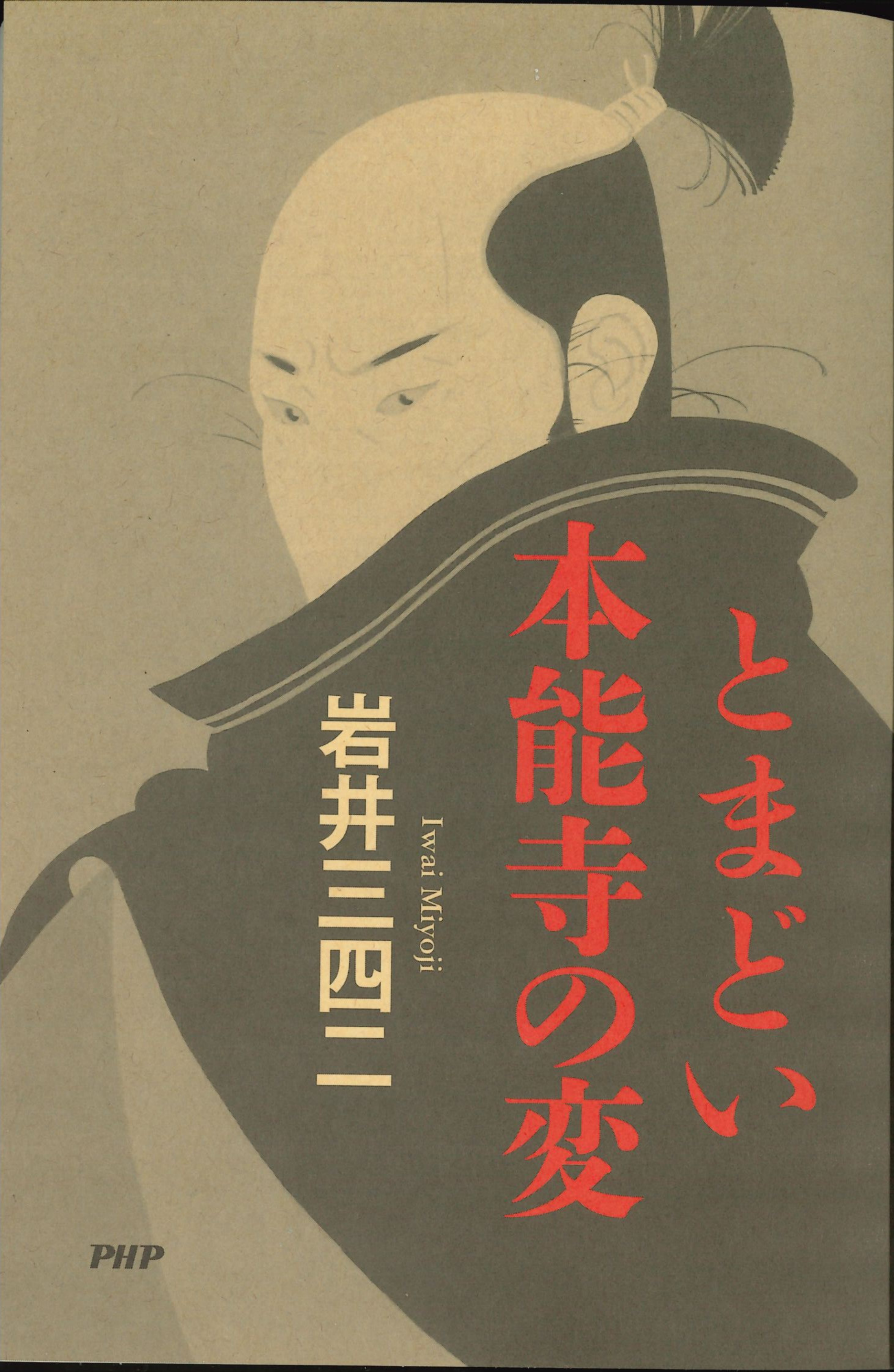
PHP研究所

とまどい本能寺の変

とまどい本能寺の変

岩井三四二
Iwai Miyoji

PHP



とまどい本能寺の変

岩井三四二

Iwai Miyoji

PHP

とまどい本能寺の変●目次

装丁——泉沢光雄
装画——西のぼる

とまどい本能寺の変

南の山に雲が起これば

一

「南の山に雲が起これば、北の山に雨が降る。これをどう解く。あん？」
安国寺恵瓊は、うつぶせに寝て稚児の慶秀に腰を揉ませている。
「さて、わたくしにはまだ、さようなむずかしい公案は……」
色白でつややかな頬をした慶秀は、困ったように細い首をふった。前髪を垂らした額に汗がにじんでいる。
「南の山に雲がかかれば、ふつうはそのまま南の山や野に雨が降りましょう。なぜ北の山に降るのか、さっぱりわかりません」
「いかんなあ。もうすぐ得度して雲水になるのじゃろ。いまから考えておいて損はないぞ」
恵瓊の高い声に答えるかわりに、慶秀はぐいと力を込めて腰を揉んだ。ああ、そこ、そこ、気持ちいい、と恵瓊はうれしそうな声をあげた。
「よろしゅうございまするか」
「おうよ。ひと仕事すんだあとの揉み療治は、なんとも心地よいわい」
「和睦が成って、大慶に存じまする」
「おお、まこと、織田家にも毛利家にもめでたいことじゃ」
恵瓊は笑みをうかべた。

若いころから中国の覇者、毛利家の使僧をつとめ、畿内と中国の各国を盛んに行き来しては、大名や土豪たちに毛利家の指示を伝え、渋る者は説き伏せて、恵瓊は毛利家の外交を支えてきた。齢五十にならんとしているいまは、毛利家中で長老と称されている。
しかし近年、織田家の攻勢に毛利家は押される一方となっていた。今年になって羽柴秀吉に備中まで攻め込まれ、高松城を水攻めにされてしまうと、毛利家には打つ手がなく、ただ軍勢をあつめて遠巻きに見守るしかなくなっていた。
こうした状況の下、なんとか織田家とのあいだで和議をむすぶよう、はたらきかけてくれと毛利家の首脳たちから頼まれ、恵瓊は使僧として羽柴秀吉に掛けあってきた。
恵瓊の目には、いまも水没寸前の高松城の光景が焼き付いている。
秀吉の本陣に出かけた際に、物見櫓にのぼって城のあたりを見渡すと、山の脇からひと筋の巨大な堤が、やや曲がりながらはるか向こうの山々まで延びていた。左側は草木で青々としていたが、右側は茶色に濁った水が満ちていて、まさに湖水になっていた。
その中心に、いくつもの屋根や土塁の上端だけが見えた。
高松城である。
半分ほど水没しているのに、白地の幟旗が無数になびいているのが、憐れにも滑稽にも思えた。なるほどこれでは勝てぬと嘆息したものだ。毛利の劣勢は明らかだった。
毛利家の提案は、備中、備後、伯耆、因幡、美作の五カ国を織田方に割譲し、かわりに秀吉は高松城の将兵をすべて助ける、というものだった。

割譲する国々のうち、因幡はすでに秀吉の手にあり、伯耆と美作も半分は秀吉の手に落ちている。備中も、この高松城以東は占拠されているので、実質は備後一国と備中、伯耆、美作それぞれ半国ずつの割譲という案だった。

だが秀吉は五カ国の割譲は当然とし、さらに高松城主の清水宗治の首を要求してきた。

あたら忠義な将兵を無駄死させたくはないと思い、恵瓊は秀吉の出す条件をのむよう、毛利家中をかき口説いた。清水宗治も、城兵の命が助かるならと、首を差し出すのを内々了解していた。

しかし毛利の総帥、輝元は三里もはなれた猿掛山にいて、この悲惨な状況がよくわからないらしく、秀吉の出す条件を拒んでいた。それも割譲する領地が不満なのではなく、外様なのに毛利家に忠誠を尽くしている清水宗治の首を渡すわけにはいかない、というのがその理由なのだから、話は奇怪にねじれている。

交渉は行き詰まったまま、日数ばかりが過ぎていった。そのあいだにも、高松城は刻々と水の中に呑まれていく。

織田方は、信長自身が大軍を引きつれて一気に毛利勢を潰しにかかるとうわさを流し、毛利側は、その前にのるかそるかの賭けともいえる総攻撃を企図し、支度が着々と進んでいた。

ところが昨晩の子の刻（午前零時）すぎに、太知坊という秀吉側の陣僧が恵瓊をたずねてきた。火急の用があるという。この真夜中に何の用かと、不審に思いながらも太知坊に案内されて秀吉の本陣に行くと、そこで秀吉の側近、蜂須賀彦右衛門らから、すぐにも和議を結びた

いと打ち明けられた。

「間もなく上様が大軍勢をひきいてここへ来られる。するとわれらに手柄はなく、逆になにをしておったのかと叱責を受ける。是非とも今日明日のうちに和議をととのえたい」

と言うのである。お家の内部事情により、本来なら譲れぬところを譲るから、取引しようというのだ。しめたと思う内心を押し隠し、

「お望みとあれば、取り進めましょうぞ」

と恵瓊はつとめて冷静な顔で対した。

彦右衛門は、領地割譲については因幡、美作の二国に備中の高梁川以東と伯耆の八橋川以東だけでよいが、かわりに清水宗治の首だけはどうしてももらい受けたいと言う。秀吉が合戦に勝ったことにするには、それしかないとの主張だった。

つまり毛利家にしてみれば、清水宗治の首ひとつ差し出すだけで、備後一国と伯耆、備中それぞれ半国が手許に残ることになる。

これを聞いて、恵瓊は毛利家の承諾も得ずに、秀吉の陣から舟で高松城に向かった。

清水宗治の切腹を毛利家はみとめていないが、清水本人が切腹すると言いだせば止めることはできない。城兵を助けるためと言えば、清水宗治は喜んで切腹すると踏んで、独断専行したのだ。この点さえ片づけば、領地割譲の件は秀吉側がかなり譲っているだけに、和議は容易にまとまるはずである。

昨日深夜から夜明けまでのうちに話はあわただしく進行し、恵瓊のもくろみ通り、今日の

朝、清水宗治は城の前の湖水に舟を出し、切腹して果てた。

　首を秀吉の前に届けると、秀吉はすぐさま毛利あてに起請文を起こし、和睦すれば毛利家を疎略にはしないと誓いを立てた。これをもって恵瓊は毛利の陣所にもどり、毛利勢を前線で指揮している吉川元春、小早川隆景の両将を説得し、明るいうちに和睦の誓紙の交換までこぎ着けたのである。

「今日一日で、人の命をずいぶんと救ったわい」

　と慶秀に言ったのは、誇張ではない。高松城の将兵ばかりか、信長が来れば攻め潰されていたであろう毛利家の将兵をも救ったのである。

　なんとも大きな仕事をやってのけたものだと、恵瓊は満足感にひたっていた。交渉に慣れた自分でなければ、とても一日で話をまとめるなどできなかっただろう。

「それはようございました。大きな功徳を積んだのでございまするね」

　と慶秀はかわいいことを言う。つい手を伸ばし、すべすべした脛をなでた。女犯を禁じられた僧にとって、稚児の肌は大きな楽しみである。

「よし、もういい。般若湯をもらおうか」

　昨晩はほとんど寝ていないのに、大仕事のあとのせいか気分が高揚して眠れそうにない。出家には女犯とならんで飲酒も禁物だが、この際、少しくらいはいいだろう。

　あたりは薄暗くなっている。かなり小降りにはなったものの、朝からの雨で鬱陶しい天気だった。

　天正十年（一五八二）六月四日の夕刻である。

　慶秀に酌をさせ、肴もなしにちびりちびりとやっているうちに酔いがまわってきて、恵瓊はその場で寝込んでしまった。

「あ？　ああ？　なんだと」

　いい気持ちで寝ていたのに、起こされてしまった。まだあたりは暗い。

「本陣から至急の使いが来ております。すぐ出頭されたしと」

　慶秀が揺すり起こしているのだ。僧堂の暮らしで夜明け前に起きるのは慣れているが、疲れと酔いがまだ抜けていない身体は綿のように正体がなく、力が入らない。

「なんじゃ。なんの用じゃ。もう大役は終わったぞ」

「それが……。大変なことが起きたと」

「だから、大変なことはもう終わったわい。寝かせよ、寝かせよ。坊主とて寝ずにはおれぬと伝えよ」

「信長が、討たれたそうで」

「ああ、そうか。それはよかった」

　目を閉じて瞬時に眠りに落ちたが、しばらくしてまた揺すり起こされた。

「和尚、今度は東福寺からお使者がまいっております。東福寺ですぞ」

　と言われて、今度はさすがに起き上がった。恵瓊は東福寺内にある塔頭・退耕庵の庵主で

もある。上方に異変があれば報せるよう、庵に詰める雲水どもに命じてあった。京の東福寺から備中までは急いでも二、三日はかかる。しかもここは戦陣である。ただごとではないとまわらぬ頭ながら気づいたのである。

眠気をこらえて引見したところ、使者は一通の書状を差し出した。

「本日六つ時、本能寺にて信長、惟任日向守に討ち果たされ候」

という一筆を見て、恵瓊は「うえっ」と声をあげたまま固まってしまった。書状は二日付である。

「の、信長が討死したと！　まことか」

とても信じられなくて使者に問い質した。使者は「御意」としっかり答えた。その目で本能寺が燃えあがるところを見たという。

しばし呆然としたが、わざわざ東福寺から使者を遣わしてきている以上、もはや信じないわけにはいかなかった。

「本陣からも、おなじことを言ってきています」

と慶秀も言う。となると……。

「だ、だまされた。秀吉めにだまされた！」

歯ぎしりしたが、もう遅い。互いに和睦の誓紙をかわしたあとだ。秀吉勢はもう撤退をはじめているし、水をためた堤を切ってしまったので、あたりは泥沼と化して兵を動かすことのできない。

ひとしきり憤慨したあと、あることに気づいてぞっとした。

清水宗治を切腹させたのは、自分の独断だ。その切腹で、和議は成ったのである。

責任を問われるのではなかろうか。

二

吉川元春が陣を敷いた岩崎山は高松城の西にあって、秀吉本陣の石井山と高松城をちょうど真ん中にはさんでにらみ合う位置にある。

元春は毛利元就の次男で、四十過ぎの分別盛りである。母親似の丸顔を、がっちりとした肩の上にのせている。毛利家にあっては、宗家を継いだ長男隆元の死後、その子、輝元を、三歳下の三男、小早川隆景とともに支える立場にあった。

その山上の陣地に五日の午後、毛利勢の首脳たちがあつまっていた。

元春、隆景に家老の福原式部、それに元春の三男、経言（のちの吉川広家）である。呼び出された恵瓊も無論その中にある。

恵瓊たちがすわる陣幕の外には岡越前守、宇喜多七郎兵衛ら、血気にはやる武将が詰めかけている。この戦陣の行方だけでなく、毛利家の将来がかかる事態だからか、どの顔も強ばっている。

雨はあがり、曇り空の下、湿った風が吹いていた。

最初に毛利陣に信長横死の一報をもたらしたのは、播磨の阿賀一向衆徒の使者だったが、その後、紀伊の雑賀衆や京の東福寺からもおなじ報せがもたらされた。本能寺で惟任の謀叛にあって腹を切ったとまで一致していたから、もはや変事の勃発は疑いようがなかった。

この陣の大将格である吉川元春が、恵瓊をにらんで言った。

「さあて、まずは長老から、ことの次第を聞かせてもらおうかの」

「次第とは、何かの」

元春の言葉に棘を感じて、恵瓊は傲然と問い返した。もはやこれは戦いである。弱気になってはいけない。

「秀吉の陣に呼び出されたときのようすから、秀吉の顔色、陣中の者たちの態度、すべてじゃ」

隠すこともないと思い、恵瓊は三日の深夜に太知坊がたずねてきたことから、蜂須賀彦右衛門に膝詰めで談判されたこと、これは機を逃してはなるまじと思い、その足で高松城へ入り、清水宗治を口説いたことまで、あらいざらい話した。そして最後に、

「秀吉めは本能寺のことなど、ひと言も申さなんだ」

と締めくくった。すると元春の向かいにすわった隆景が、

「それ、ここに秀吉がよこした起請文があるわい」

と熊野牛王宝印の誓紙をとりだした。昨日、あわただしい中で取り交わしたものだ。

「読んでやろうか。公儀に対され身上 理の儀、我等請け取り申し候条、聊かもって疎略に

存ぜざる事、とな。すでに死んでおる信長に、われらを取りなしてやると言うておる。秀吉のやつ、まったく大した役者よ」

秀吉を非難して、恵瓊をかばっているように聞こえた。恵瓊はうなずいた。

元春とはちがって父親に似た隆景は細面で、顎から頬にかけてふさふさと髭を生やしている。直情径行で強引な元春に対して、隆景は思慮深く、性格もおだやかだ。

「だまされたのは、明白じゃ」

元春の横にすわった経言が吐き捨てる。

「この上は起請など、何の役に立つものか。いますぐに追い打ちをかけ、秀吉を討ちとるべし」

といまにも立ち上がりそうな勢いだ。

「いまそこに詰めかけている岡越前らも、早く追いかけて秀吉を道中にて討ち止め、さらには京に攻め上り、天下に旗をあげるべしと申しておる。これは天より与えられたる時節にてあれば、取らねば却って災いとなると。ここは追い打ちを決断されたし」

経言は二十歳過ぎの若造で、それでなくとも行儀が悪いのに、当世の傾いた若者の流行に合わせて額を深く剃り込んでいるから、ますます薄っぺらに見える。恵瓊は、前々から馬が合わぬのを感じていた。

「さて、敵の先手は、まだ三里と行ってはいまい」

元春は顎を撫でながらそんなことを言う。大将として決断をしようとしているようだ。

「ここの経言だけではないわ。味方の者ども、みな追い打ちをかけろと言う。さあて、いかがすべきか」

「しかし、だまされたとはいえ、いったん起請文を書いてしまったものを、まだ血判も乾かぬうちに破ってしまってよいものかの」

隆景は、煮え切らないというより、追い打ちには慎重な態度だ。

――さよう。いまさら追い打ちなんぞ、恥の上塗りじゃて。

恵瓊は内心、そう思っていた。毛利家は秀吉に見事にだまされたのだが、だまされる素地はあった。もともと和議を望んでいたのは、毛利家のほうなのである。秀吉を先鋒とする織田家に力では到底かなわないのだから、和議を結んで兵を引くしかなかったのだ。秀吉はそこを突いた。前のめりになっている毛利家に手を差し出し、ちょっと引っ張ったのだ。それだけで毛利家は勝手に転んだのである。

「だが、千載一遇の機会にはありまするぞ」

と経言は言いつのる。

「長老、これをどう見なさる」

元春に話を振られて、恵瓊は言った。

「どう見るもなにも、敵の大将の死に乗じて追い打ちをかけるのは、武士のやることとは思えぬがな」

経言がぐいと顔をあげた。自分のことを非難されたと思ったらしい。熱い眼差しで恵瓊をに

らんでいる。

「古い唐国の書にものう、こうある。楚の共王、陳国を討ちしとき、陳の成公卒し、その子哀公弱かりしかば、楚王兵を止めて去る、とな。君子は喪を討たぬものよ」

「ちがう！」

経言が叫んだ。

「喪を討つ、討たぬという話ではない。秀吉がわれらをだましたから、懲らしめてやろうとしておるだけよ。君子がどうのと、おかしなことを申すな！」

「おや、さきほど天が与えたもうた時節、などと言うてはおらなんだか」

恵瓊が反論すると、経言は目を大きく見開き、さらに声を高くした。

「長老、そなた、自分のしたことがわかっておるのか。秀吉に踊らされて清水宗治を切腹させたじゃろうが。あと一日二日こらえていれば、秀吉は勝手に陣を引いたのじゃ。それを余計な立ち回りをしおって、清水を殺したばかりか、毛利の家名に泥を塗りおったわ」

「これ経言、言葉をつつしめ。それが長老に向かって言うことか」

元春がとがめても、経言は怒り顔であやまりもしない。

「昨日の晩、長老がわれらにひと言でも相談しておれば、かように無様なことにはなっておらん。浮かばれぬのは清水よ。落とさぬでもよい命を……」

経言は鼻をすすり上げた。場が静まり返った。清水宗治を持ち出されると、恵瓊はいたたまれない。

「なにしろ和議を結ぶよう、頼まれておったでの、頼まれたことをしただけじゃわ」

と恵瓊はいなしたが、同時に危険なにおいを嗅ぎとった。どうやら不満の矛先をこちらに向けようとしているらしい。

　恵瓊には武力はない。強くあたっても仕返しをされる恐れがないから、あたりやすい相手と見られたのか。

　背中に汗を感じた。秀吉に呼ばれたあと、元春らに相談もせず高松城に乗り込んだのは、やりすぎだったかとの思いは、誰に指摘されずとも、ある。

　しかしそもそも元春らが自分を呼び出したのは、和睦のためである。自分は頼まれた役目を果たしただけだ。責任は元春らにある。不当な言いがかりは、断固はね返さねばならない。気を強くもて、と自分に言い聞かせた。

「追い打ちをかけると言うても」

　と隆景が話を変えるように口を開いた。

「泥沼の中をどう追いかける。よほど大回りをせずばなるまい」

　と言うのは、もともとこの地は低くて水が浸きやすいのに、梅雨の長雨でいたるところに水があふれ、平地は泥沼と化して大軍勢を動かせないという事情があるからだ。

「大回りをしても、逃げる軍勢を討つのはたやすい。こんな話をしている間にも、敵は逃げて行き申す。いますぐにも全軍に号令を給わりたし！」

　経言は頑固に言い張る。

「若い衆はそうでなくてはなるまい。のう、兄者」

　隆景は元春に微笑みかけた。

「尖ったやつでの。困ったものよ」

　と言いながら、元春もまんざらではなさそうで、子煩悩な親の顔を隠そうともしない。末っ子ということもあってか、元春は経言を特にかわいがっているとのうわさだった。

「だがな、先の見通しは、そうたやすくはないぞ」

　隆景は顔を引き締めて言った。

「追い打ちをかけると申すが、もし秀吉と惟任が、一味となって立ち向かってきたらどうする。われらに勝機はあるか。秀吉だけでももてあましておったのに、援軍が加わるのじゃぞ」

　恵瓊もうなずいた。秀吉が敗走したのかどうかはわからない。秀吉と惟任が示し合わせているかもしれない。それに織田家にはほかにも柴田、滝川といった宿老衆がいて、それぞれ大軍勢を抱えている。そうした者たちの動きまで考えないと、追い打ちをかけるとか、天下を狙うなど言えたものではない。

「しかも戦いの地は敵の中よ。追えばまず宇喜多が立ち塞がるぞ。岡山の城を抜けるか。兵糧ももつまい。返り討ちになること、必定じゃ。軽々しく軍勢を動かしてはなるまいぞ」

　さすがに隆景の話は理路整然としている。

「それにこちらの寄騎衆にも、ちと頼りない者がおろう。そやつらのことも考えぬとな」

　元春が悩ましそうに言う。

毛利家も必ずしも一枚岩ではない。元就の代から安芸を本拠にして東西に勢力を伸ばしていった過程で、多くの土豪を傘下におさめてきたが、それだけに外様の者たちが多く、旗色が悪いとなれば寝返りかねない者は枚挙にいとまがない。現に今年になってから、元春と隆景の義弟にあたる上原元祐が秀吉方へ寝返っている。この高松城救援の陣でも、秀吉に内通しているとうわさの立った者はひとりやふたりではない。

直情径行ではあるが、元春は愚かな大将ではない。状況は見えているようだ。

「えい、さような者どもなどほうっておきなされ。秀吉の尻に食らいつきさえすれば、運はよいほうへ開けましょうぞ。いくさはただ前へ進むが上分別でござる」

経言は頑として自説を曲げない。

あつかいにくい小僧だと恵瓊は思う。

あまりにしつこく言いつのるその姿は少々奇異に見え、片寄った性格をうかがわせる。

「ともあれ、ここは無理をせぬのが肝要と存ずる。秀吉めも、われらの胸中はわかっておる。ぐっとこらえて恩を売っておけば、のちのちよいこともあろう」

恵瓊が言うと、

「長老、なにか秀吉とたくらんでおるのか」

と経言がからんでくるが、恵瓊は首をふった。

「よもや。愚僧もすっかりだまされ申した。しかしな、起請文は大ざっぱなものゆえ、細部はこれから詰めねばならん。まだ挽回はできましょう」

「挽回とは」

元春が聞きとがめた。恵瓊はいう。

「どのみち備中や伯耆は、どの城を渡しどの城はこちらのものとするか、秀吉とのあいだでいちいち決めねばならん。美作にしろ、いつ渡すかは決めておらんし、国境の城はどちらのものか、分明ならぬ。そこで再度、交渉の余地もあろう、と思いまするがな」

こうした細部にわたる取り決めは、三日の夜から気になっていたところだった。

あのときは急いでいたので大まかな表現ですませたが、いずれは細目を詰めねばならないのである。が、こうなってみると別の意味もおびてくる。つまり毛利方はだまされたのだから、取り交わした文書に縛られず、もう一度白紙から交渉し直しができるのではないか、とも考えられるのだ。

「おう、そのこと。また長老に頼まねばならぬな」

隆景のひと言に、恵瓊はうなずいた。

「秀吉が無事であればこそ、恩を売りつつ交渉ができましょう。それゆえ、ここは秀吉を逃がしておくが、お家のためにもよかれと存ずる」

恵瓊が主張すると、しばし考えた後に元春も同意して、これが結論となった。毛利家は起請文を守り、追い打ちはしない。このまま兵を引くのである。その旨、猿掛山にいる総大将、毛利輝元に伝えることになった。

「中国者は律儀であると、褒められような」

元春が自嘲するように言った。

その後、前線にいた元春の長男、元長があくまで追撃を主張し、実際に兵を動かしたため、説得に家老たちが駆けつけるなど混乱があったが、ともかく毛利勢は追撃しなかった。

談合が終わって山麓の古寺にもどった恵瓊は、ひどい疲れをおぼえていた。

「ちと揉んでおくれ。さよう。腰といわず肩といわず、どこもかしこも疲れたわい」

うつぶせになって慶秀に身を委ねた。慶秀は「お顔色がすぐれませぬ。よほどお疲れなのでしょう」と言って、甲斐甲斐しく揉み療治に精を出す。

——やれやれ、また面倒なことになるわい。

和議を結んだ責任を押しつけられるのは避けられたが、かわりに領地の線引きという、わずらわしくてやっかいな仕事をさせられることになった。

今後の困難な交渉を思うと、胸が波立ってくる。慶秀の指先による心地よい刺激も、身体の芯まで通じることはなかった。

三

高松城攻めの陣を無傷で引き払った秀吉は、十日もしないうちに惟任日向守こと明智光秀を攻め破り、その首をあげるという大仕事をやってのけた。そして尾張の清洲城で織田家の遺臣をあつめ、信長亡きあとの織田家の体制を、ほぼ思うがままに決定した。

その体制は、信長と信忠の遺領を分割し、信長の嫡孫、三法師丸を押し立てて織田宗家がつづくようにするなど、表向きは織田宗家を立ててはいるが、その実、天下人の弔い合戦に勝利した秀吉自身が、天下人に登る階段に足をかけるための布石となっていた。

恵瓊が秀吉をたずねたのは、本能寺の変からひと月半ほどたった七月十七日である。

秀吉は、京の南にある山崎の地に新しい城を造っている最中だった。

「おお、安国寺の長老がござったか」

と秀吉は、山裾の屋敷に上機嫌で恵瓊を迎えた。恵瓊は手を合わせて深く問訊——禅者流の礼——を返した。

「あのときは世話になったでよ。御坊が駆けまわってくれたおかげで中国から大返しができて、この手で謀叛人を討てたのだで」

ただでさえ皺の多い顔が、笑みでくしゃくしゃになるほどだった。おかげでこちらはひどい目にあったと言いたいのをこらえて、

「お世話になったのは、わがほうにござりまする」

と恵瓊も笑顔で応ずる。

「あのとき和議を結べたのは、まことに僥倖でござった。毛利家は面目をほどこし、こなたさまは謀叛人を討ち果たして本懐を遂げ、どちらにもよいことずくめの和議にござった」

秀吉も満足げにうなずく。

ここで恵瓊は毛利家から託された贈り物を差し出した。吉川元春から銘刀信国の太刀ひと

腰、小早川隆景からは馬一匹——ただし目録のみ、実際の馬は後から送る——、そして毛利輝元から青銅一万疋、つまり銭百貫文である。
「毛利家よりの、心からの献上品にありますれば、なにとぞお納めを」
「む、む。これはこれは。心づかい痛み入る。毛利家のこころざし、たしかに受けとったぎゃ」
贈呈と答礼がひととおり終わってから、恵瓊は切り出した。
「ときに国境のこと、あのときは急場であったゆえ、十分に話ができませなんだ。これからゆるりと詰めの話をせねばと思うておりまするが」
「中国筋の国境か。はて、なにか話をすることがあったかな。備中に伯耆、美作をもらってすんだ話ではなかったかな」
「とんでもないこと」
恵瓊はあわてて首をふった。いつの間にか備中と伯耆の全部をゆずったことになっている。これだから秀吉は油断ならない。
「因幡、美作の二国に備中は高梁川まで、伯耆は八橋川まで、と堅く約定してござる」
「お、まことときゃあ?」
秀吉はわざとらしく宙をにらんで考えていたが、
「さようなことであれば、御坊の申す通り話をせずばなるまいて。されば彦右衛門や官兵衛に話をするがよいだわ。わしからも言うておく。そちらは御坊が相手かな」

と言ってにこりと笑った。
「及ばずながら愚僧、右馬頭（毛利輝元）の使者として走り回る所存にて、どうかよしなに願いあげまする」
「これはまた手強き相手と申すだわ。少しはゆるめてもらわんと、かなわんな」
愛想はいいが腹の底がわからない秀吉への挨拶はそこそこに切り上げて、交渉の実務者となる蜂須賀彦右衛門らに対面し、吉川元春らから託されていた書状を渡した。書状には、伯耆や備中の半国を渡すことで和議を結んだが、いろいろな事情があったこともあり、是非とも条件を見直してほしい、と書かれていた。
もちろん、受けとった蜂須賀らの反応は芳しくなかった。起請文まで交わした以上、書かれたことを守れ、というのだ。当たり前の話である。
蜂須賀らの文句を恵瓊は聞き流した。交渉が難航することは覚悟の上である。あとはどれだけ秀吉から譲歩を引き出せるかだ。困難な闘いだが、毛利家のために全力を尽くすつもりだった。
しかし交渉はなかなか始まらなかった。本能寺の変で惟任に味方した者たちの残党狩りをする一方、清洲の会議で新たに得た領地の検地をしたり、山崎の地に城を築く手配をしつつ信長の法要の支度をするなど、秀吉が多忙だったからだ。
十月には京の大徳寺で、信長の葬儀を大々的に行った。葬列が三千人にもおよび、しかも柴田勝家らには参加させず、秀吉が棺の後から信長の愛刀を捧げ持つという、秀吉ばかりが目立

つ式典だった。
果たして柴田勝家らは反発した。秀吉があまりに一方的にことを進めすぎるというのだが、これを秀吉は逆手にとり、「織田信孝が勝家と組んで謀叛を企てた」と騒ぎ立てた。難癖をつけて合戦にもち込み、自分の天下取りを妨げる者たちを一気に叩き潰そうとしたのである。秀吉はもう、おのれの野心を隠そうともしなかった。
その年のうちは長浜、岐阜のふたつの城を囲み、開城させただけで終わったが、翌天正十一年（一五八三）二月、柴田勝家が越前から積もる雪をかきわけて出陣し、北近江の賤ケ岳で秀吉と大がかりな合戦となった。
その前に毛利家にも柴田から、味方となり入洛してほしいとの使者が来た。しかし安芸から見ていると、どちらが勝つのかわからない。結局はこの争いを傍観していた。
五月までには柴田が北庄城に滅び、織田信孝も自害して、秀吉の天下が見えてきた。
隆景が秀吉にあてて戦勝を祝する書状を出したのは、このころである。すると思いもかけず強烈な返書がもどってきた。
その書状において秀吉は、柴田勝家を滅ぼしたようすをくわしく書いた上で、毛利家との境目の儀を相立てねばならないが、
「よくよく御分別ありて、秀吉腹を立てぬよう、御覚悟もっともに候」
とし、あとは東国の北条氏政と上杉景勝、それに西国の毛利家が、
「秀吉の存分次第に成られる御覚悟候えば」

日本は治まり、源頼朝以来の日本の治世が実現すると主張するのだ。
この書を見て隆景や元春らは仰天した。高松城をはさんでにらみ合っていた時には織田家の一武将にすぎなかった秀吉が、いまや天下人になったように振る舞っているではないか。書状の中で毛利家の総領を、「輝元」と呼び捨てにするほどである。
あまりに速い秀吉の変わりように、この一年、中国に籠もっていた毛利家はついていけない。書状に応じて家臣の林木工が上洛し、交渉にあたったが、まったく話にならない。秀吉を怒らせてしまい、備中、美作、伯耆の三国をあますところなく渡すべし、その覚悟がなければ、八月一日に軍勢を引きつれてひと合戦しようと申し渡される始末だった。
輝元をはじめ国許にいる者たちには、いまや飛ぶ鳥を落とす勢いの秀吉の力が理解できなかった。そのため、秀吉の譲歩を引き出そうと強気でのぞんだのが裏目に出たのだ。
ここにいたって恵瓊の出番となった。
「やれやれ、困ったの。毛利のお家は、苦しくなると決まってわしにすがってきおる」
安芸の安国寺でひかえていた恵瓊も、頼られてまんざらではない。頭ばかり大きな小男だが、弁舌と頭の回りのよさは誰にも引けをとらないと自負している。
「和尚さまの手腕が認められているのでござりましょう」
と慶秀はうれしいことを言ってくれる。
さっそくお気に入りの稚児や雲水を引きつれて上洛すると、蜂須賀彦右衛門や黒田官兵衛らと折衝にあたった。あるときは毛利家の事情を泣き言まじりにならべ、あるときは和議の起

請文をたてにとり、少しでも割譲する領地を減らそうと奮闘した。

「御坊にはかなわぬわ。理屈で押せばむつかしい経典の文句を出して煙にまくし、都合の悪いところはそらとぼける。かといって毛利の言い分ばかりでなく、こちらの言い分を通すところは通す。まさに自在に進退しよる」

千軍万馬の古強者で、岩のような体躯をもつ蜂須賀彦右衛門も、弁舌では小柄な恵瓊にかなわない。数日の話し合いで、備中は高梁川以西、伯耆は三郡を毛利家に残しておいてよい、というところまで毛利側は押し返した。まずは当初の約定のところまでもどったのである。面目を保ったかとほっとする恵瓊に、

「ただし、これには条件がござってな」

彦右衛門が日焼けした悪相を不気味にゆがめて言うのは、「人質を入れろ」との要求だった。

「さすれば領地を少々ゆずったとて、こちらも顔が立つだわ。でなければ、筑前守のあのいくさは何だったのかと、世間が後ろ指をさすかもしれず」

恵瓊はうなった。

「なるほど。天下人としては、実利より世間への見栄えが大切、ということでしょうかの」

まだまだ東国の北条や四国、九州の諸大名を征伐していかなければならない秀吉としては、領地の多少よりも、毛利家が秀吉の軍門に降ったという形がほしいのだろう。

それなら輝元や元春たちも呑む、と恵瓊は思った。毛利家は当面、秀吉に逆らうつもりはないし、毛利家の若い者を人質という形で秀吉の近くにおいておけば、秀吉が本当に天下人にな

ったとき、なにかと便利だ。

もちろん、人質は殺されることもある。危険な役目だが、多くは無事に返されるし、人質に出したとて毛利家の金穀が減るわけではない。人質で領地が買えれば安いものだ。

「御坊は毛利家中をよくご存じじゃ。人質として誰がよいか、教えてはくれまいか」

と彦右衛門に言われて少々考えた恵瓊は、ある若者の顔を思い出した。

——ちと辛き目にあわせてやろうて。そのほうがあの男のためだわ。

一石二鳥とはこのことよ、とほくそ笑んだ。

国許にいる元春、隆景、輝元に折衝の結果を伝えると、三人とも恵瓊の案を認めたばかりか、よくぞ境目を押しもどしたと感謝されもした。さらに秀吉にもその交渉ぶりを認められ、

「御坊はたいした手腕の持ち主だわ。今後は毛利家だけでのうて、わしが手足としても骨を折ってちょう」

と持ちあげられもした。

恵瓊は得意顔で帰国した。

四

その年の八月から九月にかけて、まず人質問題が話し合われた。

毛利家から差し出す人質として、毛利元就の晩年の子で、子のない小早川隆景の養子となっ

ていた小早川元総と、あの吉川経言が指名されていた。元総はすぐに応諾したが、経言はなかなか承知せず、上洛が遅れた。

「なぜわしが上洛せねばならぬのか。あの坊主にはかられたわい」

と経言が騒いでいると、恵瓊の耳にもうわさが入ってくる。その通り、恵瓊が薦めておいたのである。しかし父の元春も末っ子だけに経言をかわいがっており、手許から放したくないらしい。

意に介さず、早く送り出すようにとうながす書状を恵瓊は元春に出した。その甲斐あってか、九月半ばには経言もしぶしぶ応じて、国を出る支度をはじめた。

恵瓊はそのとき輝元の吉田城にいて重臣の佐世三左衛門と細目のすり合わせをしていたが、この報を聞き、安心して夜の酒宴で大酒を飲み、したたかに酔った。そして見目よい若い小姓をそばにおき、そればかりか輝元側近の若い衆を呼び出したりして乱痴気騒ぎを演じた。翌日、二日酔いで目覚めた恵瓊は、前夜自分のしたことを聞かされて愕然とし、ほうぼうに謝って回らねばならなかった。

そんな失敗はあったものの、十月には元総、経言の両人を大坂城で秀吉に引き合わせ、まずはひとつの仕事を片づけた。

十一月になると、蜂須賀彦右衛門と黒田官兵衛が備中へやってきた。約束どおりに境目の城をふたりに引き渡せば、それですべてが終わるはずだった。

しかし、そう簡単にはいかなかった。

「御坊の言うことはあてにならんぞ」

と、両人への応待のために備中猿掛城に出向いていた恵瓊は、松山城を見回ってきた蜂須賀彦右衛門になじられた。

「どの曲輪にも兵が入っておって、旗がひるがえっておるわい。力ずくで奪いに来い、といった風情じゃな」

馬を飛ばして帰ってきたのか、彦右衛門の袴はところどころがはね飛んだ土で汚れている。

「そんなはずは……」

松山城は高梁川東岸の山上にある。取り決めでは秀吉に渡さねばならない城だ。

「信じられぬというのなら、その目で見てきたらいかがかな」

恵瓊は配下の雲水に見に行かせるとともに、同行してきた毛利家重臣の林木工を通じて輝元に警告した。城からの退去が遅れているようだから、早くするように配下の者に命じられたし、と。

その後、松山城だけでなく、備前の児島城からも——そんなところまで兵を入れていたのかと、恵瓊もおどろいたが——兵を引いていないことが判明した。さらに美作の中にも、毛利側の兵が入っている城がいくつもあった。

「御坊、どうなっておるんじゃ。先月の取り決めは、右馬頭どのにつたわっておるのか！　このままですむと思うなよ。上様はな、引き渡さぬ城があれば軍勢で囲んで干殺しにせよと仰せじゃ。十日のうちに埒をあけねば、軍勢をつれてくるぞ」

不気味な顔の彦右衛門にすごまれて、恵瓊はあわてた。

あちこちに雲水を使いにやって問い質したところ、備中と備前は小早川隆景が、美作は吉川元春が、それぞれ城兵を指示して進退させていると判明した。

「おのれ、ご両人が欲の皮を突っ張らせておるのか」

両人に使者を走らせると、事実を認めた上で、なんとかして城を渡さずともすむよう、秀吉の使者に詫言をしてくれと返事してきた。使者は言う。

「明け渡せば、いままで城をもっていた者どもが領地を失って困るので、長老の力でなんとか助けてほしいとのことでござりました」

「いまさら何を言うのか！」

あきれたことに、元春も隆景も上方で決まった取り決めを軽んじ、少しでも自分に有利なようにねじ曲げようとしているのだ。

「それでは、いくら愚僧が上方で頑張っても台無しじゃ」

詫言をすれば領地がふえるのなら、誰も首をかけて合戦などしない。

「ちと御免。掛け合わねばならぬ」

と彦右衛門に断って、隆景の居城がある安芸国沼田へ使いの雲水を走らせた。猿掛城から沼田の高山城まで、二十里以上ある道を使者が何度も行き来した。懸命に説いた甲斐あってか、隆景はやや軟化し、備前児島の城は兵を引こうと申し出てきた。さらに備中松山の城も、いま配下の者を説き伏せている最中だとの話だった。

隆景は隆景で、在地の土豪である家来たちから突き上げをくらって、なかなか思う通りにならないらしい。

土豪にしてみれば領地という飯の種を失うのだから、必死だ。恵瓊たちがいくら絵図面を見ながら議論しても、解決するものではない。しかも土豪たちのあいだで、恵瓊の評判はさんざんだとのうわさも聞こえてくる。上方の手先になって、自分たちから領地を奪おうとしていると見られているのだ。

「やれやれ、どいつもこいつも欲の皮の突っ張った者ばかりよ」

夕刻、恵瓊は城内に与えられた自室にもどり、慶秀に腰を揉ませた。数日来の激しいやりとりで身も心も疲れ果てていた。

「自分さえよければ、国中を合戦に巻き込んでもいいと思うておる。なあ、人は本来みな仏と禅では教えるが、この世になかなか仏はおらぬものよな」

思わず愚痴をこぼしたが、慶秀はなにも言わず、黙々と腰を揉むだけだ。それも、以前のように献身的な揉み方ではなく、ずいぶんとおざなりである。

「もそっと力を入れて揉んでくれぬか」

と文句を言うと、

「吉田の若衆のようには、力がありませぬ」

と素っ気なく返してくる。

——こやつ、焼きもちを焼くかや。

どうやら輝元の吉田城で、若衆を総揚げにして騒いだ話が気に入らなかったらしい。あれ以来、慶秀の態度がよそよそしくなっている。

　このあわただしい時に、あちこちから嫌われるものよ、と恵瓊は自分を嗤いたくなった。べつに自分の利益のために動いているのではなく、ただ与えられた使命を懸命に果たしているだけなのに、はたらけばはたらくほど敵を増やしてしまうようだ。

　ともあれ備前、備中の目途がついたので、美作のほうに力を傾けることにした。だがこちらのほうこそ岩のように動かなかった。

　美作を押さえている吉川元春は、小早川隆景のように聞き分けのいい男ではなかった。むしろ秀吉と恵瓊に反感を抱いているようで、美作の家来を退去させようとしなかった。安芸大朝の日野山城に、恵瓊は使者をたびたび発したが、いつも無視に近いあつかいで、話もできずに帰ってくる者が多かった。

　――経言のことを恨みに思っておるのか。

　そればかりでなく、思えば元春もその子の元長も、昨年の高松城での交渉のときから一貫してこちらに対する態度は冷たい。親子そろって恵瓊が嫌いらしい。

　蜂須賀彦右衛門らからは、まだかまだかと責め立てられる。

「ぐずぐずするなら、われらは大坂へもどる。さすれば手切れとなり、弓矢の沙汰になるぞ」

と脅すのだ。

　たまらず吉田にいる毛利家総領、輝元に使者を出し、元春と隆景の尻をたたいてくれと頼ん

だ。しかし、それがさらに反感を買うことになった。

「和尚さま、どうも評判が悪いですね」

と慶秀はどこで聞いてきたのか、安芸のほうでささやかれているうわさを、冷静に伝えてくれた。

「上方びいきの、鉢ひらきの正慶小僧、と申すのだとか」

　正慶とは恵瓊の若いころの呼び名である。恵瓊が鉢をもって乞食して回る小僧だと、貶めているのだ。まるで子供の悪口である。

「えい、いったい誰のために奔走しておると思っておるのか」

　情けなくなった。要するに、元春も隆景も天下の情勢をわかっていないのだ。安芸の山城に籠もって家来衆の相手ばかりしているから、広い天下が見えていない。

　恵瓊は本能寺で信長が倒れる前から、京と中国を股にかけて駆けまわっていた。

　しかしその活動ぶりを織田方に疎まれたのか、四年ほど前に備後へ立ち寄ったとき、毛利家から織田方へ寝返った宇喜多の手の者に捕まり、幽閉されてしまった。このときは、毛利家が押さえていた宇喜多家家老の子息との交換で解き放たれたのだが、以来、しばらくは京の東福寺――安国寺の本山である――でおとなしくしていた。

　高松開城の交渉に呼び出されるまで京にいたため、恵瓊は天下の情勢が見えるようになっていた。織田家の勢いは止めがたく、毛利家には織田家の軍門に降るか、あるいは滅ぶかのふたつの道しか残されていないのは明らかだった。秀吉の世になっても、それは変わらない。い

や、力の差はますます開く一方である。それが毛利家の者たちには見えていない。
自分ひとりが頑張ってもむなしいと感じる。しかしここまで関わってきた以上、途中で放り出すわけにもいかない。
恵瓊は腹をくくって、元春の居城、日野山城へ出向いた。山あいの、城下町とてさほどない寂しい城に、元春は住んでいる。このころ表向きは長子の元長に家督をゆずった形になっていたが、実権を握っているのはまだ元春だった。
「美作の城より、兵を引いていただきたく、お願いにまいってござる」
と切り出すと、元春は険しい顔で、
「長老はどちらの味方じゃ。筑前どのの手先か。毛利家中の者ならば、少しでも毛利の領地をふやすよう、馳せまわるが本分じゃろうが。それを兵を引けとは、あべこべじゃ」
と言い放った。恵瓊は柔らかく言い返した。
「それでは話がまとまりませぬ。すべて交渉ごとは相手あってのものゆえ、こちらの都合ばかり言い立ててもかなわぬこと。ゆずるべきはゆずり、取るべきは取る。毛利のお家は和議という大きな実を取ったゆえ、領地のいくらかはゆずってしかるべきと存じまする」
「それそれ、長老は武士ではないゆえ、領地がどれほど大切かわからぬのじゃ。領地は命より大切なものぞ。それを手放せとは、首を差し出せと申すとおなじよ。わしにはとてもできぬ」
「それではまた、大いくさになりまするぞ」
「そうさせぬのが長老の役目じゃろうが。秀吉の言い分を呑んで、その通りにするなら誰でも

できるわ」
憎々しげに言い放つ元春。
「早く上方衆のもとへもどり、われらの言い分を呑ませるよう、つとめよ」
それが当然という顔の元春に、恵瓊の頭の中で何かが切れた。
「されば彦右衛門や官兵衛にそう申しましょうぞ。手切れは必定じゃ。秀吉めが十万の大軍をひきいてこの城下にやってくるのも、そう遠いことではあるまいて」
低い声で告げた。
「上方衆と中国衆がいくさをしたらどちらが勝つか。まず十のうち七、八は上方衆が勝つでありましょうな」
元春は目を見開き、ついで取り殺しかねない鋭さで恵瓊をにらみつけた。おまえは弱いと言われたのだから、当然の怒りだ。
恵瓊は表情を変えずに言う。
「なにしろこなたは兵を出すと申しても、十日や二十日では無理じゃ。三十日、五十日とかかってやっと兵があつまってくる。上方衆はどうじゃ。十日もあれば、秀吉は十万の兵とともにここへ押し寄せて来ましょうぞ。それだけでも勝ち目はござらん。しかも上方衆は兵数が多い。金穀も、こなたはいつも欠かしておるのに、上方衆は豊かじゃ。とても勝てぬ」
元春の鼻翼がひくつく。背にうそ寒いものを感じながらも、恵瓊はつづけた。
「毛利のお家も、安閑としていてはいつまで立ち行くか。武田が滅び、浅井、朝倉もいまはな

い。山名、赤松、土岐などと申す衆は跡もなく失せておる。われらの目の前でも、四国の河野どのは長宗我部に負けておる。九州の大友どのは、百姓のような龍造寺に仕詰められてしもうた。芸州もいかがなるか、今後はわからぬ」

「この毛利が、浅井、朝倉とおなじと申すか」

「このままでは、さようになり申す」

おまえは滅ぶと言ったのだ。武士に対しては最大の侮辱である。

「おのれ、言わせておけば……」

元春は膝を立て、刀架に手を伸ばそうとした。

「待たれい！」

読経で鍛えた大音声で元春の機先を制し、恵瓊はつづけた。

「口はばたきことを申しておるのは重々承知でござる。まことに鉢ひらきのごとき正慶小僧が申すことではござらん」

元春ははっと顔を緊張させた。おそらくこの悪口を言いだしたのは、元春なのだろう。

「愚僧、京に五畿内は申すにおよばず、日本の半分は見てまわってござる。中国路の山の中に留まっておる衆とは、ちと見る目がちがっており申す。愚僧の見るところ、ご家中の方々は慢心しており申す。当節、その御分別では生き残れずと思うがゆえ、繰り言ながら申すまで」

臍下丹田に力を込め、元春をにらんでやった。元春もにらみ返してくる。

ふたりとも動かない。

やがて元春が、気圧されたように視線をそらした。

「無論、秀吉方には掛け合い申す。しかしなにしろ無心する場所が多すぎる。どこか削ってくだされ。それをお願いしにまいった。まだ数日は猶予あるほどに、一考下されたく、願いあげまする」

それだけ言うと、丁寧に問訊して恵瓊は元春の前からさがった。

——あれでは無理じゃ。天下のようすがわかっておらん。

冷たい廊下を歩きながら、人に知られぬようため息をついた。毛利家の鈍さと貪欲さに、ほとほと愛想が尽きる気がした。

結局、交渉は年末にいたっても終わらなかった。

蜂須賀彦右衛門たちは、「わぬしらのせいで正月もないわ」と恵瓊たちをののしりながら猿掛城で新年を迎えた。

油断ならぬ交渉相手ではあるが、こうなれば友情に近いものも芽生えてくる。

「おたがい、損な役回りでござるな」

と慰め合い、畳もろくにない粗末な造作の城中で新年の盃を交わし合った。家のこと、高松城以来の世の変わりようなどをしみじみと話していると、なにやら敵は秀吉方ではなく、毛利家ではないかとも思えてくる。

実際、秀吉配下の者たちは明るく豪放で、陰険な陰口をたたく毛利家中の者たちとはひと味

もふた味もちがった。上方びいきと言われるが、たしかに自分の心情は芸州の田舎者より上方衆に近いとも思った。

一月も半ばをすぎると、秀吉方に変化があらわれた。交渉を早く終わらせようとする兆しが見えはじめたのだ。おやと思っていると、秀吉と織田信雄との不仲が聞こえてきた。

「これは吉兆かもしれぬな」

と恵瓊は交渉の相棒である林木工にもらした。

「信雄の背後には三河の家康がついておる。いかに秀吉といえど、徳川と毛利と両方一時にことを構える気はなかろう。もう少し待てば、折れてくるのではないかな」

「どうかな」

木工はそうは見ていない。

「徳川と組んでこちらに向かうかもしれぬ。腹の底が知れぬ御仁ゆえなあ」

しかし、これは恵瓊の見方があたった。尾張で家康と秀吉の手勢が小競り合いを起こしたのだ。自然、境目の交渉は中断となり、彦右衛門らは大坂へもどっていった。

そののちしばらく、交渉はもたれなかった。再開したのは、信雄とのあいだに和平が成立したあとの、天正十二年（一五八四）十一月からだった。

東方の気がかりがなくなったせいか秀吉は鷹揚で、

「こののち四国へ討ち入るだわ。毛利が先鋒をつとめるなら、伊予と土佐を与えように」

という話まで出た。さてこそと期待していると、案の定、交渉はうまくいき、秀吉はあっさ

りと毛利家の言い分をみとめた。四国が手に入るとなると、境目の城のひとつやふたつは小さな問題と見えたのだろう。

結果、備中では松山城が、美作で高田城、伯耆でも八橋城が毛利家のものとなった。毛利家の粘り勝ちである。恵瓊にはいくらか複雑な思いもあったが、長い交渉が終わったのだから、まずはよしとした。

天正十三年（一五八五）の正月には、この朗報をもって恵瓊は大坂から安芸にもどり、家中の者たちからおおいに歓迎された。

その年の六月から四国攻めがはじまり、八月には終わった。秀吉が送り込んだ大軍勢に長宗我部元親は抗すべくもなく、降参して土佐一国だけを安堵され、毛利家には伊予一国が与えられた。

十二月、隆景と吉川元長が、毛利家の家老たちを引きつれて大坂にのぼり、秀吉に伊予国拝領の礼を述べることになった。案内役は、もちろん恵瓊である。

大坂城は、ちょうど本丸が完成したところだった。周辺では二の丸、三の丸を造るために大勢が立ち働いているが、本丸の中は静かである。

巨石を組み合わせた石垣造りの、広く深い内堀と、のけぞって見上げなければならないほど高い五層の天守に、一行は度肝を抜かれたようだった。

秀吉と対面することになり、天守下にある御殿の大広間へ招じ入れられた。広間の中央には、主客が向き合ってすわるよう、座がしつらえてある。

ここまで恵瓊は一行を先導してきたが、いざ座に着くとなると、客側からとことこと亭主側、つまり秀吉がすわる側へ歩いていった。そしてその端にすわった。

毛利側から声にならぬ声が起こった。

だが恵瓊はその座から動かなかった。

四国討伐の褒美（ほうび）として、恵瓊は秀吉から、伊予国のうちに二万三千石を拝領していた。毛利家の使僧の枠を超え、秀吉から禄（ろく）をもらう身に、つまり家臣になっていたのである。毛利家を裏切ったようで少々後ろめたくはあったが、一方で秀吉にはたらきを認められたことは誇りでもあった。

恵瓊は、当惑した顔の毛利の者たちを無表情に眺（なが）めつつ座している。

世の中にこうしたことはよくある、と思っていた。禅の公案にもあるではないか。南の山に雲が起これば、北の山に雨が降ると。

別におどろくほどのことではない。

最後の忠臣

一

目の前の三方には短刀がのっている。
白い小袖姿の三七信孝は、寝不足の赤い目でその短刀を瞥見し、すぐに目をそらした。
五月にしてはめずらしく風が強くて、舞良戸が時折かたかたと鳴る。
尾張国は内海の、野間という在所にある大御堂寺に、信孝はいた。その南ノ坊という子院の隅にある八畳ほどの板の間が、信孝に与えられた最後の場所だった。
円座の上にすわらされても、切腹する覚悟などできていない。
いや、なぜ切腹しなければならないのか、いまだに納得がいかない。
——あと少しだったのに。
父、信長譲りの高い鼻を鳴らし、端正な切れ長の目を伏せて、信孝は思う。
天下人の座に、あと少しですわれるはずだった。日本六十余州が、すべて自分のものになったかもしれなかったのだ。
それは決して夢物語ではない。本能寺の変で天下人、織田信長と嫡男の信忠が死んだ以上、信長の三男である信孝には、十分に天下人の座をつぐ資格があった。
ところがそんな期待をもった日から一年もたたないというのに、天下どころか領地も家臣も失ない、こんな田舎寺に流されてきた。そして二十六歳の若さで腹を切らされようとしている。人の身の上とは、短いあいだにこうも大きく変わるものかと、いまだに自分の境遇が信じられない。
だが、夢ではない。自分の人生はあと少しで終わるのだ。
頭の中は混乱していて、さまざまな思いが飛びかっている。
柴田勝家を頼ったのが悪かったのか。
清洲で、合議に出なかったのが失敗だったのか。
思えばここまでに、いったいどれほど多くの者にだまされ、裏切られてきたことか。世の中には、人の皮をかぶった狐と狸しかいないのではないかとすら思う。
家来どももみな逃げていった。もう誰も信じられない。
いや、そもそもあの日、岸和田にいたのが一番の敗因だろう。
蜂屋のやつ、おべっかを使いおって……。
あの日は……、そう。ずいぶんと暑い日だった。

本能寺の変の前日となった天正十年（一五八二）六月一日、信孝は岸和田の城に来ていた。
そのころ中国路では羽柴秀吉による毛利家討伐が進んでいたが、それと並行して四国も押さえてしまおうとの企てがあり、信孝が大将となって阿波に兵を出すことになっていた。土佐から阿波へ侵攻してきた長宗我部元親を討ち、在地領主の三好康長を支えるとの名目のもと、渡海するのである。

数日前に安土城で父の信長から四国討伐の大将に任ずる朱印状をもらった上、父ばかりか兄や織田一族の者たちから、餞別として兵糧や人足などをたっぷり与えられ、昨日、住吉の陣に到着したところだった。

信孝がひきいるのは、一万五千の大軍である。

住吉大社の境内から浜辺にかけて野陣を敷き、出陣を待っている。あまりの人数に堺のほうまではみ出してしまい、堺の家々を陣取りしようとして堺衆から苦情が出たほどだった。

信孝自身は、四国へ軍勢を運ぶための舟がそろったというので、検分のために住吉より五里（約二十キロ）ほど南にある岸和田に出向いていた。

浜に出て、舟をひきいてきた紀州の雑賀衆をひざまずかせ、

「ようした。明日からは頼むぞ」

と言葉をかけた。お目見えはそれで終わりである。

「あれでよろしゅうござりましょう。雑賀の孫一も、面目をほどこしてござる」

岸和田城主である蜂屋伯耆は、そういって雑賀衆との対面をそそくさと切り上げさせると、信孝を城内の客殿に招きいれ、上座にすえた。

岸和田城は、本丸の西側が海に面しており、すぐ近くにある湊を押さえるばかりか、紀州街道も扼する要衝である。

蜂屋伯耆は古くからあるこの城を整備し、いまだ向背定かならぬ紀州の国人たちににらみをきかせていた。

明後日の船出について手短に打ち合わせたあと、蜂屋伯耆は、

「では、戦勝を祈って、一献差しあげまする」

と宣して酒宴をはじめた。

戦勝の前祝いという酒宴は豪勢なもので、膳には山海の珍味をそろえ、初献から御太刀献上があり、二献で御馬献上、三献で御弓献上とつづいた。

蜂屋伯耆は、四国討伐軍の副将として信孝につけられている。

副将はふたりいて、もうひとりは織田家の宿老、惟住五郎左（丹羽長秀）である。蜂屋は惟住五郎左に張り合って、自分に取り入ろうとしているようだと信孝は察していた。

永禄年間に信長の母衣衆になったほどの古参部将ではあったが、蜂屋伯耆の出世は遅れていた。

母衣衆の同僚であった者たちが国持ち大名になり、大きな軍勢をひきいる中にあって、二年前にやっとこの岸和田城を得て、代官として和泉国をまかされたにすぎない。五十歳目前となったいま、信長の下での出世は限界にきたと悟って、信孝付きの宿老の地位を得ようと、近づいてきているのだろう。

白髪の目立つ鬢と皺の多い顔を愛想笑いでゆがめて信孝に近づき、酌をいたしまする、これ、つぎの膳を早くもて、と気を使う姿は、なんとも痛々しかった。

しかし理由はなんであれ、持ちあげられて信孝も悪い気はしない。そればかりか、

——大将となれば、こうもあつかいが違うものか。

とおどろいてもいた。

信孝は信長の三男とはいえ、伊勢国のうちに河曲、鈴鹿の二郡を領するだけで、ここまで大きな軍勢をひきいたこともなかった。

家督を継いだ長男の信忠はもとより、伊勢国南半分と伊賀の三郡を領する次兄の信雄にくらべても、ずいぶんと冷遇されていたといえる。

信孝は三男だが、あまたいる兄弟の中で、目鼻立ちがもっとも父の信長に似ていると言われていた。

自分では容貌だけでなく、強い性格と頭の回転の速さも父譲りだと自負し、ひそかに誇りに思っていた。嫡男で家督を相続している信忠はともかく、伊賀攻めで失敗した愚鈍な次兄、信雄に自分が劣るとは思えなかった。

しかし三男の悲しさで、兄二人とは待遇に大きな差がある。

おのれの実力を認めてもらうには、実績をあげるしかない。信孝は父信長に、はたらきの場を与えてくれるよう折を見ては申し入れていた。その願いがかなって、四国討伐軍の大将に任じられたのだ。

勝てば讃岐一国を領国として与えられる上、四国全土を管轄することになる。しかも、

「長宗我部など田舎侍にござれば、まず恐るるに足らずと思し召せ。気がかりは、どれほど早く片付けられるかにござる」

と蜂屋伯耆がいうように、敵となる長宗我部家はせいぜい四国の過半を領しているにすぎ

ず、いまや日本全土の半ばを支配下におさめる織田家との力の差は大きい。信孝が負けることは万にひとつも考えられない。出陣を前にして酒宴にうかれるのも、無理はない話だった。

うるさいことを言う老臣たちは、軍勢とともに住吉の陣においてきたため、若い信孝を止める者はいない。酒宴は暗くなるまでつづき、灯をともすようになってからは遊女まで出てきて鼓、笛、琵琶の鳴り物が入り、飲めや歌えの大騒ぎとなった。

「いやあ、酔うた」

と信孝が酒宴を切りあげたのは、夜も更けて子の刻（午前零時）になろうかというころだった。

「おお、苦労、苦労」

客殿の広間を出たところに近習がふたり、膝をついていた。小柄で細面、口数の少ない上田六太夫と、大男で目も鼻も大きく、いかつい顔の山路段左衛門である。

子供のころからの遊び相手であり、成人してからは信孝の取次や使者としてはたらいている。合戦になれば、もちろん甲冑をつけて信孝の馬廻りをかためる。身辺の警固役も兼ねているから、信孝が乱痴気騒ぎをしていたあいだも、ふたりは酒も飲まずに控えていたのである。

「すっかり酔うたぞ。寝所はどこじゃ」

「あなたに支度してありまする。足許、お気をつけなされ」

六太夫が手にする指燭で足許を照らされながら、濡れ縁を歩く。客殿大広間の裏手、涼しい風が通る部屋に寝所が用意してあった。

部屋に入ると袴をぬぐのもそこそこに、すぐに寝入ってしまった。
翌日、目覚めたときには、すっかり陽が高くなっていた。
「やれ、寝過ごしたわい」
とこぼしつつ手水をつかい、あわただしく朝餉の膳に向かった。まだ昨夜の酒が残っていて、頭がふらふらする。それでも箸をもつなり、
「馬の支度をしておけ」
と命じた。なにしろ出陣は明日なのだ。今日は住吉にもどり、軍勢のととのい具合を見なければならない。
信孝の軍勢は一万五千といっても、その内実は複雑だった。
信孝の所領は伊勢国のうち二郡しかないから、本来の手勢はわずか千ほどでしかない。
あとは領内の、侍でもない十五歳以上六十歳以下の男どもを根こそぎ動員したり、伊勢ばかりか若狭、丹波といった国から牢人衆をあつめたり、兄の信雄から軍勢を借りたり、とあちこちから人数を寄せあつめ、そこに副将の蜂屋伯耆と惟住五郎左の軍勢を合わせて、ようやく一万五千になっているのだ。
寄せあつめだから、兵をひきいる物頭たちも互いに知らぬ者ばかりだ。信孝の老臣のいうことなど聞かない。軍勢を統制するためには、信孝がみずから姿を見せ、その場で下知をくだす必要があった。

酔いの醒めない身体には、胡麻塩を添えた粥がうまい。粥をおかわりし、香の物をかじってさらに一膳を平らげ、茶を喫してほっと一服した。
すでに午刻（正午）はすぎている。いくら何でも寝過ごしたと後悔しているところに、上田六太夫が困ったような顔をしてあらわれ、平伏した。そして顔をあげると小声で告げた。
「ちと妙なうわさが立っておりますようで。お耳に入ればやと思いまして」
「何じゃ」
六太夫はふだんから悲しげな顔をしている上、はたらきぶりもぱっとしない。命じられたことは愚直なほど忠実にこなすが、それ以上のはたらきをする頭の冴えも気配りもない男だ。近習の中では叱責されることが一番多い男でもある。小柄なので戦場で手柄を立てそうにもない。
そんな者の言うことだからと、信孝は鷹揚にかまえ、ぬるい茶をずずとすすった。
「それが……。今朝、下京で煙があがっていた、鉄砲の音も聞こえたと、京から来た者が申している由で」
「京で煙？　それがどうした。火事か」
京と岸和田のあいだは十数里（五、六十キロ）離れていて、馬を目一杯に飛ばしても二、三刻（四〜六時間）はかかる。うわさが事実なら、うんと早朝の話だ。
「よほど大きな火事と思われまする。京には一昨日より、上様がお泊まりになっておるはずで。されば、上様の身の上が……」

「わかった。苦労」
言い切ると、六太夫は叩頭して下がった。
やはりつまらぬ話だ。火事くらいなら、父には大勢の供廻りがいるのだから、こちらが心配することもない。
――いや、待てよ。
埒もないと思ったが、父の宿所が火事になることも、あり得ないことではない。
本当であれば、見舞いに駆けつけねばならないか。焼け出された父の許へ一番に駆けつければ、覚えがめでたくなるはずだ。
しかし、明日の出陣は決まっているから、遅らせるわけにもいかない。少々迷ったが、やはり出陣支度が先だと思い、住吉へもどるべく支度をすすめた。
いざ岸和田城を出ようとすると、大男の山路段左衛門が血相を変えてあらわれた。
「殿、一大事にござる」
「なんじゃ、どうかしたか」
段左衛門はその身体つきにふさわしく大器者で、仕事にも抜け目がない。六太夫とちがって、言うことに耳を傾ける価値があった。
「本能寺が攻められ、焼け落ちたそうな。攻めたのは惟任の手の者と申しまするぞ！」
「ああ？」
すぐには意味が呑み込めなかった。攻められた？　惟任の手の者？

惟任とは惟任日向守光秀だ。中国筋へ出陣するよう命じられているはずだが……。
「本能寺には、父上が泊まっていたのではなかったか」
「さようで。上様がおわす」
見れば段左衛門の目は大きく見開かれ、口の端には泡がついている。暑苦しい顔だと思った。
「こら段左衛門、滅多なことを申すな。なぜ惟任が……」
あまりに馬鹿馬鹿しい話なのでむっとして言い返すと、段左衛門はさらに声を張りあげた。
「本能寺が、焼け落ちてござる。惟任の謀叛にござる！　上様は御生害だそうな。殿、上様が御生害と申しまするぞ」
「まことか！」
これにはおどろき、思わず叫んでいた。
父が……、死んだと。
惟任が、謀叛だと。
「段左衛門、それはまことか。誰が申した」
信孝の問いに、段左衛門からは一段と大きな声が返ってきた。
「たったいま、京からわが一族の者が駆けつけて来て、申しておりまする」
あまりの衝撃に、頭の中が真っ白になった。父が死ぬなど、とても信じられなかった。それにこの半月ほどを思い返してみても、惟任日向守が謀叛を起こす兆候などまったくなかったで

はないか。
「うそと思し召すなら、誰か物見に出されませ。馬ならば一日でもどって来ましょうに」
言われるまでもなく、確かめずにはいられない。
「だ、誰ぞ走らせよ。六太夫、ああいや、六太夫ではつとまらぬ。誰か、すぐに出立せよ」
しかし、あわてて城から出発した近習の帰着を待つまでもなかった。
「惟任謀叛！」
「本能寺ばかりか、岐阜殿（信忠）が籠もった二条御所まで焼け落ちた」
といった報告が、次々と岸和田城にもたらされた。中には、
「本能寺を囲んだ惟任の水色桔梗（ききょう）の旗をこの目で見た」
という者もいた。
岸和田城内も騒がしくなった。住吉の陣からも、老臣らが使者をよこしてうわさを伝え、指示を仰いできた。
もう疑いようがなかった。
「惟任めが、大恩を忘れて謀叛か！」
惟任の謀叛、父の死。
信孝はしばしその場で動けなくなった。
だが意外なほど悲しみは感じなかった。もともと甘い父ではなかったし、母が側室ということもあって、父とともに過ごした時間は長くなく、思い出といっても、胸を焦がすようなものはない。
一時のおどろきが去って心中に湧き起こったのは、悲しみでも怒りでもなく、野心だった。
父と長兄が死んだとあれば、織田家の跡継ぎは次兄の信雄か、三男の信孝しかあり得ないではないか。
天下人になれる！
伊勢二郡の領主から、四国の主になれるだけでも幸運だと思っていたのに、一気に天下人へと飛躍する機会がめぐってきたのだ。
そこまで考えると、顔が熱くなった。動悸がして、こめかみにまで脈動が感じられるほどになった。
「されば、父の弔（とむら）い合戦じゃ！」
信孝はいきり立った。

二

だが、信孝に弔い合戦はできなかった。
まず手許に軍勢がいなかった。岸和田には近習しか連れてきていないのだ。軍勢は五里はなれた住吉においてある。
すぐにも住吉にもどろうとしたが、段左衛門がとめた。

「住吉の軍勢には牢人衆や丹波の兵もおり、油断はなりませぬぞ。まずは身の回りを固めてしかるべきかと」

言われてみればその通りだった。寄せあつめの一万五千の中には、光秀の領国である丹波や近江の牢人衆もいるし、伊勢の者とて、自分の領地以外からあつめた者には、光秀に味方しそうな者もいる。

しかも父と兄が討たれた直後である。織田家の三男である自分も、光秀に狙われていると考えるべきだった。

「まずは住吉のようすをうかがうにしかず。忠義の者ならば残っておるはず」

と段左衛門がいうので、近習のひとりを走らせると、果たして住吉の陣にも本能寺の変は伝わっており、あわてて陣をたたんで本国へ帰る者、光秀勢に加わろうとする者、とにかくその場から逃げようとする者などで混乱し、とどまって信孝の下知を待とうとする者は、伊勢の自領からひきいてきた手勢ばかりだという。

「残っておる者は、まず千ほどかと」

その言葉に信孝は身震いした。惟任勢はまず一万以上と見なければならない。もしここに惟任勢が攻めてきたら、千の軍勢など一撃で木っ端微塵にされ、信孝は父や兄のようにあっさりと討たれるだろう。

とはいえ家臣をほうっておくわけにもいかない。その上、岸和田の城も安全とはいえなかった。蜂屋の動きがあやしいのだ。こちらになにも告げずに兵をあつめているらしい。光秀すら

謀叛をするのである。もし蜂屋がその気になれば、こちらはひとたまりもない。

疑心暗鬼に駆られた信孝は、逃げるように岸和田城を出た。

住吉に着いたときには、暮色が濃くなっていた。

一万五千の軍勢が野陣を敷いていた地はがらんとしていて、ひときわ大きな信孝の陣旗が立つあたりに、手勢である千の兵ばかりが心細げにとどまっていた。岡本太郎右衛門、坂仙斎といった老臣たちは、信孝の顔を見るとほっとしたような表情を見せた。

――役立たずめ。

信孝は不機嫌になった。一万五千の兵が千に減ったのも、老臣どもが無能だからだと思えてならない。陣を離れぬよう説き聞かせるなり、信長の死を隠すなり、手だてはあったはずだ。

だが老臣たちを叱り飛ばすのはあとだ。いまは自分の居場所を確保するのが先決だ。

「さて、これからどうする」

幔幕を張り巡らした本陣で、信孝は老臣たちをあつめて相談した。

父、信長が伊勢を武力で平定したとき、信孝は十一歳だった。信長は降伏してきた伊勢の豪族、神戸氏の家督を乗っ取るつもりで、その養嗣子として信孝を押し込んだ。信孝は家臣団に守られて神戸城に入ったのだが、そのときに信長からつけられた者たちが、岡本らである。

子供のころから面倒を見てもらった者たちだが、二十五歳となったいまでは、口うるさい親のようで煩わしくて仕方がない。しかも合戦となればさほど役には立たない。播磨の神吉城を攻めたときは、老臣たちの手ぬるさにじれてしまい、信孝みずから足軽と先を争って敵に突

っ込んだものだ。
だから大きな期待はしていないが、ほかに相談する者もいない。とりあえず意見を言わせてみた。
「かくなれば、まずは大坂へ向かうがよろしゅうござる。あの城は一万や二万の軍勢では落ちませぬ」
老臣を代表して、岡本太郎右衛門が言った。信孝が生まれたときから付き従い、親代わりという顔をしている男だ。
「大坂？」
言われてみれば大坂城は、このあたりでもっとも堅固な城であり、それだけに安全な場所だと思われた。
大坂には以前、一向宗（いっこうしゅう）の本拠である本願寺があったが、信長が大軍と長い年月をかけて攻め潰した。いまはその跡地に城をおいている。城下には大きな町があり、人も多い。
「しかしあそこには惟住五郎左がいるぞ。五郎左は大丈夫か」
四国攻めのために信孝につけられた副将のひとり、惟住五郎左は大坂から出陣する手筈になっていて、いま大坂城にいるはずだ。おなじ織田家宿老の光秀が謀叛を起こしたというのに、惟住は信用できるだろうか。
「惟住さまはご譜代（ふだい）のお家筋ゆえ、光秀のようなことはありますまい」
老臣たちは口々に言う。

「されば汝（なんじ）、先に行ってようすを見てまいれ」
と六太夫に命じておいて、信孝一行はひとまずその場で夜を明かした。城でも砦でもない場所での野営は、なんとも心細いものだったが、この際、仕方がない。
一夜明けた三日の朝、きのう京へ行かせた近習がようやくもどってきた。
十数里の道を馬を飛ばして一昼夜で往復した近習は、泥を跳ね散らした小袖姿で信孝の前にふらふらと膝をつき、報告した。
「本能寺と二条御所、惟任の軍勢に攻められ、焼け落ちてござる。上様と岐阜中将さま（信忠）は行方が知れず、お腹を召して建物とともに灰になったとのうわさにござりまする」
と、まずは昨日の一報を裏付けておいて、さらにつづけた。
「その後、惟任の軍勢が織田家の馬廻り衆をさがして洛中の家々に踏み込み、もっての外の騒ぎとなっておりましたが、昼過ぎにはおさまり、惟任の軍勢は近江へと去ってござりまする」
「近江へ行ったか。間違いないか」
老臣のひとりが確かめた。ここは大切なところである。
「は、この目にて三条大路を東へ行く軍勢を見ておりますれば」
であれば、しばらくはこちらへ来ることはない。まずはほっとした。周囲で聞いていた老臣たちも、いっせいに明るい顔になった。
「光秀めは、安土を目指したのではありますまいか」
と段左衛門が口をはさんだ。

「安土を押さえて、天下に覇を唱えるつもりか。許せぬな」
　と憤ってみても、いまの信孝に光秀を阻む手段はない。
「上様が討たれたとなれば安土は空城ゆえ、すぐに落ちましょう。岐阜城もしかり。近江と美濃を押さえたあと、光秀めは畿内を押さえようとするに違いありませぬ」
　段左衛門は恐ろしいことを言う。
「早ければ数日で、こちらに軍勢を向けてきましょうに。われらも早く大坂城に入り、迎え撃つ算段をせねば」
　と急かす。信孝はあせったが、ようすを見に行かせた六太夫は、なかなかもどってこない。住吉から大坂城までは二里ほどだから、馬を飛ばせば半刻（一時間）で往復できるはずだ。
「あやつ、やはり鈍いな。それがしが行っておれば、いまごろは片がついておろうに」
　と段左衛門は六太夫をけなす。機転の利かない六太夫を出したのがまちがいだったかと悔やんだが、いまはもう待つしかない。
　じりじりして待つ信孝のもとへ六太夫がもどってきたのは、申の刻（午後四時）近くだった。
「遅いぞ六太夫、なにをしておった」
　つい叱責する口調になる。
「それが、信澄さまが、われらを城に入れまいとしておられるようで……」
　と六太夫は貧相な顔を赤くして訴える。

　大坂城には惟住五郎左のほか、信長の甥である織田信澄がいて、大坂の城代として町をおさめているのだ。
「信澄どのが？　なぜじゃ」
「さもあろうて。信澄どのは、光秀の婿じゃ」
　と岡本太郎右衛門が鋭く口をはさんだ。
　信澄は光秀の娘を娶っていて、縁戚になっているのだ。
「それに、ご存じか。信澄どのは上様に父親を討ちとられてござる」
　いまから二十五年前の永禄元年（一五五八）、尾張を統一する過程で、信長は信澄の父で、自分の弟である織田信勝を討っていた。生まれたばかりだった信澄は、柴田勝家にひきとられ、育てられたのだ。昔の話だが、老臣どもはよく知っていた。
「その恨みをここまでもってきたと申すか」
「御意。信澄どのは光秀と結託しておるに違いなし」
　何の証拠もないはずなのに、岡本太郎右衛門はそう決めつけ、自信ありげにうなずいた。
「されば、信澄どのも謀叛を起こした者の一味ということになり申す」
「仇を討たれるのが恐ろしくて、おれを大坂の城に入れぬようにしているのか……」
　信孝は額の汗をぬぐった。信澄は同い年で、いとこにあたる。不安はさらに大きくふくらんだ。親族まで信用できないとは、まったく誰を信じたらいいのだろうか。
「されば惟住五郎左は、何と申しておる」

「は。かくなれば信澄どのを討ち申すよりないと」
重いことを告げる六太夫の目は赤い。老臣たちも赤い目とやつれた顔をしている。みなこの二日ほど、十分に寝ていないのだ。その赤い目がひたと信孝を見詰めてくる。
「光秀ではなく、いとこを討つのか」
どこかおかしい、と信孝の直感は訴えてくる。父の跡取りとして天下を狙うのではなかったのか。父の仇を討つどころか、親戚同士で殺し合いをしていていいのか。
だが突き詰めて考えはしなかった。いまはこの身を守ることが一番の大事だ。そのためには大坂城に入るしかない。
まずは大坂の町まで行くことにした。千の軍勢に守られながら、信孝は暮れかかる紀州街道を北へと向かった。

三

翌六月四日は、城に入れないままにすぎた。
大坂城では本丸に惟住五郎左がおり、二の丸に信澄が籠もっていた。
信澄が信孝を恐れているのは本当で、城内で家来どもを走らせ、信孝を城に入れないよう惟住五郎左に強く懇願（こんがん）しているという。
惟住五郎左にしても信澄は主筋にあたるから、なかなか頼みを断り切れない。さりとて信孝

も主筋で、それも織田家の序列からすれば信澄より上だ。こちらの頼みも断れず、板挟みになって困り果てている、といった状況だった。
「なにせ二の丸は千貫櫓（せんがんやぐら）といわれるほどで」
と六太夫は言う。以前、ここに籠もった一向宗徒を織田勢が攻めていたとき、この二の丸の地にあった櫓は銃火を縦横に放って織田勢を苦しめた。そこで、千貫文払ってもあの櫓を得たいという話ができたという。だから千貫櫓とよばれている。
「備えが堅く、人数をもって籠もられればなかなか攻められませぬ。五郎左どのもあつかいかねておりまして」
五郎左は信孝に好意的で、信澄を討つ気はあるのだが、おのれの兵だけでは討つ自信がないらしい。かといって信孝の兵を城内に引き入れようとすれば、察知した信澄の家来たちがたちまち門を閉ざしてしまうだろう。
「ではいつまでも城に入れぬのか」
信孝は声を荒らげた。六太夫は畏（おそ）れいったというように平伏したが、横から段左衛門が口を出した。
「もうしばらくお待ちくだされ。一計を案じておりますれば」
殿にもひとつ狂言を演じてもらわねばなりませぬ、と言う。
「狂言？　おれがか」
この慌ただしいときに狂言とはどういうことかと信孝は首をひねったが、その狂言を演ずる

機会は、翌日にやってきた。

大坂城は、南側が低く北側が高い台地の北端にある。城のすぐ北側が台地の最高地点となっており、その先は崖となって淀川へ落ち込んでいる。そして崖下に淀川に面した湊があり、京へのぼる舟の発着場となっていた。

信孝は、五日の朝、家来百名あまりをつれてその湊に姿を見せた。舟でこの大坂を去り、淀川をさかのぼって大和国に至り、さらに山越えをして伊勢へ帰るとの触れ込みだった。

城方へも通告してあったので、惟住五郎左の家来が数十名も見送りに出ていた。少数ながら信澄の家来たちも来ていた。

ところが、そこで信孝の家来と五郎左の家来とが言い争いをはじめた。

ふたりの口論は、しだいに大声の罵り合いになり、やがて大勢を巻き込んでの喧嘩へと発展していった。

みな刀をおびていたのはもちろん、信孝の家臣たちは槍や弓矢までもっていたからたまらない。百人対数十人の合戦のようになった。しかも優劣はすぐに明らかになった。人数に劣る五郎左の家来衆が打ち負けて、湊から城へ向かって逃げ出したのだ。

城の北門はすぐそこである。

逃げた家来たちが殺到してきたので、城内にいた五郎左の家来が門を開けた。

信澄の家来が止める間もなく、百数十名の、抜刀した武者たちが敵味方いっしょくたになって城内へなだれ込んだ。

すると喧嘩はそこで止まった。

怒鳴り合い、刀の切っ先を向け合っていた者たちは、刀を下ろすと目を合わせ、

「さあて、二の丸はどこじゃ」

と言いだした。

「二の丸は、こなたじゃ」

と声がかかり、五郎左の家来が率先して駆け出した。その動きを追って、百数十名の殺気立った武者たちが二の丸へ向かった。

湊での口論と喧嘩は、信孝の家来が城内へ入るための狂言だったのである。

武者たちはそのまま櫓へ押し寄せ、中へ入るのを防ごうとする信澄の家来たちと斬り合いになった。

不意を突かれた形となった信澄の家来たちは人数も足りず、気構えもできていない。たちまち斬り伏せられ、五郎左・信孝連合軍に櫓の中への侵入を許してしまった。

その時、織田信澄は櫓の最上階にいた。

本能寺の変が明らかになって以来、光秀の一味として討たれることを恐れ、そこに籠もっていたのだ。

あわれ信澄は、まっさきに最上階までのぼってきた五郎左の家臣、上田佐太郎という者に討ちとられ、二十五歳の生涯を閉じたのだった。その首はあとで堺へ送られ、家来ふたりの首とともに晒された。

これで信孝は、やっと大坂城に入ることができた。

「ようこそお越しくだされた」

と惟住五郎左は、本丸の御座所に信孝を迎え入れ、上座にすえるとその前に手をついて挨拶した。

これだけの大騒ぎをしておいて、ようこそお越しもないものだと思ったが、それは口にせず、

「五郎左、父上の弔い合戦の手配りをせえ」

と信孝は命じた。これで身の安全は確保できたのだから、つぎは攻勢に出る番だった。

しかし惟住五郎左は首をふった。

「おそれながら、大坂の兵だけでは光秀めにかないませぬ」

惟住五郎左と信孝の兵をあわせても、せいぜい二、三千ほどにしかならない。一万数千の光秀勢にはとても勝てない、という。

「ならば味方をふやせ。摂津、河内など、織田家恩顧の者を合わせれば一万や二万、すぐにあつまろう」

光秀の主殺しはあきらかだから、大義はこちらにある。信孝が父の弔い合戦をとなえて兵を募れば、味方につく者が続出するはずだ。信孝がそう言っても、

「いやあ、それもやすやすとは……」

と五郎左は口を濁す。

その言うところはこうだった。もともと光秀は信長の手足として畿内を管轄していたので、畿内近国に所領をもつ者は、光秀の息がかかった者が多い。たとえば摂津に所領をもつ中川瀬兵衛と高山右近などは、光秀の寄騎として合戦に出たことが多いので、今回も光秀に手を貸すだろうし、大和一円を支配する筒井順慶も、所領の検地などで光秀の世話になっている。丹後の細川忠興は光秀の婿になっているから、光秀側につくに違いない。

聞いているうちに信孝は腹が立ってきた。

——どいつもこいつも、父が生きていたうちは忠義面をしておいて、死んだ途端に掌を返すのか。

中川や高山らも、声をかけてみなければどちらに味方するかわからないではないか。五郎左は光秀をおそれて、立場をあいまいにしようとしているのではないのか。

「ともかく使者を出せ！」

自分が声をかければ、中川らは従うはずだとの自信があった。

さっそく右筆を動員して使者にもたせる文書を書かせ、近習らを各所に派遣した。

これは時間との戦いだった。光秀はまだ近江に留まっているようだが、いつ摂津へ来るかわからない。いくら大坂の堅城に拠るとしても、光秀の一万数千の軍勢に対して二、三千の手勢では勝ち目がない。

そうこうするうちに六月六日がすぎ、さして動きがないまま七日も終わった。

案に相違して八日になっても摂津、河内の領主たちは旗幟を鮮明にせず、信孝の手勢はまっ

たく増えていなかった。惟任勢一万数千の力に、みな怯えているようだ。

「これではならぬ。惟任めにやられるぞ」

信孝ばかりか、老臣や近習たちのあいだにも焦りの色が濃くなってきた。

さらに説得の使者を出そうとしたとき、意外な知らせが飛び込んできた。

「羽柴筑前守が、二万の兵をつれて姫路に着いたそうな」

これにはみな仰天した。

羽柴秀吉は、毛利の大軍と高松城をはさんでにらみ合っていたはずだ。

なぜこんなに早く姫路までもどって来られたのか、なぜ引き揚げの際に毛利に追い打ちをかけられずにすんだのか、まったくもって不思議だった。

だが誤報ではない証拠に、九日には秀吉からの書状が大坂城にも届いた。そこには、

——上様の仇討ちをするために毛利勢と和して上洛を急いだ、弔い合戦の総大将は信孝どのしかあり得ない、ぜひとも十一日に摂津の尼崎まで来られたし。

とあった。

秀吉が二万なら、信孝と五郎左、それに摂津の諸将の軍勢を合わせれば、三万にはなるだろう。光秀の軍勢の二倍以上だ。

「ようございました。さっそく返事をしたためましょう」

と老臣たちは秀吉の出現を大いに喜び、戦う前なのに勝った気でいる。秀吉の軍勢に加わるのも、当然と言いたげだ。

なんの苦労もなく兵力を得て、討たれるおそれが消えたどころか勝ちさえ見えてきたのだから、信孝にとっても悪い話ではない。秀吉の誘いを拒むことなど、考えられない。

信孝は五郎左とともに尼崎へ出向いた。

四

その後は、さまざまなことが一気に起きた。

秀吉と尼崎で会合した翌々日に、京の南、山崎の地で光秀の軍勢と合戦をし、光秀勢をさんざんに打ち負かした。負けた光秀勢は四散し、こちらの軍勢は逃げる敵を追って数千の首をあげた。翌日には光秀の首も信孝の前にすえられた。

信孝はみごとに父の仇を討ったのだ。

だが喜ぶのは早かった。父の弔い合戦の終わりは、織田家の後継者争いのはじまりだった。

この間、次兄の信雄は領国の伊勢にとどまったまま、何もできなかった。変の一報をうけて近江に向け兵を出したらしいが、途中、伊賀で一揆にはばまれ、進めなかったのだ。

信雄勢が安土に達したのは、光秀が討たれたあとだった。しかも何をあわてたのか、せっかく無事手に入れた安土城を失火によって焼いてしまった。

馬鹿にもほどがあると信孝は思った。

信雄のほうが兄で、母が信長の正妻格だったとはいえ、年齢は信孝もおなじであるし、信孝

は父の弔い合戦をした身である。自分にも十分、織田家を継ぐ資格はあると思う。
とはいえ、信雄も織田家の総領の座を継ぐ気は満々で、ゆずる気配は見せない。
信雄は安土に、信孝は京に、それぞれ軍勢をおき、にらみ合ったまま日が過ぎていった。
そのあいだに事態は動いていった。六月二十七日、尾張の清洲城に織田家宿老衆があつまり、織田家の跡継ぎを定める会合をひらいたのだ。
にらみ合うふたりに業を煮やした宿老どもが勝手にやったことなので、この会合には信孝も信雄も出られなかった。しかし信孝は楽観していた。
織田家の宿老五人のうち、光秀と、関東にいていまだ生死の知れない滝川一益をのぞくと、残るは秀吉、五郎左、それに北国にいた柴田勝家の三人となる。うち秀吉と五郎左はともに弔い合戦を戦った仲だし、残る柴田勝家は信孝の烏帽子親だ。三人とも信孝を支持してくれるに違いないと思っていた。
だが会合は、信孝にとってはまったく不本意な結果に落ち着いた。
織田の家督は、信孝でも信雄でもなく、信忠の子で二歳の三法師が継ぐというのだ。
その上、信孝には美濃国が、信雄には尾張国が遺産分けとして与えられたが、同時に秀吉は京をふくむ山城、河内、丹波の三国を領国として加えたから、秀吉の一人勝ちといってもいい内容だった。
これではいつ天下人になれるのかわからない。信孝は美濃国の主として岐阜城に入ったが、不満はつのる一方だった。

しかもおめでたいことに、このときにはまだ秀吉の本心にまったく気づいていなかった。
その後、十月に信長の葬儀を執り行うなど、秀吉は事実上の天下の主として、得手勝手にふるまうようになっていった。
——秀吉めは自分で天下を狙う気か。
葬儀の知らせを見てはたと気がつき、信孝は愕然とした。
そこで宿老のひとりで秀吉に対抗する力をもつ唯一の男、柴田勝家に近づき、秀吉に反発していったが、後手に回った分、非勢は否めなかった。
安土城の再建が成ったから、岐阜で養育していた三法師を安土によこせという秀吉の申し出をはねつけたのは、信長の葬儀の後のことだった。
拒んだとて、まさか主筋の自分に刃を向けることはあるまいと、秀吉の出方を甘く見ていたのだが、秀吉の動きは信孝の想像をはるかに超えてすばやく、また容赦なかった。
十二月には柴田勝家の所領である近江の長浜へ、ついで岐阜城に兵を差し向けてきた。周囲の出城を焼き払い、稲葉山上にある岐阜城を、本気で攻め落とそうとしたのだ。
このときの寄せ手には、あろうことか惟住五郎左と蜂屋伯耆が入っていた。
信孝にとって、これは衝撃だった。わずか半年前には、四国攻めの副将として自分の下についていた者たちが、秀吉の手先として牙をむいて攻めてきたのだ。
しかも敵勢は三万余りの大軍で、とてもかなわない。頼みの柴田勝家は領国の越前が雪で閉ざされ、出兵できないでいる。

結局どこからも援軍は来ず、降参するしかなかった。手許で養育していた三法師と、自分の母を人質に差し出して、やっと秀吉の許しを得た。

だが、こんなことで目の前にある天下をあきらめられるはずがない。

翌年二月、伊勢の滝川一益が反秀吉の旗をあげたのに乗じて、信孝も二度目の蜂起をした。勝家は三月、信孝らを助けるために北近江へ兵を出してきた。

これに対して秀吉は美濃と北近江を迅速に移動し、対抗した。そして四月になって賤ケ岳の合戦に勝ち、勝家を滅ぼした。

うしろ楯を失った信孝には、もう逆らう力は残っていない。それを見切ったように、秀吉に与した信雄が岐阜に攻め寄せてきた。

城下町を焼かれ城を囲まれて、二度目の降参となってしまった。そして所領も城もとりあげられ、この内海の野間に流されてきたのだが、それでもまだ、いずれ許されるだろうと信孝は思っていた。

なにしろ秀吉にとって信孝は主筋なのである。世間体を考えれば討てるはずがない。

だが野間の大御堂寺に着いてから、信孝はおそろしい話を聞いた。

昔、平治の乱にやぶれて京から逃れてきた源義朝が、家来である長田忠致にこの野間で討たれたという。ここは義朝の墓がある寺なのだと。

家来が主を討つ。秀吉の真意を悟り、信孝はぞっとしたが、見張られている身では逃げることも逆らうこともできない。

案の定、寺に着いた直後、信雄が切腹を命じてきた。

家臣の秀吉には無理でも、兄である信雄ならば信孝に死を命ずることができる。秀吉は信雄を隠れ蓑に使い、信孝を消しにかかったのだ。

いまや信孝には、腹を切るほか道はない。

むかしより主をうつみのまなれば
むくいをまてや羽柴筑前

この部屋へ来る前、紙もなかったので、鎧武者が背に負う母衣を切り破り、辞世の句を書いておいた。

義朝をだまし討ちにした長田忠致は、義朝の首を平家に差し出し、美濃と尾張を褒賞にのぞんだが、かなわなかった。その後、平家討伐に立ち上がった義朝の子、源頼朝に味方して、はたらきがあれば「ミノオワリを与える」との言質をもらったが、平家を討ったあと、その言葉のとおりに「身の終わり」を与えられた。すなわち斬首されたのである。

秀吉がそれを知っていれば、この辞世の句も味わいが深くなるというものだ。

板の間の床には、梅の木を描いた掛け軸がかかっている。

信孝はそれを見ながらこの一年の騒ぎをふり返る。

あの日、自分が岸和田でなく住吉の陣にいれば、一万五千の兵が散ることもなかった。その

まま光秀の軍勢に襲いかかり、秀吉より先に討つことができただろう。そうなれば天下は自分のものだったのに。
返す返すも無念でならない。人の運不運は、本当に紙一重の差で決まると思う。
だが悔いてももう遅い。すべて終わってしまったのだ。
信孝の胸の内には、恨みと悔やみの思いだけが沼底の泥のように溜まり、ふつふつと発酵している。
そこへ四十前後と見える男が顔を見せた。信雄に命じられ、検使（けんし）として来たという。敷居際で一礼し、部屋に入って壁際にすわった。
「されば、存分に」
と検使が宣した。いよいよ最期の時だ。
白い小袖に紺の袴をつけた若侍が、すっと立ち上がり、鉢巻きをしめてたすき掛けをした。その上で大刀を抜きはなって信孝の横に立った。
若侍は、上田六太夫（うえだろくだゆう）である。
ふと気づいた。
――こやつばかりは、裏切らなかった。
そう思うと、こみあげてくるものがある。
そもそも家来などは、誰一人として頼りにならないし信用もできない。
秀吉や、父信長を討った光秀は言うに及ばず、子供のころからの家来である老臣たちも、没

落する信孝を見限って、みな逃げ去ってしまった。世にいう忠義などというものが、いかにむなしいものかと思い知らされた気がする。家来ばかりか、血を分けた兄弟である信雄までが裏切ってくれた。
それなのに、わずかな禄しか与えなかった近習が最後まで忠誠を尽くしてくれるとは……。
近習の中でも才覚自慢だった段左衛門は、ここへ来る途中で行方をくらましている。はたらきが鈍いと叱責し通しだった六太夫が、よくぞついてきてくれたものだ。
人は、失ってはじめて何が大切であったかを知るというが、信孝は死に臨んで、ようやく誰が忠臣であったかを知ったと思った。
「ようしてくれたな。ありがたく思うぞ」
と言うと、
「はっ」
とひと言だけ返ってきた。横目で見ると、六太夫の目も赤くなっている。
――ああ、おれのために泣いてくれる者が、ここにひとりいる。
そう思うと目頭が熱くなった。あふれそうになる涙を抑えるのに苦労しなければならなかった。
「すまなかった」
信孝は、声を絞り出した。
「おのれのことばかりにかまけて、そなたら家来の行く末にまで思いが至らなんだ。せめてつ

ぎの奉公先を、手配りしておくべきであったな」
それは本心だった。
幼いころから家来に尽くされるのは当然と思って育ってきた。だが、家来が主人に尽くすのは当然ではないのだ。家禄という「御恩」をめあてに、家来は主人に奉公するだけなのだ。その御恩がなくても奉公してくれる家来こそ、まことの忠臣と言えるのだろう。
その忠臣に、いまの自分はなにも報いることができない。
信孝はたまらず嗚咽した。熱い涙が頬をつたって滴り落ち、板の間に黒いしみを作った。
六太夫も気持ちを抑えかねたとみえて、刀を提げたまま左手で目をぬぐっていたが、
「殿のお気遣い、まことに、まことにありがたく、六太夫、御恩は一生忘れませぬ」
というと、刀をほうりだしてすわり込んでしまった。検使もなにも言わない。しばらくの間、ふたりの嗚咽の声が部屋に満ちた。
「しかし、殿、心配は無用に願いまする。それがしの行く末など、気になされますな」
と六太夫はしゃくりあげながら言った。最後まであるじに心配をかけまいとする心づかいは神妙だと、さらに胸が熱くなったが、六太夫は妙に明るい声になってつづけた。
「それがし、見事に殿の首を打ち落とせば、信雄さまに召し抱えられることになっておりまする」
え、と信孝は思わず声を発した。
「城を追われた殿に、最期まで付き従った忠義の心は見事であると、信雄さまに認められまして。それがしは才覚浅く、戦場かせぎも苦手なれど、忠義の心ばかりは自慢でござる。禄もいくらか上積みされるとのお話にござれば、心配はご無用になされませ」
信孝は顔をあげて六太夫を見た。
そんな話は聞いていない。
おれの首をみやげに信雄に仕えるつもりか。忠義とは自慢するものなのか。
信孝の視線をはずすように、六太夫はひとつ息をついて手で赤い目をこすり、生真面目な声で言った。
「それがしのために切腹の場を乱し、面目ありませぬ。さあ、もうお心残りはありませぬか。されば、疾くつかまつりましょうぞ」
口を半開きにし、横目で睨む信孝と目を合わせないようにしつつ、六太夫はひろいあげた大刀を力強く振りあげた。

久々（きゅうきゅう）よ、怒れる武神、勝家を鎮めよ

一

――おお、間に合ったか。

馬廻り衆の数十騎だけをひきいて北国街道を駆けてきた堀久太郎秀政は、見通しが開けたところでほっとして兜をはねあげ、馬上から伸びあがってあたりを見渡した。

城下の町を焼いたのか、足羽川の対岸に黒煙が幾筋も立ちのぼっているが、鉄砲の音や鬨の声は聞こえない。

越前北ノ庄の広野には、代掻きが終わったばかりの黒々とした田や、麦の穂がのびた黄金色の畑がひろがっていた。

ところどころに青々と茂る林があり、そこに軍勢が数十騎ずつまとまって休んでいる。旗印を見ると多くは秀吉の旗本だが、前田利家や不破勝光ら、数日前まで敵だった者たちもいる。

愛宕山のふもとと頂上にも、白い旗指物が無数にたなびいている。軍勢の大半は、まだ足羽川を渡っていないようだ。

城攻めは、まだはじまっていない。

よかった。柴田どのは生きている。

秀吉の本陣は、足羽川の西岸、愛宕山とよばれる小高い丘の上にある。登り口をさがして

少々迷ったが、夕暮れ前には頂上に到着し、秀吉と顔を合わせていた。

「これは久々きゃあ、よう間に合った。夜にも城に攻めかけるでよ、そなたはわしについてくるがええだわ」

着陣の挨拶をすると、秀吉は持ち前の大声を浴びせかけてきた。

久々とは秀吉が久太郎を呼ぶときの愛称である。小姓として信長に仕えていた十代のころから秀吉とは昵懇だったため、三十歳を超えたいまも、秀吉からは小姓のような呼び方をされている。

「府中のほうは片づいたか。ああ?」

「は、家来どもに申しつけてまいりました」

「さようか。ま、押さえの兵さえ置いときゃあ、もはや襲われることはあらせんぎゃ」

この北ノ庄に攻め込む前に秀吉は、北近江の賤ケ岳で柴田勝家と一戦し、圧勝していた。逃げる勝家を追った秀吉は北国街道を北上し、途中で前田利家が守る越前府中の城を開かせ、降参した利家を先鋒として進軍してきたのだ。久太郎はその府中城を受けとり、城内の始末をつけてから、秀吉のあとを追ってきたのである。

陣中には前田利家もいたが、やはり降将の負い目があるのか、大きな身体をもてあますように隅のほうに床几をおき、しずかに腰かけている。見回せば秀吉の弟、羽柴秀長もいて、小姓たちに指示を与えている。

「ちょうどええ。こなたへ来やあせ」

久太郎は秀吉に連れられ、見晴らしのよい崖上に出た。
「見やあせ。あれが修理亮の城だわ。上様の安土城にも見劣りしやせん。ずいぶんと驕り高ぶったものだて」
秀吉の指さす方を見ると、支流が足羽川に流れ込むあたりに広い郭があり、中にひときわ高い建物が見えた。石蔵の上に築かれた五層の建物は、安土城の天主を思い起こさせる姿をしている。
「うわさには聞いておりましたが……」
「あのようなものを築く金穀があれば、もっと家来を抱え、領地を広げておけと申すだわ」
そういう秀吉自身は、つねに野戦の中にいて、壮大な城を築かずにここまできた。
「何であれ、ずいぶん広壮な城と見えまする」
「城下の町も、安土の二倍はあろう。上様が知れば叱りつけておったろうに」
眺め下ろす秀吉の声はきびしい。
久太郎はあらためて秀吉を見た。小柄な身体に縹糸で威した腹巻をつけ、頭には揉烏帽子。その顔は日焼けして赤黒く、年齢に似合わぬ深い皺が刻み込まれている。若いころから猿顔といわれてきたが、いまになってみれば猿なりに貫禄が出てきている。
「申しあげまする」
そこへ赤母衣を背につけた武者が走ってきた。膝をついて、告げる。
「城の外郭には敵兵は見当たらず。城の内側へつぼんだと見られまする」

「ほう。外郭を捨てたか」
秀吉は久太郎を見た。
「兵が足りぬのでしょう。あれだけの大きな城では、万を超す兵がないと外郭を守れませぬ」
「ふん。日ごろの驕りが命取りかや」
あくまで勝家を悪者にしたいようだ。
「ならばかまわぬわ。外郭を乗り崩し、本丸へ迫るまでや。さすればさっそく軍議だわ。物頭どもを呼べ」
近習に命じた秀吉は、あらためて勝家の城に向きなおり、腕組みをして見つづけた。城攻めのため、兵の配置を考えているのだろう。
陣中では母衣武者や近習たちがあわただしく行き交い、物頭や老臣たちが呼び合う声で騒がしくなってきた。
——最後の一戦か。
秀吉とならんで北ノ庄城を眺め下ろしているうちに、久太郎はある感慨にとらわれた。
日本中を盤に見立てて指されてきた壮大な将棋が、いま終わろうとしている。
盤面に勝家の駒はほとんどなく、玉である勝家は雪隠詰めにされて、とどめを刺されるばかりになっている。ここまでくれば、もう逆転もない。あとは勝家がいつ駒を投げるか、だ。
勝家としてはやり切れないだろう。この世に天道はないのか、と思っているにちがいない。
そう。柴田どのよ、貴殿は誠実だった。あくまで織田家を立てようとした。邪悪なのは、天

下を狙った秀吉のほうだ。
しかし織田家は隅に追いやられ、秀吉は勝ち誇り、忠誠を貫こうとした勝家は死の淵に追い詰められている。
これが現実の姿だ。
——筑前どのは、どう出るか。
人を殺すのは好きではない、と公言してきた秀吉である。いくら強敵だからといって、長年、おなじ織田家に仕えてきた柴田勝家を攻め殺すのはためらいがあるのだろう。
殺させてはならぬと思う。
たとえ武将としての生涯は終わっても、勝家には生きていてほしい。また織田家のために、いや天下のためにも、秀吉は勝家を生かしておくべきだと思う。
それにしても、今日は四月二十三日。
本能寺が焼けたあの日から、まだ一年もたっていない。
いまや上様も明智光秀もこの世に居らず、柴田勝家も生死の境目にいる。
なんという変わりようだろうか。

光秀の謀叛と上様御生害というおどろくべき一報に接したのは、備中高松城攻めの陣中だった。
信長の近習である久太郎は、秀吉の軍監を命じられて、数日前に到着したところだった。

それまでは安土城の信長の許にあって、上洛してきた家康の接待や、諸大名の申次などをして忙しくはたらいていたのだ。毛利本軍の来着を報じ、信長の出馬を乞う飛報が秀吉からきて、信長が出馬することとなったため、先行して備中の陣に来たのである。
秀吉の本陣は、高松城をのぞむ蛙ケ鼻の高台に築かれていた。そこで見た光景は、いまでも忘れていない。
陣の下から長大な堤が延びて水を堰き止め、忽然と茶色い湖が出現していた。その泥水の中に浮いている高松城の命脈が尽きかけているのは、久太郎にも一目でわかった。
開城の交渉が進んでいるとも聞いていたが、いくつかの点で膠着しており、信長が着くまでに打開できるとは思えなかった。また折からの五月雨で道がぬかるみ、人馬の動きもほとんど見られなかった。敵味方ともに動きようがなくなっていたのだ。だからこそ信長の出番だと納得したものだ。
そこへ、あの騒動だ。
夜更けのことであり、久太郎は寝ていたので、最初、秀吉がどのように反応したのかはわからない。真夜中に異変を伝える使者が来着したとは、あとで聞いたことだ。
まずは黒田官兵衛や蜂須賀彦右衛門など、腹心の家来たちだけで対策を練ったのだろう。そしてその夜のうちに、使僧に命じて毛利の陣とのあいだを往復させ、開城の交渉をまとめあげてしまった。
久太郎が一報を聞いたのは翌朝だった。そのときにはもう、高松城主が湖の上に舟をうか

べ、切腹することが決まっていた。
あきれるほどの早業である。
思えばこのとき、すでに秀吉の胸の内には、信長にかわって天下をとるまでの道筋が思い描かれていたのだろう。人の死を悼む気持ちや主君への忠誠心だけで、こうまで強引で迅速な行動はとれない。天下取りという大きな欲望に突き動かされたからこその荒技だった。
毛利家と和睦した秀吉は、さらに無茶な行動に出る。あとで「中国大返し」と秀吉自身が称するようになる撤収戦である。
舟の上で高松城主が切腹したのを見届けると、秀吉はすぐ撤兵にかかった。そしてみずから築いた堤を切り崩し、たまった水をあふれさせて周囲を泥沼と化し、毛利の追撃を阻止した。そこから自身の拠点である姫路城まで、大雨に見舞われながらの急行軍は、秀吉がいまも自慢するほどの激しさで、倒れる兵も続出したが、とにかく二、三日でほとんどの兵を撤収させてしまった。
姫路城に到着後、風呂に入り、強行軍の疲れをいやしたあと、秀吉が言った言葉が忘れられない。
「ここで籠城するつもりなんど、さらさらあらせんがや。これより大博奕を打ってお目にかけるだわ」
これを久太郎は、ただひたすら光秀を討つ決意の表明として聞いた。光秀は侮りがたい勢力であったし、京を押さえている以上、かなりの人数をあつめているだろうから、一か八かの危

うい戦いになるのは必至である。だから「博奕も成り目でありましょう」と応じ、秀吉を励ましたのである。
姫路城で休養し、蔵にあった金銀を将兵に分配して士気をあげると、秀吉は洛南の山崎まで軍勢を進め、そこで光秀を破った。
久太郎も、合戦では一手の大将としてはたらいた。
勝利のあと、秀吉に先鋒を命じられて光秀の居城、坂本城へ押しかけ、光秀の婿である明智弥平次に腹を切らせ、坂本城を焼き払って弔い合戦を終わらせたのも、久太郎である。
このころから、秀吉の態度が変わっていった。
久太郎はもちろん、山崎の合戦で活躍した中川瀬兵衛も高山右近も、織田家の家来という意味では秀吉と同格だった。秀吉も合戦の前までは同輩に対する礼儀をとっていた。だが合戦のあと、こうした者たちを秀吉はあたかも家来のようにあつかうようになった。中川瀬兵衛に対し、「瀬兵衛、骨折り」と声をかけ、主人のように振る舞ったのである。
秀吉のいう「大博奕」が、光秀を討ったあとで天下をも手に入れるという意味だと気づいたのは、うかつにもこのときからだった。
山崎の合戦は、表向きはあくまで亡き上様の弔い合戦だったが、同時に秀吉の天下取り合戦でもあった。いつの間にか巨大な力を得た秀吉を、久太郎はとまどいながら見ていた。

二

西の空がうっすらと茜に染まるころには、北ノ庄城は秀吉の大軍に取り囲まれていた。
「さあて、われらも出かけるとするかや」
秀吉に声をかけられ、久太郎も本陣の丘を下りた。
北ノ庄城が外郭の濠がわりにしている足羽川には、半分石造りで半分が木造という珍しい橋——九十九橋という——がかかっていた。長大な橋だが、これが手つかずで残っている。落とす暇がないほど秀吉の進撃が急だったのか、あるいは勝家はもう覚悟を決めていて、橋などはどうでもいいと思ったのか。とにかく秀吉と久太郎は橋を渡って対岸に着いた。
城下を町ごとぐるりと囲む土塁は高さ三間、濠の幅は十間以上あったが、そこに兵の姿はなかった。もしこの城に十分な兵力があれば、たとえ数万の兵で囲んでも、落とすには何カ月もかかっただろう。
だがいかなる堅城でも、守る兵がいなければただの土細工にすぎない。いま勝家に従っている兵は、どれほどいるだろうか。せいぜい二千か三千だろう。対して攻める秀吉の兵は、少なくとも二万には達している。
屈強な近習衆に守られ、秀吉と久太郎は外郭の中にはいった。
すでに戦いははじまっていた。鬨の声に鉄砲を放つすさまじい音がまじって、城下は騒然と

している。
「久々はなんと思うかや」
「は？」
「修理亮じゃ。あやつを生かしておくべきかや」
秀吉の大声は鉄砲の音にも劣らない。久太郎も負けじと大声を返した。
「それが穏便かと。柴田どのすら助命したとあれば、筑前どのの名声は不動のものとなり、いまは様子見をしている者どもも、今後は争って門前に馬を寄せてくるでしょうに」
「ふむ。久々もさように思うかや」
秀吉は不機嫌そうにだまり込んだ。
本陣での軍議では、物頭どもそれぞれの持ち場を決めたあと、勝家をどうするかという議論もあったのだ。
年若い者たちはとくに意見もないようだったが、織田家が尾張一国で争っていたころから仕えている老臣たちは、命だけは助けて高野山にでも追放すべしという者が多かった。尾張者にとって勝家は、やはり尊崇の念を抱くほどの武辺者なのだ。殺すにはしのびないと思っているのだろう。
秀吉はその点については曖昧にしたまま軍議を終わらせたのだが、いまだ決めかねているようだ。
——悩ましかろうな。

秀吉の胸中は、透けて見える。
秀吉の姓の羽柴は、丹羽長秀と柴田勝家から、その武威にあやかろうと一字ずつとってつけたものである。織田家中では勝家のほうがずっと格上であり、秀吉にとって目標となっていた男だ。そんな男を殺しては、寝覚めが悪かろう。
しかもふたりとも織田家の家来という立場は今もおなじで、ちがいといえば勝家は三男の信孝を、秀吉は次男の信雄を担いでいるだけだ。
江北の賤ヶ岳で勃発したこの合戦も、秀吉はさまざまに理屈をつけて自分の立場を正当化しているが、どれもとるに足りない理屈なのは天下周知である。
信長を殺した光秀を討つのは弔い合戦の大義名分があったが、勝家に対してはそんな名分がない。つまり勝家を殺すには、名分が足りない。ここで勝家を殺してしまうと、秀吉の織田家乗っ取りがあらわとなってしまう。それでは秀吉も光秀と変わらないではないかと、世間では見るだろう。
だからといって、勝家を生かしておいては安心できない。名だたる武辺者だから、いつまた兵をあつめ、叛旗をひるがえすか知れたものではない。勝家に与同する勢力も、まだまだ多いと見なければならない。
実利をとるか世間の評判をとるか、秀吉としては考えどころである。
そこへ母衣武者が走ってきた。
「城兵は二の丸、三の丸へ籠もり、しきりに鉄砲を撃ちかけておりまする。お味方は近寄れ

ず、手をつかねてござりまする」
秀吉は渋面を作り、一喝する。
「ええい、竹束を先に立てて寄せ、鉄砲衆に狭間を狙わせい。まずは小うるさき敵の鉄砲をだまらせるだわ」
秀吉の指図で大量の竹束が先陣に立てられた。足軽荒子がそれをもって前進する。鉄砲衆があとにつづき、濠ぎわまで寄せる。一方、槍足軽や武者たちは、濠を渡るための筏や小舟を用意している。対して城から放たれる鉄砲は、音ばかり盛んだが数が少なく、万を超す兵には焼け石に水と見える。
三の丸前の濠は幅が二十間ほどもあるが、濠ぎわまで進出した鉄砲衆にとって、二十間先の狭間はよい的である。竹束のあいだから銃身を突き出し、狙い撃ちする。たちまち狭間のまわりに煙がたちのぼり、沈黙する狭間がふえてゆく。
「いまじゃ、かかれ、かかれ、かかれ！」
秀吉の大音声に応じて押し太鼓が打たれ、法螺貝が吹かれた。武者たちが筏にのって濠を押し渡る。また大手門前にかけられた土橋に大勢の武者がむらがり寄せ、大槌で門を打ち壊しにかかった。
濠の石垣をよじ登る武者たちが、獲物にたかる蟻のように見える。武者たちは塀を乗り越え、喊声をあげて三の丸の内に躍り込む。
圧倒的な人数の秀吉勢に攻め込まれた三の丸は、かなわぬと見た守兵の手によって火がかけ

られ、暗くなる前に焼け落ちた。軍勢はつづいて二の丸に攻めかかった。守兵はほとんど抵抗せずに本丸に逃げ込み、三の丸につづいて秀吉勢が占拠するところとなった。
だが天守をかかえる本丸は頑強に抵抗した。いくら鉄砲を撃ち込んでも、矢弾が返ってくる。武者たちは近づけない。攻めあぐねて、周囲を取り巻いたまま夜になった。
「ふん。一日もちこたえたか」
秀吉はつまらなさそうに言うと、兵たちにその場で野営の支度を命じ、
「明日は寅の刻（午前四時）にはじめるぞ。それまでよう休んでおくだわ」
と告げてから、自身は本陣とした愛宕山へもどった。
本陣では、夕餉としてあたたかい飯と酒が出た。賤ヶ岳で一戦し、敗走する勝家の軍勢を追いはじめたのが四月二十一日だから、今日で三日目になる。久太郎も行軍するのに急で、ろくな飯を口にしていなかった。胃の腑があたたまって、ようやく人心地がついた。
本陣にはひっきりなしに母衣武者が出入りして、前線の様子を伝える。すでに夜半であり、もう敵も寝静まっているだろうと思いきや、そうではなかった。
「天守よりは、笑いさざめく声ばかりか、歌声や、管弦の音まで聞こえてきまする」
と、ある母衣武者は不思議そうな顔で告げた。
「別れの宴だがや。修理亮は覚悟を決めたと見えるの」
眠そうな顔で秀吉はもらした。そして大きくあくびをすると、
「どれ、大事の前だで、少しは眠るきゃあ。明日は一番鶏で起こしてくりゃれ」

と近習に告げ、幔幕の奥に消えた。
――別れの宴か……。
やはり勝家は死ぬつもりだろうか。勝家を救う手だてはもうないのか。
どうしてこんな結果になってしまったのだろうか。
久太郎は、昨年六月、清洲城で行われた会合を思い出していた。

三

秀吉と勝家、それに丹羽長秀（惟住五郎左）、池田恒興の織田家宿老四人が清洲城にあつまったのは、昨年の六月二十七日、洛南の山崎で明智光秀を討ち果たしてから十数日のちのことだった。
会合の目的は、信長と信忠亡きあとの織田家をいかにするか、である。
久太郎は宿老ではないが、山崎の合戦で主君の仇を討った殊勲の者であり、また信長の近習の筆頭格だったので、口は挟まなかったが、会合には出ていた。
宿老衆の筆頭である勝家の呼びかけで行われた会合だったが、清洲城に場所が設定された時点で、ほぼ秀吉の思惑どおりになることが決まったと、久太郎は見ていた。
なぜ信長の居城があった安土でなく――城は焼け落ちていたが――、信忠の岐阜でもなく、清洲で会合を開いたのか。

それは会合がはじまってすぐに明らかになった。

会合の最初の議題は、織田家の跡取りを誰にするかだった。信長の嫡男、信忠が亡くなっても、次男信雄、三男信孝が生きている。どちらも自分こそ織田家を継ぐ者と意気込んでいた。織田家の跡取りとなれば、すなわち天下人である。それだけにどちらもゆずる気配はなく、どのように決着がつくのか、誰にも見通せなかった。

世間の評判では、信孝のほうが器量があり、くらべて信雄は暗愚であるとされていた。

信雄は過去に伊賀攻めに失敗して信長に叱責されたことがあり、また今回も安土城に近い伊勢にいながら光秀討伐に間に合わず、それどころか光秀滅亡のあとに安土城を占拠しながら、あやまって火を出し、あの特徴ある天主を焼失してしまうなど失態が目立っていたからだ。

そして信孝は勝家と親しかった。信孝が元服したとき、加冠の儀を行ったのは勝家である。それ以降、勝家は信孝の後見人という立場にあったのだ。

会合では、勝家は当然のように信孝を推した。器量があるのだから織田家の跡取りにふさわしいという論理だった。器量といわれると信雄は苦しい。

信孝が織田家の跡取りとなると、勝家の勢力が増すだろう。対抗上、秀吉は信雄を推すかと思われたが、そうではなかった。信雄でも信孝でもなく、信忠の一子、わずか二歳の三法師を推したのである。

織田家の正嫡が信忠であり、その信忠の嫡男三法師こそが織田家の跡取りにふさわしいという論理だった。

信忠の城、岐阜城で育てられていた三法師は、このとき清洲城に避難していたのだ。

秀吉は三法師をみなの前に連れて来させ、膝に抱いて披露した。二歳といえど正嫡が現にいるという事実の前に、信孝を推した勝家は沈黙せざるを得なかった。

結局、信孝と信雄の争いを避けるという意味でも有用と認められ、三法師が跡取りと決まった。久太郎はその場で三法師の蔵入り地の代官に指名された。つまり織田家の正嫡、三法師の守り役になったといえる。

名誉なことであると思い、久太郎は慎んでこの役を請けた。いまや崩壊しつつある織田家のために、できることは何でもするつもりだった。

そのあとで光秀や信長、信忠の遺領の配分が行われた。光秀を討つのに何の功もなかった勝家に、秀吉は自分の領地である長浜を渡し、自身はいままでの所領、播磨に山城、河内、丹波を加えた。信孝は美濃国、信雄は尾張国をそれぞれ領有すると決められた。久太郎も佐和山の城と二十万石を得たが、そんなことは大きな問題ではなかった。

三法師という二歳の、つまり事実上無力の跡継ぎが決められたことで、ここから真の天下人の跡取り争いがはじまったのである。

翌日、黎明から本丸攻めが再開されるはずだったが、しばらく待つよう下知が出た。その後、珍事があった。本丸から秀吉のもとへ送られてきた者があったのだ。

本陣で待っていると、先頭に立つ武者のあとに美しい小袖を着た娘三人がつづいていた。武

者は富河新六郎といって、娘三人を秀吉のもとへ送りつける役目を負っていた。
「これは修理亮どのの娘にあらず、浅井殿の娘にござる。筑前どのにとっても主筋にあたる御方ゆえ、懇ろにいたわり、養育してくだされ」
という口上とともに、一通の書状が秀吉に渡された。
秀吉は書状を一覧するとうなずき、
「主筋にあたる御方であること、承った。この秀吉、決して疎かにはいたさぬぎゃ。安心召されい」
と言い、さらに、
「お市どのはいかがなされた。お市どのも城を出るのであれば、いまのうちに出ていただかねばならん」
とたずねた。
信長の妹、お市の方は、嫁いだ先の浅井家が滅びたあと、信長にひきとられて三人の娘ともども清洲城で暮らしていたが、清洲会議の結果、跡取り決めや所領配分の付け足しのような形で勝家に再嫁すると決まり、娘たちとともに北ノ庄に来ていたのだ。
お市の方は三十路も半ば過ぎだったが、二十二、三歳にしか見えぬほどの若さと美貌を保っていた。六十過ぎの勝家が執心するのも無理はないとうわさされていた。
「御内室さまは、修理亮とともに城に残る所存にござりまする」
との新六郎の返答に、秀吉の顔が一瞬、険しくなった。

「さようきゃあ。見上げたる貞婦かな。さればもはや待っても甲斐もあるまい」
新六郎が去ったあと、秀吉はつぶやいた。
「修理亮のやつ、お市どのを抱えて放さぬわ。おかわいそうに、お市どのもこれまでだわ」
秀吉もお市の方に恋慕しており、勝家とどちらが娶るか争ったといううわさもあったが、勝家が正妻を失って久しいのに対し、秀吉に正妻があるのは周知のことである。主筋の御方を側室になどできるわけもなく、秀吉にお市の方を娶る資格はなかった。うわさはあくまでうわさに過ぎなかった。
――しかし、使えるかもしれんな……。
ふと思った。勝家を救うには、お市の方を救うよう、訴えかける手があるのではないか。
勝家が城を出てくれれば、お市の方もともに出てくるだろう。秀吉にしても、主筋の御方を救うという名目がある。
「使者を出してはいかがでしょうかな」
思い切って言ってみた。
「お市どのまで争いに巻き込むことはないと申し遣わせば、修理亮どのも考えるのではありませんか。ふたりともども下ってくれれば悪いようにはせぬと付け加えれば、なおよろしいかと」
秀吉がじろりとにらむ。好意のこもった目ではない。
「もし差し支えなければ、それがしが使者に立ってもよろしゅうござる」
勝家とは旧知の仲である。説得する自信はあった。ここへ来るまでには、府中の城に籠もる

前田利家を説得し、城を開かせてもいる。
　秀吉は問う。
「それほどまでして、修理亮を生かしておきたいかや」
「これからのことを考えれば、それが最善かと」
　言いすぎたかと思った。だが秀吉は信長とちがって下からの意見を聞かぬ男ではない。
「最善か。それが世間の目かのう」
「本丸に籠もる者どもは、死の覚悟をかためておりましょう。それを落とそうとすれば、こちらにも多くの手負い死人が出るのは必定と勘考いたしまする。それよりは許したほうが得策かと」
「これが上様ならば、いかがいたすかのう」
「上様ならば……」
　ふと詰まった。信長ならば、自分に逆らった者は見せしめのようにして殺すだろう。
「いや、上様のなさり方が最善とは申せませぬ。とくに向後は、多くの者をお味方にするよう……」
「久々よ、いつからわしに指図するようになった」
「いや、指図などと。それがしはよかれと思って申すまで」
「わしが考えておらんとでも思っとるのきゃあ。あの城を攻めれば手負い死人がたんと出ることなぞ、聞かぬでもわかるわ」

　ふいっと秀吉は背を向け、歩いていってしまった。
――怒らせてしまったか。
　久太郎はあわてて秀吉のあとをついていった。
　秀吉は愛宕山の本陣を下りて、本丸の大手門近くまで出張った。瓢箪の馬印とともに、屈強な近習たち数十名が秀吉を取り巻いている。
「みなの者、かかれかかれ。今日こそ攻め潰せ！」
　待たされていた軍勢に総掛かりの下知がくだされ、本丸の周辺はにわかに騒がしくなった。使者を迎えるあいだ、沈黙していた鉄砲が咆え、鬨の声があたりを揺るがした。
　本丸は濠と石垣に囲まれ、門へいたる土橋は逆茂木で閉じられている。狭間からは矢や鉄砲が放たれ、寄せ手を寄せつけない。秀吉の軍勢は鉄砲で狭間を潰すことから始めなければならなかった。
　しばらくそのようすを見ていたが、やはり勝家を助けたいという思いは消せない。
　久太郎は羽柴秀長を探した。秀吉の弟で、いつも秀吉の下で兄を支えている。目立たぬ存在だが、秀吉の信頼は厚い。久太郎は近習数名をつれただけで、流れ弾が飛んでくる戦場の中を歩き回った。
　秀長は、秀吉とは反対の搦め手から兵を指図していた。
「ちとお耳をお貸し下され。暇はとらせませぬ」
　勝家を助けるため、まずは秀長から説得するつもりだった。

「修理亮どのに、降参するよう申し入れて来ようと存ずる。それがしが使者として城に入れるよう、筑前どのを説いてくだされ」
久太郎が言うと、秀長は不思議そうな顔をした。猿顔の秀吉に対して、秀長はこれが兄弟かと思うほどちがっていて、のっぺりとした、これといって目立たぬ顔をしている。その秀長が小首をかしげながら言う。
「なぜ、さように修理亮どのを助けようとするのかな」
「いや、このままではなかなか本丸は落ちませぬぞ。手負い死人を多く出すよりは、説得して城を開かせたほうが得策でござろう。それに中にはお市の方がおられる。修理亮はお市の方を放さぬつもりなれば、それがしが行って、城を出るように申し入れてまいる」
久太郎は内心、お市の方を秀吉に差し出せば、勝家の命は助かるのではないかと思っていた。いまだ美貌を誇っているお市の方を秀吉が欲しがらぬはずはない。
「ふむ。それは見上げた心がけなるも……」
秀長はまた首をかしげた。
「兄者にはその気はあるまい」
「そこを曲げていただきましょうぞ。修理亮どのを生かしておいたほうが、のちのち世間の者の見方がちがってきましょうに」
「老臣どもの中にも、さように言う者があったが……」
その場ではっきりは言わなかったが、秀吉にその献策を容れるつもりがないのは明白だ。

「そなたも、修理亮どのを生かしておきたいと見えるの。人気者よな、修理亮どのは」
「やはり古くからご家中に仕えて、手柄の多き人なれば。惜しむお方も多いでしょう」
うなずいて聞いていた秀長だが、最後に首をふった。
「言うことはわかるが、無理であろうな。兄者は修理亮どのとはうまくいかんからな」
それは久太郎とて感じないではない。いまから六年前、天正五年の北国攻めに、信長は勝家を大将とし、滝川一益や丹羽長秀らを出陣させた。このとき秀吉も附属させられたが、勝家の下ではたらくのが不満で途中で帰ってきてしまった。当然、信長から叱責され、しばらく長浜で蟄居させられた。
その後も、ともに信長の下で一手の軍団を率いてはたらく宿老として、見えないところで角を突き合わせ、あるいは足の引っ張り合いをしてきたにちがいない。目下の秀吉はずいぶん痛い目に遭わされてきたはずだ。恨みは重なっているだろう。
事情はわかるが、それでも勝家を助けたい。久太郎は食い下がった。
「まあ、兵を損ぜずに勝てるなら、やってみるのも無駄ではあるまいに。一度、兄者に掛け合うか」
しつこい久太郎をもてあましたのか、秀長はそう言い、母衣武者に命じて秀吉のところへ使いをさせた。
久太郎はほっとした。すでに陽は高くなっている。巳の刻（午前十時）あたりか。
——さあ、筑前どのは許すか。

秀吉に少しでも織田家への忠誠心が残っていれば、勝家は殺さないはずだ。最後の交渉を許してくれるだろう。そうなれば勝家を説得する自信はある。

清洲会議のあとの秀吉は、控えめに言ってもひどかった。たとえば丹後の長岡父子に独断で所領を安堵してやったり、大和の筒井順慶から人質をとったりした。

両人とも光秀の組下大名だった者である。山崎の合戦には中立をたもって光秀の一味に加わらなかったものの、その罪の有無は秀吉がひとりで決めていいものではない。織田家中のことは、清洲の会議に出た宿老四人ではかると決めたのである。その取り決めを無視し、独断専行をはじめたのだ。

しかも秀吉は、ほかの畿内の大小名からもせっせと人質をとりつづけた。これも取り決めに違背している。畿内を押さえればもう半分以上、天下をとったようなものだから、これは軽視できることではない。

清洲会議からそれまで、勝家たちはどうしていたかというと、何もしていなかった。自分の所領に引っ込んで、ふだん通りの日々を送っていたのだ。それこそ取り決めに沿ったやり方だった。

昨年の秋口にはもう畿内のほとんどの大小名が秀吉の麾下に入っていたから、勝家や信孝、それに織田家の宿老でありながら清洲会議にさえ参加できなかった滝川一益などはあわてた。これでは秀吉ひとりで天下を牛耳ることになってしまうと気づいたのだ。

勝家は昨年の十月、五箇条からなる覚書を久太郎に送りつけ、秀吉を非難し、久太郎に仲

裁をもとめてきた。

しかしその程度のことで秀吉は止まらない。

勝家が覚書を送りつけてきた直後、京で信長の葬儀を派手に行った。喪主は信長の四男で、秀吉の養子になっている秀勝だったが、秀吉は棺のあとを太刀を持って歩き、人々の視線をあつめた。信長の後継者は秀吉であると、暗に示したのである。

このころ、勝家たちは遅まきながら秀吉に対抗する勢力を作ろうとし、中国の毛利家や奥州の伊達などに書を送り、味方につけようとはたらきかけている。

だが十一月ともなれば、もう遅かった。北国は雪で閉ざされる。越前の勝家は兵を動かそうにも動かせなくなった。

そのあいだに秀吉は勝負に出た。岐阜の信孝と伊勢長島の滝川一益に兵を向けたのだ。

岐阜城を攻められた信孝は、なにほども戦わずに母と娘を人質に出して降参した。岐阜城に入り美濃を領したといってもまだ半年にもならず、美濃衆を味方にする時間がなかったのである。西美濃に大きな勢力をもつ稲葉家などは真っ先に秀吉に降り、ほかの美濃衆も大半が秀吉についたとあっては、城を守ることもできなかったのだ。

滝川一益が籠もる伊勢長島にも大軍が差し向けられたが、一益は歴戦の勇者である。わずかな人数で抵抗し、秀吉の軍勢を進めさせなかった。だが佐治新介の籠もる亀山城も、滝川儀太夫の籠もる峯城も、よく守ったものの数倍の軍勢に攻められて、ついに開城した。一益の劣勢は否めなかった。

信孝も一益も、おなじ家中の者である秀吉が、こうまで露骨に牙を剝(む)くとは思っていなかっただろう。

勝家も、秀吉の野心の強さを見誤っていた。主人信長の一周忌も待たずに争いを仕掛けてくるとは、主家思いの勝家には想像の外だったのである。

このままでは、越前で雪に閉じこめられているうちに同盟者がひとりずつ討たれてしまう。たまらず勝家は三月初め、積もる雪を押しのけて軍勢を動かした。江北まで出て秀吉の動きを牽制し、滝川一益らと挟み撃ちにしようとしたのだ。降参したはずの岐阜城の信孝も、勝家の出兵に応じてまた兵を挙げた。

これを聞いた秀吉は、長島の陣は信雄らにまかせ、軍勢をひきいて江北へ急行した。そして北国街道が山地を抜け、琵琶湖の北端、余呉(よご)湖の周辺に出るあたりに陣地を構築して、勝家とにらみ合いになった。

久太郎も秀吉の先手として、最前線の左祢山(さねやま)に陣どり、勝家の本軍と対峙した。ときに足軽を出し合って小競り合いを演じもしたが、どちらの陣も堅固で、動けぬままに四月に入った。

長陣になるかと思われたが、意外なところから均衡がくずれた。

秀吉が軍勢をつれて、岐阜城を攻めるべく江北から去った隙に、勝家の陣から、勝家の甥で重臣の佐久間盛政(さくまもりまさ)が秀吉陣中深くに軍勢を進め、備えがととのっていない中川瀬兵衛の陣を奇襲したのだ。

この奇襲は成功し、攻められた瀬兵衛は討死(うちじに)した。放置すれば秀吉の陣全体が動揺するとこ

ろだったが、秀吉は一枚上手だった。急報をうけて、わずか二刻半(ふたときはん)ほどで、大軍勢とともに美濃の大垣から江北へ駆けもどってきたのだ。

夜中に松明をおびただしく灯しての行軍だったため、その動きは敵味方から容易に見てとれた。

秀吉がもどってきたため、敵陣深く入り込んだ盛政は早朝から退却にかかったが、そこを秀吉に攻め立てられた。

盛政も歴戦の将である。当初は応戦しつつ整然と退却していた。そのままなら多少の犠牲を出しても、全軍がもとの陣まで引きとれるはずだった。

退却路は、余呉湖を囲む山の峯ぞいに通じていたので、湖の対岸にある久太郎の陣からもこのようすが見てとれた。山の尾根筋で、追いすがる秀吉勢をはねのけつつ退却する盛政勢を、敵ながらあっぱれな戦いぶりだと感心しつつ久太郎は眺めていたものだ。

ところが退路にあって、盛政を援護するはずだった前田利家の軍勢が、突然、陣地を捨てて逃げ出してしまった。これを見た盛政の兵たちは混乱した。味方が崩れたと見えたのだ。利家は早くから秀吉と内通していたので、もっとも効果のあるときに陣を捨てたのだが、たしかに盛政たちには大きな打撃となった。

秀吉の軍勢の攻撃も激しくなった。結局、盛政の軍勢は支えきれなくなって崩れたち、兵の多くが得物(えもの)も具足も捨てて半裸になり、山中の藪へ逃げ散ってしまった。

この混乱が勝家の全軍に波及した。もともと秀吉側が有利と見て、内通していた者も多かっ

たので、逃げ出す者が続出した。とどまる者はわずか三千ほどでしかなく、勝家は陣を支えきれなくなり、北国街道を越前へと敗走することとなった。
それが二日前のことである。
「久太郎どの、兄者が許したぞ」
秀長に声をかけられ、久太郎は立ち上がった。すでに正午を大きくまわり、空の色も醒めはじめていた。
「修理亮どのが降参するなら許す。またお市の方は主筋のお方であり、秀吉は何の逆意もないゆえ、是非とも城を出てほしいと願ってまいれ、とのことじゃ。久々の手並みに期待しておるとも申しておったぞ」
内心で久太郎は嗤った。どうやら秀吉の心配は勝家よりお市の方にあるようだ。
「承ってござる。されば、しばし攻めの手をやすめてくだされ」
久太郎は本丸の天守へ向かった。
広い本丸の中は隙間もないほど建物が連なり、歩廊が縦横に走っていた。そこを駆けまわるのは、秀吉の馬廻り衆ばかりだった。
もはや本丸の中に敵兵はおらず、ただ天守だけが抵抗をやめていないという。
ふりあおぐと、五層の天守の最上階に旗指物が幾本もたなびいていた。白地に三つ雁金は勝家勢の幟である。
天守の一段目である石蔵も、秀吉の兵が占拠していた。

「いるのか」
そこにいた兵にたずねると、こっくりとうなずいた。
「てっぺんからときどき見下ろしておった修理亮どのの姿は、みなが見ておりまする」
「これから突っ込むのか」
「いえ、梯子が引かれていて、登れませんや」
弓鉄砲ばかりでは手間どると見た秀吉は、正午ごろより数百名の精兵を選び出し、手槍打物ばかりをもって天守へ突入させていた。勝家の手兵も応戦したが、しだいに討ち減らされて、いまはもう守りをかためるばかりとなった。鉄砲も撃ってこないが、二階への入り口に槍を持った兵が待ちかまえていて、近づけないという。
久太郎は石蔵の外へ出て、また天守をあおいだ。そこに勝家がいる。お市の方もいるのだろう。
脳裏に、昨年の十月に勝家から受けとった五箇条の覚書が浮かんできた。
勝家は、自分は清洲会議で決まったことを守っているのだ、としきりに訴えていた。
お市の方を娶ったのも会議で決まったことであり、織田家を乗っ取ろうなどと考えたわけではないと主張するほか、領地に関しても人質に関しても、自分は約束を守って誰にも何も与えていないし、自分でも私していないと書いていた。
なのに天下の仕置は、会議で決まったはずのことが実行されておらず、下々の者は不審に思っている、だからこの際、天下分国が静謐となるよう、みなで評定するのが肝要である、よく

よく考えてほしい、と覚書はつづく。

久太郎にはよくわかっている。決まったことを実行していない者は、秀吉である。みなで評定などせず、おのれの一存で政を左右してきた。勝家が文句をつけるのは当然だった。

織田家の敵はまだまだ四方にあるので、仲間内で揉めるのではなく、力を合わせて外敵に向かうのが本筋だと勝家は指摘する。

だが秀吉はそんな姿勢を見せず、分国の中に新しい城をかまえ、我儘をしている。いったい誰を敵と見なしているのか。たとえ勝家と秀吉の仲が悪いとしても、いまは互いに親睦を深め、分国の仕置をすべきである。仲間同士で争って織田家の領国を他人にくれてやるようなことは、本意ではない。まことに無念至極である。

覚書はそう結ばれていた。

これを読んだとき、久太郎は震えた。勝家は私心を捨て、ひとりの奉公人として織田家を支えようとしていた。なんという純粋さだろうか。武骨な外見の中身は、子供のように単純で素朴な楽天家だったのだ。

対して秀吉は奉公人の心など一分もなく、織田家の分国をみな自分のものにしようとしている野心家だ。

話が合うわけがない。

正しいのは勝家である。そして勝家は、久太郎が秀吉を諫めるはずだとの期待をこめてこの覚書を送ってきたのだ。

それなのに、なにも応えられなかった……。

「おおい、聞こえるか！」

久太郎は天守に向かって呼びかけた。

返答はない。

「久太郎、堀久太郎でござる。修理亮どのに申しあげることがござる。修理亮どの、顔を出されませい」

しばらく待っても、誰の声も返ってこない。

「修理亮どの、生き長らえませい。ここで死んでは織田家を守る者も絶えましょう。生きていてこそ、武門の道も歩めるものと存ずる。修理亮どの、応えてくだされ！」

しんとして声もない。

さらに声を張りあげようとしたそのとき、天守最上階の高楼に身をのりだした者があった。髭だらけの顔にざんばら髪。大きな目とあぐらをかいた鼻。渋柿のような顔色は、勝家だ。やっと通じたかとほっとしたが、そうではなかった。勝家は欄干から身を乗りだすようにして、大音声で呼ばわった。

「勝家、ただいまより切腹いたす」

その声が落雷のように久太郎の脳天に響いた。

「どこかの若造のように、筑前に尻尾を振ってまで生き長らえようとは思わぬ。敵中にも名のある侍は、前後を鎮めて見物し、名を九夷八蛮に相伝うべし！」

啞然として見上げる久太郎の耳に、女たちが念仏を唱える声が伝わってきた。

勝家はいったん引っ込んだ。念仏の中にときどき短い悲鳴が交じる。一族の女たちが自決しているのか、あるいは勝家が刺し殺しているのだろう。

念仏が途絶えると、天守最上階の高楼にまた勝家が出てきた。今度は短刀をにぎっている。帷子を諸肌ぬぎになると、気合いを発して左脇腹に短刀を突き刺した。そのまま横一文字に腹を切ると、短刀を抜いて鳩尾に突き刺し、臍の下まで切り下げた。

力が尽きたか、がくりと頭を垂れたところで介錯の者が首を打ち落とした。

大勢の兵たちが声もなく見上げているうちに、最上階から煙が立ちのぼり、勝家たちの姿を隠した。やがて火が吹き出しはじめ、さらに中階や下階からも赤い炎が顔を出して、天守全体が火と煙に包まれた。

石蔵へ入り込んでいた兵たちが逃げだしてきた。遠巻きに見ているうちに、天守はひとつの巨大な炎の塔と化した。炎は赤々と燃えさかり、数十間はなれていても頰に熱気が感じられた。しばらく燃えつづけて、炎がようやく鎮まりかけたと見えた途端、轟音とともに天守が崩れ落ちた。人々の怒声と悲鳴の中、大量の灰と火の粉の波が四方を襲った。

灰と煙の嵐がおさまったとき、天守は消え失せていた。酉の刻（午後六時）前だった。

勝家は髪の毛一本残さずに、お市の方と一族を道連れにこの世から消え失せたのだ。

頭といわず肩といわず降りかかった灰をはたき落としながら、久太郎は思う。

——勝家どのは、立派よ。それにくらべてこの自分は……。

あれだけ信長にかわいがられたのに、いち早く秀吉の家来同然となり、この合戦でも一番手をつとめるほど奉仕してきた。本来、織田家の近習頭として織田家を立て、秀吉を抑え、勝家と均衡をたもたねばならなかったのに、それもしなかった。

秀吉がまちがっていると知りつつ、指摘して怒りをかうのを恐れた。最期まで天下をのぞまず、主家、織田家の一武将であろうとした勝家とは、まるでちがう道を歩んでしまった。いや、勝家のようにはできなかったのだ。

——やはり、見上げた武辺者……。

勝家のことがいっそううらやましく、いっそう憎くなった。

秀吉に命乞いをして生き恥をさらしてくれれば、こちらは心やすく生きてゆけたのに。

ほうと息を吐くと軽く首を振り、合掌もせずにその場から去った。

関東か小なすびか

一

「いや、国などはもうええわ。わしは小なすびひとつで十分や」
これで殿も国持ちにおなりじゃ、と持ちあげる家老の篠岡平右衛門に、滝川一益は笑いながら応えた。
「関東と伊勢を行き来するのでは、身が保ちませぬな」
反対側からからかうように言うのは、甥の滝川儀太夫。
「なあに、小なすびをお望みでも、人使いの荒い上様のことや。まだまだ楽にはさせてもらえませんぞ」
ともうひとりの家老、津田治右衛門が言う。いずれも昔から一益を支えてきた百戦錬磨の強者たちだ。
一益は笑顔でうなずき、歩きつづけた。
織田家中で北伊勢五郡を領し、こたびの武田攻めで先鋒をつとめた滝川一益とその宿老たちは、織田信長の本陣がある上諏訪の法華寺に向かっていた。
三月といえば春も末だが、信濃路にはまだ冬の気配が残り、吹きすぎる風は肌を刺す冷たさだった。それでも一行の足どりは軽い。白い息を吐きながら、みなにこやかに寒風の中を歩いてゆく。

一益は肩幅が広い上に上背があって腰が高く、肩衣に袴をつけた姿は見栄えがする。中高の顔立ちもととのっており、つややかに禿げあがった頭頂部が目立つほど尖っているのをのぞけば、じつに涼やかな容姿だった。
山門へ向かう坂の途中で、門を出てきた七、八人と鉢合わせになった。その中央にいた赤ら顔の大男に、一益は声をかけた。
「これはこれは、河尻どのもやはり上様のお召しでしょうかな」
「おお、滝川どの。さようで。いや、こたびは比類なきご活躍、まことにお見事。さぞ大きな恩賞を頂戴できましょうに」
茶染めの地に菱模様を描いた大紋姿の侍が応ずる。おなじく織田家中で美濃岩村の城主、河尻与兵衛だった。
「なあんの、河尻どのこそあっぱれな御はたらき、上様の御覚えめでたく、ひと足先に恩賞にあずかったとお見受け申す」
快活に言っておいて、一益はつゝと河尻にその身を近づけ、声をひそめて問うた。
「で、信濃でござるか、甲斐でござるか」
これに河尻も声をひそめて、
「甲斐」
と応えた。
「それはめでたい。これはお祝いを申しあげねばなりませぬな」

一益はいきなり声を大にした。

「いや、おどろいてござる。まことに上様の気前のよいこと。一国をそっくり頂戴できるとは」

河尻はうははと声をあげて笑った。一益も対抗上、白い歯を見せて笑いを返した。

「では、のちほど」

「めでたい知らせを、お待ちしておりまするぞ」

河尻与兵衛は、儀太夫たちにも丁寧に一礼していった。与兵衛は律儀で通る男だった。

二カ月半後にふたりの運命は大きく分かれるが、このときは知る由もない。

「甲斐は決まりか。するとあとは信濃か上野……」

と平右衛門が言う。

「どちらにせよ、国持ちはまちがいござらんな」

儀太夫の鼻息が荒くなる。

「われらもこれまで、はたらいた甲斐があり申した」

治右衛門の言葉に平右衛門もうなずく。

供の者たちの興奮をよそに、一益はだまって足を運んだ。

天正十年二月はじめ、織田勢の大軍は宿敵武田家の領地、信濃に攻め込んだ。信長領の美濃と国境を接する木曾福島城主、木曾義昌が内通してきた機会をとらえたのである。

当初、精強をうたわれた武田軍団との戦いをおそれ、織田の兵たちの士気はあがらなかっ

た。しかし攻め込んでみると、武田勢は精強どころか戦いもせずに逃げる者が続出、城は攻める前に自落し、降参してくる兵があいついだ。

これほど武田家がもろいとは信長も思わず、

「勝頼は軍勢をあつめて無二の勝負をしてくるはず、功をあせって罠に落ちるな」

と、先を急ぐ信忠に早馬を出して何度も止めたほどだった。

この年は寒さがことのほかきびしく、平野部の尾張や美濃から来た中間どもが、山あいの寒気に耐えきれず何人も凍え死んだ。さらに織田勢が信濃を侵攻している最中、浅間山が噴火した。京や奈良からも東の空が赤く焼けて見えたほどの大きな出来事だった。

一連の天変地異は、武田家が滅びる前兆だと京の公家たちは言い囃した。おそらく信濃や甲斐の人々にもそうした予感があったのだろう。とにかく武田勢の戦意は薄かった。

ほぼひと月で信濃を席巻すると、織田勢は武田家本貫の地である甲斐国に攻め入った。

甲斐では戦いらしい戦いもなく、わずか十日ほどで武田家の当主勝頼を田野という山あいに追い詰め、自害させた。

勝頼の父、信玄以来、二代にわたって信長の宿敵だった武田家は、二カ月ほどの戦いであっけなく滅びたのである。

武田攻めの総大将は信長の嫡男、信忠だったが、若くて経験のない信忠を支え、先陣として実質的に戦ったのは一益の軍団だった。居城の新府城をすてて逃げた勝頼を追い、その首をとってきたのも一益である。論功行賞として大きな褒賞を得るのは当然のことだった。

また一益にはそれなりの実績がある。

甲賀(こうか)で生まれ、堺(さかい)で鉄砲術を会得した一益は、鉄砲の腕を見込まれてまだ尾張半国の主でしかなかった信長に仕え、尾張統一と北伊勢攻略に力を発揮した。信長が美濃を併呑(へいどん)し、京にのぼってからも数々の戦いに参加、とくに長篠合戦では鉄砲衆の総指揮をつとめた。

長い戦歴をもつ信長の宿老のひとりなのに、その所領は北伊勢五郡にとどまっていた。あとから信長に仕えた惟任日向守(これとうひゅうがのかみ)こと明智光秀(あけちみつひで)がすでに丹波(たんば)一国をもっているのだから、一益が国持ちになってもおかしくはない。

甲斐を得た河尻も一益とほぼ同い年で、織田家への奉公歴は長い。若年から信長に仕え、黒(くろ)母衣衆(ほろしゅう)として駆けまわったあと、ずっと武田勢との国境である美濃岩村に張りつき、武田家相手に調略をしかけてきた。木曾家の内通も、河尻のはたらきかけがあってこそだった。さらに、このたびの戦いでも信忠軍団の中核をなしてきた。

恩賞を受けるのは当然だが、これまでは一益よりはるかに小さな領地しかもたなかった男だ。その河尻が一国なら、一益への恩賞はもっと大きくなるはずだ。

従者たちの期待は、いやが上にも高まってゆく。

本堂についてみると、まつられていた本尊が片付けられて広くなった上座に、信長が着座していた。一益は広縁にあがって平伏し、挨拶(あいさつ)をのべたが、一益の言葉が終わらないうちに信長は、

「こたびの活躍、苦労であった。そなたには上野国一国と信濃の佐久(さく)、小県(ちいさがた)の二郡を与える」

と早口に告げた。薄笑いさえうかべており、不気味なほど機嫌がいい。さらに、

「関東の仕切りもそなたにまかせるがや。関東、奥羽の者どもを切り従えよ」

と命じた。関東における織田家の総代(そうだい)をつとめよというのだ。

「はっ、ありがたき仕合わせ。必ずや思し召しのとおりに仕遂げてご覧に入れまする」

領地よりも関東の仕切りという言葉に少々とまどいつつも、一益は平伏した。

「ふむ。年寄りにまた一段と大変な仕事を頼むのは気が引けるが、関東の荒戎(あらえびす)どもを手なずける難事をこなせるのは、そなたしかおらぬ。頼むでよ。はなむけとしてわが愛馬を授ける。上州へはあれに乗って打ち入るがよかろうて」

一益の背後で馬のいななきが聞こえた。ふり向くと、見事な肥馬が引かれてきたところだった。海老鹿毛(えびかげ)という名の、信長の愛馬である。一益は大仰(おおぎょう)におどろいて見せ、

「これは、もったいなきご上意、身に余る冥加(みょうが)にござりまする。かくなる上は一益、老いたりといえど、この身のつづくかぎりご奉公いたしまする」

と言うと、また額を床にこすりつけた。その背中に冷たい風が吹きつけた。

会見を終えて法華寺から出てきた一益は、待たせていた篠岡らに、

「上州や。出立の支度をしておけ」

とだけ告げ、国持ちじゃ大名じゃとわきたつ三人を尻目に、無言で自分の陣にもどった。

このあと数日して、信長は正式に旧武田領の「国割り」を発表した。

武田の領国、甲斐、信濃、駿河、上野の四カ国のうち、織田家中で一益と河尻与兵衛のほかに領地を得たのは、信濃の川中島四郡を得た森長可、伊那郡を得た毛利長秀のふたりだった。ほかに徳川家康に駿河国が、武田一族の穴山梅雪には本領安堵のほか、江尻の城とその周辺の領地が、そして内通して武田家崩壊のきっかけを作った木曾義昌には、本領の木曾郡を安堵したほか、筑摩と安曇の二郡が与えられた。

これだけの措置をすませると、信長は信州諏訪の法華寺を引き払い、甲斐に出た。そして甲府の躑躅ヶ崎館跡の仮御殿にはいって武田家の残党狩りを指示したあと、富士の裾野をまわって帰途についた。数万の大軍勢も、甲斐信州からそれぞれの本領に帰っていった。

一益は四月五日、信長の命令通りに五千の兵を引きつれて上野国に向かい、箕輪城に入った。織田家の関東における代表、「関東守護」「関東ノ主」と称される地位についたのである。

その昔、足利家が将軍として天下を治めていたときには、京の幕府の出先として鎌倉に「関東公方」と「関東管領」をおいたものだが、それを思わせるような名誉ある地位である。

しかしこの褒賞を、一益は素直に喜んだわけではない。

というのは、四月四日付けで三国一大五郎という者にあてて、有名な手紙を出しているからだ。

「今度、武田討果し候。自然希もこれ有るかと御尋ねも候はば、小なすびをと申し上ぐべき覚悟に候ところ、さはなく、遠国にをかせられ候条、茶の湯の冥加は尽き候。いよいよ、京堺の数寄御床しきまで候」

とある。どうやら一益は信濃に討ち入るまえに、信長に茶道具の名物、「珠光の小茄子」と称される茶入れをくれるよう申し入れていたらしい。少し前に柴田勝家が、信長から「うば口の釜」という名物をねだりとっていたので、ならば自分も、という気になったのだろう。

そこで、武田家討滅で手柄を立て呼び出されたので、褒賞の望みをたずねられたら小茄子を所望しようと考えていたのに、ほしいものを尋ねられもせずに、上野国と関東の取次という重責を押しつけられてしまった、これで茶の湯遊びも運が尽きた、今後、京堺の茶の湯の席には出られなくなるだろう、心を引かれることだ、と嘆いているのだ。

この手紙、戦国時代には名物の茶道具の値打ちが一国とおなじに見られていた、という例に持ち出されることが多い。実際は昇進したうれしさを隠す韜晦だろうが、本音もかなり入っていただろう。

武田家攻略の前、一益は関東申次として、信長あてに関東諸大名から来る音信をあつかっていた。この時代、その地の申次を担当した者は、攻略戦となれば先鋒をうけたまわり、攻略後にその地に所領を得るのが慣例だった。

一益もその例にならって武田攻略の先鋒となり、関東に所領を得た。それがわかっているはずなのに、あえて一国より小茄子がほしいなどと奇妙なことを言いだしたのは、関東赴任に不安を感じていたからだと思われる。

甲賀出身で伊勢に所領をもつ一益には、関東はなじみのない土地でしかない。関東諸大名と音信は通じていても、会うのは初めての者ばかりである。そこに赴任すれば、周囲は敵ばかり

といってもいい。

しかもこのとき一益は五十八歳。人生五十年の時代に、余命を数えられる年齢になっていたから、なおさら住み慣れた地を離れがたく、気の合った仲間との茶の湯遊びが恋しかったのだろう。

だが男はいくつになっても権力欲と名誉欲の虜である。一益も、田舎に飛ばされて都で遊べなくなったと嘆いてはいても、高い地位と権力を与えられて一応は満足していたのではなかろうか。そうした揺れ動く心の内が、この手紙に出ているように思われる。

ともあれ箕輪城にあって、一益は執務を開始した。

信長の力を背景に、関東と奥州の諸大名を従わせ、膝下におくのが「関東守護」の役目である。領国とした上野と信濃二郡の要所に配下の者をおくと、国人領主たちに箕輪への出仕と、人質の提出をもとめた。

関東の国人たちも、内心では織田信長とはどこの馬の骨かと思いつつ、強大な武田家をあっという間に崩壊させた実力を見せつけられているので、逆らえない。続々と箕輪城にやってきては、人質をおいて帰った。

記録によると、上野国では内藤、新田、小幡、由良といった昔からの国人衆、信濃からは武田旧臣の真田昌幸らが出頭している。

人質となるのは子息や弟妹が多かったが、中には子供ではなく親を差し出す者もいた。

「ほう、母上を。これはこれは」

真田昌幸と面談し、母親を紹介された一益は、まずその容姿に目を留めた。このとき三十五歳の昌幸の母親である。年齢は一益とおなじくらいか。肌の衰えは隠せないが、品よく愛嬌のある容姿を保ち、若いころはさぞ美しかっただろうと思わせた。

名を阿続の方という。昌幸の父、幸隆の側室だった。幸隆はすでに亡くなっているので寡婦なのだが、いまだ落飾はしていない。茶染めの小袖に縹色の打掛姿は、国人領主の母堂としての貫禄も見せていた。

「大切にお預かりせねばならんな。さて、どこに住まってもらおうか」

「お心遣いは無用にござる。箕輪城下に、すでに屋敷を手配しておりますれば」

と昌幸は一益をとどめた。

「それはまた手回しのよいことやの」

「母をひとりにするわけには参りませぬ。供回りの者どもが少々多くなるによって、こなたにて住まいをみつくろってござる」

なるほど、そこで諜者なども飼うわけだ、と一益は納得した。一益がいる限り、箕輪は関東の政都となるから、母のいる屋敷にいわば大使館機能を負わせようというのだろう。

それまでだまっていた昌幸の母が、口を開いた。

「あの武田をふた月もかからずに討ち滅ぼしたというから、どんな恐ろしい鬼武者かと思うておったら、涼しげな殿御じゃねえか。のう、昌幸。おら気に入ったぞ」

「これはなんと失礼な。母上、少し慎しまれよ」

昌幸があわててとりなすが、阿続の方は知らぬ顔で、
「なあに、ええ男をええ男と申してなにが悪かろう。こりゃ果報じゃわ」
とつづけ、一益に向きなおると、
「なにもわからぬ婆じゃによって、よろしゅう教えてくだされよ。関東のあるじさま」
一益の目を見て微笑(ほほえ)んだあたり、なかなか肝の据わった母堂だった。
「褒められたこちらこそ、果報と申すべきかな。お方さまには、そのうち茶でも進ぜように」
まあ、うれしいとはしゃぐ阿続の方に、一益は苦笑いするしかなかった。
そののち一益は箕輪城から厩橋(まやばし)城にうつったが、上野国を中心に信濃や北武蔵からも出仕してくる国人たちがひきもきらず、さらに奥羽の諸将も音信を遣わしてきて、一益はまさに「関東ノ主」といった趣を呈していた。
そうして上野国で平和なうちに権力の移行がすすんでいたとき、河尻与兵衛が赴任した甲斐国では、武田の残党狩りが執拗につづけられていた。
武田一門衆はもちろん、重臣や有力な国衆までが捕らえられ、処刑されていった。それも、武田方の者を捕らえた者には褒美を与えると村々に通達したため、村人によって捕らえられ、河尻のところへ突き出された者が多かった。
武田家の支配体制を徹底的に破壊し、その上で新しい支配を行うという信長の方針を、与兵衛は忠実に実行したのである。
これによって信玄の子や親戚衆など武田一門衆はほぼ滅亡させられ、山県(やまがた)、馬場(ばば)、曾根(そね)とい

った重臣たちの一族もほとんど処刑された。最後に武田勝頼を裏切り、織田方に降参した小山(おやま)田信茂(だのぶしげ)もゆるされず、一族の者とともに甲府の善光寺(ぜんこうじ)で首を切られた。今日わかっているだけでも、合戦が終わったあとで数十名が殺されている。信長は、武田家の力をそれほど恐れていたのである。
追跡を逃れた者は、北条(ほうじょう)や上杉などを頼って国外に逃亡した。
こうして武田家の影響力は、甲斐国内から強引に排除された。あとには領主を失い、しかも合戦を恐れて百姓たちまでもが逃散し、耕す者のない田畑と山河ばかりが残った。与兵衛は、百姓たちに村へもどるよう呼びかけるところから領国の仕置を始めねばならなかった。
なお、武田の重臣狩りは甲斐国内だけで行われた。上野や信濃では行われた形跡がない。
また川中島四郡を拝領した森長可は、さっそく蜂起(ほうき)した一向一揆に悩まされた。力ずくで鎮圧したものの、長可のもとに出仕してくる地侍は少なく、まずは彼らを手なずけるところから始めなければならなかった。筑摩、安曇二郡を与えられた木曾義昌も、その地の地侍たちと対立し、合戦となっていた。
このように一益たちが新しい支配地の経営に苦闘していたところに、本能寺の変が起こったのである。

二

六月九日の夜更け、松山小介という侍が厩橋城に駆け込んできた。

小介は近江瀬田の城主、山岡美作守の配下で、一益とは面識があった。近江から上野まで一気に駆け通してきたようで、袴も小袖も泥まみれになっており、ただならない様子だった。

夜中、ただちに面会した一益は、美作守と対馬守兄弟連名の書状を見せられた。灯火を引きよせて一読するなり、一益は叫んでいた。

「なんとっ！　これはまことか！」

惟任日向守の謀叛により上様は本能寺にて、岐阜中将信忠さまは二条御所にて腹を召されたという内容に、一益はおどろき、信じるべきか否か惑乱した。だがまことであると小介に念を押されると、信じないわけにはいかなくなる。なお山岡兄弟は本能寺の変後、光秀に従わず、瀬田の橋を焼いて山中に引き籠もった剛の者である。

「むむ、これは……」

一益の脳裏に浮かんだのは、亡くなった信長の顔ではなく、生きている関東の諸国人の顔だった。

一益の前に辞を低くし、人質を差し出して本領安堵を乞うてきたものの、納得した顔はひとつもなかった。織田家の圧倒的な力に屈しただけで、関東の主は本来われらだと、どの顔にも

書いてあった。信長が討たれたいま、織田家は崩壊した。一益に後ろ楯がなくなったことを知ったあやつらは、どう出てくるのか……。

上野国の地侍たちは、敵になるのか味方になるのか。

それを読み切らないと大変なことになる。

ひとりでは対処できない。ただちに篠岡平右衛門と津田治右衛門をよんだ。儀太夫もよびたいところだったが、沼田城へ城代として配置しているので急には間に合わない。まずはふたりに書状を見せ、意見をきいた。

「阿呆な。かようなことがあっていいものか！」

「いやはや、天地がひっくり返るとはこのことじゃ。生きているうちにかような変事に見えるとは、長生きはしたくないものよ」

ふたりはひとしきりおどろき、嘆いたあとで一益の顔色をうかがってくる。

「どうする。みなの存念を聞きたい」

一益は発言をうながしたが、ふたりとも事態を呑み込めていないのか、発言はなく、しばし沈黙がおとずれた。

「本来なら、わしが東国の兵をこぞって引き具し、惟任めを討つべく上洛するべきやろ」

仕方なく一益がまず発言した。

「しかし東国の者どもがだまって従うか？　上様が亡くなったと知って、それでもわしに従うか。それに北条がだまっておらんやろ。こんどの武田討伐では、北条に煮え湯を飲ませたし

な」
というのは、信長は武田領と境を接する北条家にも出兵をうながしたので、応じた北条は上野国東部に兵を入れたものの、武田家を潰したあと信長は北条に撤兵を要求し、上野国から排除したという事実があるからだ。なんの見返りもなくいいように使役された北条が、織田家をよく思っているはずがない。
「……無念ながら、上野国の者どもがわれらに従うとは思えませぬ。なにしろこちらに来てふた月ばかりでは、顔も名前もわからず、ただこちらの下知に従え、人質を出せと命ずるばかりでござった。なんの恩恵も与えておらねば、われらに心を開く者は皆無かと」
平右衛門ははっきりと言う。
「まことに、まわりは敵ばかりと思し召せ。伊勢からつれてきた五千の兵以外、頼みとなる者はおりませぬ」
と治右衛門も言い切る。
「北条も、用心に越したことはござらん。われらに慇懃を通じておるのは、上様の力あってのこと。上様が討たれ、上方が乱れたと聞けば、本性を現してくると見てまちがいござらん」
平右衛門は注意をうながす。治右衛門はさらに悲観的だった。
「まず、このことは隠すがようござる。東国の者どもには隠し、そのあいだに五千の兵をあつめ、味方の地まで切りぬけることこそ肝要と覚えまする」
「そこまでせねばならんか」

一益は嘆息した。「関東ノ主」とまでいわれたのに、後ろ楯をなくした途端、こそこそと旗を巻いて逃げ出さねばならぬのか。
「なにせこちらは五千。なのに地侍どもは、上野国内だけでも二、三万はおりましょう。いっせいに蜂起されたら、とてもかないませぬぞ」
と言われれば、その通りではある。
一益の脳裏に「珠光の小茄子」が浮かんだ。やはり関東ノ主より小茄子のほうがよかったではないか。
しかしいまさら思っても詮ないことだ。
結局、本能寺で起きたことは東国の者たちには漏らさず、上様へ見舞いと称して兵をこぞって上京することとなった。
ここから逃げ出すのである。
しかし主な家臣と兵は上野国の要所に配ってあるので、すべての兵を動かすには一日や二日では無理だった。ひそかに家中に連絡をまわすだけでも三日はかかる。
厩橋城内で外に漏らさぬよう大騒ぎをしているところに、恐れていたものが来た。
「今十一日未の刻（午後二時）、深谷台より一庵（北条の一族衆）、書状指し越され候」
十二日に届いた北条氏政よりの書状は、そう書き出されていた。
京都の様子が伝えられたが、実儀であるのか。遠州よりも注進が連続している。これを早飛

脚でそちらに届けたのは、この際、その地を堅固にまとめることに専一すべきだと伝えたかったからだ。当方への疑心は無用である。貴殿の鬱憤(うっぷん)を晴らすのは叶いがたいのだろうか。氏政(うじまさ)父子に相談してくれればおろそかにしないので、大小となく申し合わせてほしい。

「これは……、隠し切れんな」

はっきりとは書いていないが、やはり本能寺の変は北条にも知られてしまっていたのだ。親切ごかしに相談してくれなどと書かれているが、北条が助けてくれるはずはない。こちらの力が弱いと見れば、攻めてくるのは必定(ひつじょう)だ。

「上野国の地侍連中からも、問い合わせが来ております」

「ああ、そうなろうな」

北条が知ったのなら、上野の者たちもいずれ知るだろう。

「こうなったら、もう……」

「ああ」

一益は観念した。いくらこちらが隠そうとしても、こうした書状が諸大名のあいだを行き交っているのでは無駄だ。

平右衛門、治右衛門らと話し合い、思案したあげく、

「北条へは、ひとまず京都は変わりないとの返事を出しておけ。そして上野国内の侍どもを召し寄せろ」

と命じた。そして同時に家臣の長崎弥左衛門(ながさきやざえもん)に、もと徳川家臣の浪人、本多三弥(ほんださんや)という者をつけて浜松の家康のもとへ送るという手を打った。援軍を乞うたのである。家康にそんな余裕があるかどうかわからないが、うまくすれば上野国内の動揺を鎮められるだろう。

翌日、厩橋城の大広間にあつまった上野国の国人たちに一益は、信長が討たれたことを打ち明けた。国人たちはざわついた。まだまだ知らぬ者が多かったのだ。

「それゆえ、われらはただちに弔(とむら)い合戦に上洛しようと存ずる。しかしわれらが上洛しようとすれば、その前に北条が出張ってくるのは必定。そこでおのおの方に願いの筋がござる」

一益は言葉を切って、あつまっている者たちを見渡した。みな不安そうな顔をしている。無理もない。この瞬間、また合戦がうちつづく世の中にもどると決まったのだから。

——さればこそ、誠実に当たるべきや。

と一益は思う。世が乱れれば乱れるほど、誠実さが貴重になる。こちらがまず誠意を見せれば、相手はそれを高く買い、さらなる誠意で応じてくれるはずだ。

「みな、自分の城に籠もり、北条より自分の領地を堅固に守ってもらいたい。われらはわれらの手勢だけで北条に当たる。そして上洛し、謀叛人をこの手で討ち、また当地に帰ってくる所存や。それゆえ、人質はみなお返しする」

今度は声があがらず、みなしんとなった。信じられないのだろう。

「どうかな」

と返答を促すと、しばらくして、

「いや、人質はそのままお留めなされ」
と国人のひとりから声があがった。
「おおせの通り、滝川どのが上洛なされば北条が出てくるのは目に見えてござる。しかし北条は大敵にて、われらがひとりひとりで当たっていてはかない申さず。当たるならば、みなでまとまって当たるほかなし。となれば御大将は滝川どののしかござるまい」
との主張に、うむ、理（ことわり）なり、もっともっとも、と声があがった。国人はつづけた。
「なにとぞ北条相手に無二の一戦を遂げ、打ちへこませて上野国への野心を打ち砕き、その上で心おきなく上洛なされよ。われら、心より願い申す」
この提案は一益にとって痛し痒（かゆ）しだった。大将とあおいでくれるのはありがたいが、北条と戦って勝てるかどうかもわからないし、それだけ上洛が遅れてしまう。
だが国人衆の声も無理はできない。彼らを敵にまわしてしまえば、上野国からの脱出さえも覚束（おぼつか）なくなるのである。
迷っているところに、沼田城をあずかる儀太夫から早馬が来た。謀叛を起こした国人に攻められていると使者は告げた。どうやら北条か上杉の息がかかった者が、早くも行動を起こしたらしい。
「われら籠城しておりますれば、後巻（うしろまき）の軍勢を遣わしていただきたく、願いあげまする」
使者は対応をもとめた。もはや一刻を争う事態だった。
「出陣や！」

一益は一決した。上洛する前に、まずはふりかかる火の粉を払わねばならなかった。城内にあつまっていた旗本の手勢と、上野の国人たちをひきいて沼田城へ急行した。

三

一方、甲斐国を与えられた河尻与兵衛は、奇妙な静けさの中にいた。
信長の指示を忠実にこなして、武田家中の者を根絶やしにした結果、甲斐国内の国人層は壊滅し、その下の地侍たちも国外に逃げるか、あるいは一族をつれて山奥に隠れてしまっていた。百姓たちも戦渦に巻き込まれるのを恐れて逃散していたため、村々に人影を見るのも稀になっていた。
その上、数万におよぶ織田勢が攻め込んだために、甲斐国内では食料が食い尽くされてしまっていた。合戦の最中でも、飢えた織田勢の足軽小者たちから逃亡が相次いでいたほどだった。北条方から見舞いとして贈られた米千俵も焼け石に水で、あと少し合戦が長引けば、織田勢は兵糧不足で崩壊していたところだった。
このため四月に織田の大軍が去ったあと、甲斐に残った与兵衛の手勢には十分な食料が残っていなかった。そしてこの地で年貢を吸い上げようにも、年貢納入を命じる窓口となるべき地侍は、徹底的な残党狩りのために消えてしまっていた。飢えて窮した手勢の中からは、かろうじて残っていた百姓の屋敷に押し込んで米を強奪する者も出るありさまだった。

河尻家中の者たちにしてみれば、生きるためにやむを得ないことだったが、そうした行為も甲斐の者たちの反感を買い、いっそう与兵衛から足を遠ざけることとなった。

六月のいま、逃げた百姓や地侍は徐々にもどってきてはいたが、地元の者たちとの接点を持たぬ与兵衛は、その実態すら把握できずにいた。

そんなところに、本能寺の変による混乱が襲ってきたのである。

与兵衛がいつ本能寺の変を知ったのかはわからない。おそらく駿河から徳川家康の手の者が知らせたのだろう。

一益とはちがって、与兵衛が甲斐を放棄して本領である美濃岩村へもどろうとした形跡はない。事態を理解できなかったはずはないから、逃げずに対処しようとしたのだろう。地元の者たちとの交流が少ない分、危機感が薄かったのかもしれない。

いずれにせよ、与兵衛は甲府にとどまっていた。武田家の館であった躑躅ヶ崎館には入らず、七、八町ほど東にある岩窪に屋敷をかまえ、三千ほどの手勢を要所に配って領内を押さえていた。

だが、いつまでも静かなままではすまなかった。

異変は、まず甲斐に隣接する信州の諏訪で起こった。

諏訪の有力国衆であった千野昌房という者が逃亡先から帰還し、その地に残って逼塞していた地侍衆をあつめて兵をあげたのだ。千野は与兵衛が家来を入れていた高嶋城を攻め、これを落としてしまった。

もちろんほうってはおけない。与兵衛はただちに甲府から千の手勢を派遣した。

すると北条と境界を接する甲斐の都留郡でも、おなじように帰還した旧武田の国人が叛乱を起こした。

「おのれ、北条のしわざか！」

与兵衛には見えていた。弱体化した武田旧臣には、単独で叛乱を起こす力はない。必ず外の力が入っている。

実際、諏訪の千野をかくまっていたのは北条だったし、都留郡の叛乱が北条の指図によるのは明白だった。

叛乱の予兆は、甲府の周辺にも見えはじめていた。時節到来とばかりに、逃げていた国人や地侍がもどってきていて、あちこちに人があつまるなどしだいに不穏な情勢になりつつあったのだ。

与兵衛の前に本多庄左衛門があらわれたのは、そんな時期だった。

「いや、なにしろ隣国じゃ。徳川家としては心配でな、手が足らぬようなら貸してやれと命じられて参った」

微笑みをうかべながら言う庄左衛門は、与兵衛より十歳ほど年下だが、勇猛な武将として近隣に鳴りひびいていた。家康の忠実な家来である。三百人ほどの手勢をつれて、甲府へ乗り込んできたのだ。織田家との取次もしていたので、与兵衛とも面識がある。

「それは親切、痛み入る」

与兵衛は一応歓迎したが、頼みもしないのに乗り込んでくるとはどういう下心があるのかと、勘ぐってもいた。信長の同盟者であった家康といえど、この混乱の中では信用できないのだ。その上、

「それがし、武田の旧臣に顔見知りもござれば、ちと話をしてみましょうに」

と言いだしたから、与兵衛の疑念は強くなった。

「なあに、亡き上様があまりに酷（むご）い仕置きをなさったので、甲斐から徳川領に逃げてきた者もようけおってな。そうした者を通じてこの地に残った者とも話ができるのじゃ」

と、庄左衛門はなんでもないように言う。

――徳川は、謀叛を起こすやつらと通じておるのか。

疑いはいっそう深くなる。

そうしたところへ、諏訪へ向かった与兵衛の手勢が甲府へ逃げもどってきた。国境を越える前に甲斐の教来石（きょうらいし）というところで諏訪勢と合戦になり、地の利を得ぬ与兵衛勢が大敗を喫してしまったのだ。

「不甲斐ない！　地侍ども相手に負けるのか！」

もどってきた者たちを叱り飛ばしたが、後ろ楯のない軍勢は弱い。織田勢というだけで敵が降参してきた春先の戦いは、もはや再現できるものではなかった。

それでも甲斐を維持するのが国主に抜擢してくれた亡き上様への忠義であると思えば、簡単に投げ出すわけにはいかない。与兵衛は、甲斐を動かぬ決意を固めていった。領内で少しでも

叛乱の兆しがあれば、すぐに手勢を送って鎮圧につとめた。岩窪の館には早朝から深夜まで早馬が出入りするようになった。

一方、本多庄左衛門は甲府の地侍屋敷に逗留すると、御国無事のために叛乱を起こしそうな者を抑え込むと称し、あちこちに人を遣わしたり、来客に応対したりと忙しく日々を送りはじめていた。

与兵衛はそんな庄左衛門からも目をはなさなかった。

そのうちに甲府近くに領地をもっていた武田旧臣が自領にもどってきて、家康の奉行から安堵状を与えられたとして人を集めていると、その地の家臣から注進があった。

与兵衛は家康の真意をかぎとった。

――やはり家康めは、甲斐を欲しがっているのか。

織田家があまりにも武田旧臣を痛めつけたため、家康が少し恩を売るだけで旧臣は徳川家になつく。そうした旧臣を先手として甲斐に送り込みつづければ、結果として甲斐がおのれの手に入る。家康はそう考えているのだろう。とすればあの庄左衛門めがやっていることは――。

裏切りではないか。

与兵衛は覚悟を固めてある仕度をした。そして本多庄左衛門を岩窪の屋敷にまねき、

「徳川どのは、かようなことをしておるとか。この真意はなにかな」

と糾弾した。理は理、非は非として、あくまで正面からぶつかったのである。

庄左衛門は薄笑いをうかべつつ応じた。

「武田の者たちがあまりにもかわいそうゆえ、殿が慈悲心をふるわれたのじゃろう。少しくらいいいではないか」

「それでは筋が通らぬ。甲斐は亡き上様が平均しになされ、わしに下された。わしの許しなしには寸土たりとも動かせん」

「そう頑なになりなさんな」

庄左衛門はとりあわない。

「そなたの手勢は、せいぜい三千じゃろ。それでは甲斐一国を治めるにはあまりに少なすぎる。この周辺の浪人どもが立ち上がるだけで、たちまち揉み潰されるじゃろ」

と馬鹿にしたように言う。

「悪いことは言わん。美濃へ帰りなされ。いまなら無傷で帰れよう。じゃが、あまり未練がましく居残ると……」

「わしが去れば、あとはどうなる」

与兵衛は抑えた声でたずねた。

「知れたこと。わが殿がよきようにはからうじゃろ。武田の者どもにも、織田家にも悪くないよう……」

「そなたの真意、ようわかった」

みなまで聞かず、「出会え出会え、討ちとれ！」と与兵衛が叫ぶと、おう、と声があがり、左右の障子が開いた。

白刃を手にした家来たちが、足音も荒く踏み込んできた。

「おのれ、謀ったな！」

庄左衛門は血相を変えて立ち上がったが、そこに幾本もの白刃が殺到した。

庄左衛門を討ちとった与兵衛だったが、これは結果的に自分の首を絞めることとなった。

主を討たれた庄左衛門の家来たちが憤激し、甲府の地侍たちに蜂起を呼びかけたのである。

与兵衛の屋敷は地侍の大軍にとりまかれ、逃れることもできなくなった。

そのころ上野国では、厩橋城に一万近い軍勢が集結していた。

「されば出陣せよ」

馬上の一益が使番衆に命じると、先陣の上野国衆がしずしずと城門を出ていった。

めざすは上野と武蔵の国境に近い倉賀野である。

先に起こった沼田城の叛乱は、すでに片がついていた。一益のひきいた大軍を見た反乱軍が恐れをなして、一戦もせずに逃げ散っていったのだ。

籠城していた儀太夫を救出して厩橋に凱旋してきた一益だったが、そこへ北条が兵をあつめ、上野をうかがっているとの知らせが入った。

すでに三万近い大軍が小田原を出てこちらへ向かっている上、先鋒として鉢形城の北条氏邦の手勢が国境近くまで進出しているという。北条は、なにごとも相談してくれと一益に書き送っておきながら、その一方で懸命に兵をあつめ、上野を攻略しようとしていたのだ。

上洛するにしても、まずは北条勢をたたいておかないと、追撃されるおそれがある。
——北条勢など、なにするものぞ。
との思いが一益にはある。
関東はやはり田舎で、鉄砲の数もそろっていなければ、戦術も武者ひとりひとりの武勇に頼る強引なところがある。その昔、板東武者が強弓をほこったころとは時代がちがう。鉄砲も多く、戦い方も洗練されている上方勢が負けるとは思えない。
上野の国衆も一益についていた。五千の手勢とあわせれば総勢一万を超える。それでも北条勢よりは劣勢だが、鉄砲の数は一益のほうが多いはずだ。いい勝負になると思っていた。
炎暑の中、両軍はまず金窪原で激突した。
このとき北条の本軍はまだ到着しておらず、北条氏邦の鉢形衆ばかりだったので、一益も自分の旗本衆は出さず、上野国衆にまかせた。それでも氏邦の手勢よりは多い。たちまち北条勢を打ち破り、三百あまりの首級を得た。緒戦の勝利を飾ったのである。
その夜、本陣とした古墳の前で、篠岡平右衛門ら家老衆と一益は、蚊を追いながら軍議を行った。
「小田原の本軍、昨日昼前には本庄まで来ていたとか。明日にはここに姿を見せましょうな」
平右衛門が、諜者の報告を告げる。
「人数は」
「五万とか」

ほう、と声にならぬ声があがる。
「こちらは上野衆に下野衆まで合わせても二万に足りぬ。しかも上野衆は今日のいくさで疲れておる。明日は後手にまわすしかありますまい」
儀太夫が慎重な意見を吐くが、一益は首をふった。
「なんの。このためにわが手勢を休ませておいたのや。明日はわれらの手で突っかけるぞ」
「さよう。北条はあまりの大軍ゆえ、一度に軍勢を開くこともできぬ。本陣は本庄にあるというぞ。この地に来ているのは、せいぜい二万から三万よ」
平右衛門が言う。一益は膝をたたいた。
「よくぞ言うた。そのうちの先陣をたたけば、あとは崩れよう。手勢が少ないとて心配はいらんわ」
威勢よく言い張って、一益は軍議を終えた。
人数の上で二倍以上の北条勢に対し、一益が勝算をもっていたとは思えない。しかしこうして大軍同士でにらみ合いとなった以上、退くわけにはいかなかった。もし退いたなら、追撃を受けて軍勢が崩壊するのは必定だったし、一戦もせずに逃げたと人の嘲りを受けて、そののち武将として立ち行かなくなる。
空前の大軍同士のぶつかり合いとなった決戦は、翌日未明にはじまった。
神流川の広い川原を埋めて、北条勢と滝川勢が入り乱れる。
鉄砲の数にまさる一益の手勢は強かった。人数で数倍の北条勢を押し込み、北条勢が築いた

陣城（じんじろ）まで押し返した。
だが、後備えの上野国衆がついてこなかったのが誤算だった。昨日の激闘の疲れと、もしここで一益が負けた場合、上野は北条が支配するという計算がはたらき、動かなかったのだ。そのため一益の手勢の後方に隙ができ、北条勢に回り込まれた。あやうく包囲されそうになった。
包まれては負ける。一益勢は混乱におちいり、退き口（の）がふさがる前にと、われ先に後退をはじめ、一気に崩れた。
本陣を前へ進めていた一益の周囲にも、敵が襲ってくる。馬廻り衆が追い払うが、敵の数はふえるばかりだ。
「殿、退かれませ！」
篠岡平右衛門が馬を寄せてきた。
「もはやこのいくさは負けじゃ。いったん退いて、立てなおすが肝心。箕輪の城まで退きなされ」
その血に汚れた顔に押されるようにして、一益は後退した。

四

追ってくる敵を振り払いつつ、一益は箕輪城へ逃げ込んだ。

北条勢は途中まで執拗に追ってきたが、城の手前でようやくあきらめたようだ。
開けっ放しにした城門に、敗兵がつぎつぎと逃げ込んでくる。
夜になってかぞえてみると、兵は半分以下に減っていた。上野国衆は散り散りとなり、だれもついてきていない。
気がつくと篠岡平右衛門も、津田治右衛門もいなかった。探させると、混乱の中で敵に取り込まれて討たれたと報告があった。
「わしの身代わりになったか」
一益は泣いた。信長が死んだと聞いても流さなかった涙だが、年来仕えてくれた家来の死にあっては、止めようとしても止まらない。
「えい、殿、しっかりなされ。明日にも北条が攻めてきましょうぞ」
儀太夫に叱咤され、一益はわれをとりもどした。嘆いている場合ではなかった。
気力を奮い立たせて生き残りの者たちと協議したが、北条との力の差を見せてしまった以上、上野国衆が味方にならないのは明白だった。となれば上野国にはとどまれない。
「よし、明日、出立する。伊勢へ帰るぞ」
一益は家来たちに宣言した。
だが本領のある伊勢まで帰り着くのは、容易なことではない。
上野から伊勢までの道中では、信濃と美濃の二国を通らねばならない。この混乱の中、果たして無事に通れるのか。いや、まず上野国内を安全に通れるかどうかすら、定かではないの

だ。
一益は厩橋へ使者を出し、あつめてあった人質をすべて箕輪へつれてきた。上野国衆が手出しできないよう、人質を楯にしたのだ。
翌日、一益は残兵をまとめて箕輪の城を出た。家来とともに百里以上の道中を突破する、大脱出行のはじまりである。
まずは信州の小諸城をめざした。小諸には家来を入れてあるので、安心して入城できる。
三千あまりの兵が火縄に火をくすぶらせ、人質を中心にしてすすむ。人質には女子供が多いので、どうしても歩度が遅くなる。さらに梅雨の終わりのため、ときおり驟雨が襲ってきて道がぬかるみ、隊伍が崩れる。それでも遅れる者を急がせて、陽のあるうちに十里を歩いた。
途中、国境の碓氷峠にさしかかったところで、上野国衆からの人質を解きはなった。そのとき一益はみずから出向いて、人質に頭を下げた。
「まことにあいすまぬことをした。ずいぶんと歩かせてしもうた。本意ではないが、急なことでな、ほかに手がなかったのや。許してくれ」
と丁重に言い含め、少しばかりの食料も持たせて送り出した。
「そこまでせずとも」
と儀太夫は言うが、
「いやあ、われらが無事だったのはあの者たちのおかげや。丁寧にあつかうのは礼儀やろ」
と一益は目を細めて見送った。

峠を越えたところに、小諸城から迎えの兵が来ていた。これで脱出の第一歩は無事に踏み出すことができた。
しかし、難関はここから先である。
信州の中でも佐久、小県郡を通り、さらに木曾義昌の支配する筑摩郡や木曾郡も通らねばならない。その地に住む地侍たちがすんなりと一益一行を通してくれるとは限らない。いや、織田勢がこの地を荒らし回ったのはわずか三月前である。地侍たちが恨みに思っていれば、この時とばかりに襲ってくるだろう。その上、この地からは上野国内のように人質も十分にはとっていなかったため、切り札もない。
途方に暮れたが、そこへ救いの神があらわれた。以前、浜松の家康のもとへ送り込んでいた長崎弥左衛門がようやくもどってきて、一益一行に追いついてきたのだ。
弥左衛門は平伏し、うまくいかなかったことを報告した。
「加勢をするとは、徳川どのはついに言うてくださらなんだ。役目を果たせず、まことに面目なし」
首尾よく家康に面会できたものの、はっきりとした返事はなく、土産として帷子をもらっただけに終わったという。
「おお、さようなことはもうよい。いまさら徳川どのの加勢が来ても遅いわ。それより、そなたが無事もどってきたのは何よりや」
一益は鷹揚に許した。いまやそれどころではないのだ。

「で、これより先は、いかような見通しになっておりましょうか」
弥左衛門が訊くので、信濃路をいかに突破するか考えあぐねていると打ち明けた。すると弥左衛門はしばらく考えたのち、
「依田どのに頼んでみましょうかの」
と言いだした。
「依田とは、だれやな」
「武田の旧臣でござるが、これがなかなかの器量人でござってな」
依田信蕃は武田旧臣で佐久の地侍だが、この春に信長の指示をうけた徳川勢が駿河へ侵攻したとき、番将として田中城を守っていた。徳川勢の攻勢にもまったく動ぜず城を守り通し、勝頼の死がはっきりしたのち、はじめて徳川勢に城を明け渡したという。
その大剛ぶりが家康の目に留まり、信長の武田勢狩りにつかまらぬよう徳川家にかくまわれていたが、この混乱を機に自分の領地である佐久へもどってきたらしい。
「あのご仁に頼めば、佐久と小県の地侍どもを押さえてくれましょう」
幸いに家康の下で紹介されたので面識はある、自分を使者として派遣してくれれば何とかする、と弥左衛門が言うので、一益はまかせることにした。
弥左衛門は一益の書状をもってさっそく出かけていった。
これで前途にひとつ、小さな明かりが灯った。
しかし弥左衛門の手配で首尾よく佐久と小県を越えたとしても、つぎに木曾路を踏破しなければ美濃にはもどれない。

木曾を押さえているのは、この春、織田方に寝返った木曾義昌である。
味方なのだから通してくれるはずと思ったが、念のために使いを出して打診してみると、意外にも返事がない。三千もの兵が領内を通ることに、何かしら不満があるようだ。あるいは領内を荒らされるのではと不安なのかもしれない。
困ったことになった。
いざとなれば合戦になるのを覚悟で押し通るという手もあるが、それでは犠牲が大きすぎるし、地の利がないところで戦っても勝ち目は薄い。勝ったところで、その場で力尽きて動けなくなることも考えられる。
見極めがつかず、数日のあいだ小諸城から動けなかった。
幸い、そのあいだに依田信蕃に話が通った。弥左衛門は信蕃を小諸までつれてきて、一益に面会させたのである。信蕃は、
「お困りとあれば手助けせよと、徳川どのから申しつかっており申す」
と言って、佐久と小県の地侍たちに呼びかけて通行に便を図るようにし、地侍たちが裏切らぬようにと人質まであつめてくれた。
「ふん。家康め、信濃に野心があるか」
一益は苦笑した。信濃を併呑しようとする家康にとって、一益が信濃でうろうろしていては目障りなのだろう。あるいはこのときすでに明智光秀が秀吉に討たれ、新しい世の中が開けそ

うな気配となっていたから、今後のことを考えて一益に恩を売っておこうとしたのか。
ともかくこれで佐久と小県は通れるようになった。だが木曾路については二度、三度と使者を立てたが、木曾義昌は通ってよいと言わない。どうやらこの男は信濃全域を手に入れる野心を抱いているらしく、家康の言うことも聞かないから、打つ手がない。
困り果てていたところに、妙な人物から面会の申し入れがあった。
人質として厩橋からつれてきていた真田昌幸の母親、阿続の方である。信濃衆の人質なので、まだ解放していなかったのだ。
阿続の方には厩橋にいたときに一度、茶をふるまったことがある。そのときの礼をしたいという。いまはそれどころではないと思いつつも、身動きができないため暇はある。一益は会ってみた。
案内されて城内の一角に行ってみると、阿続の方は風の通る桜の木陰に緋毛氈（ひもうせん）を敷き、風炉（ふうろ）に湯をわかして待っていた。
「けっこうな趣向ですな」
客としてすわった一益に、阿続の方は楽しそうに言う。
「ずいぶんとお困りのようじゃの」
「べつに困ってはおらぬが」
女に同情されては面目（めんもく）にかかわる。一益は虚勢を張ったが、
「せがれが申すには、木曾どのが意地を張るので滝川どのは動けぬようじゃと。違いますかな」

と言われて言葉に詰まった。人質がどうしてそんなことを知っているのかと思ったが、阿続の方はにこにこしながらつづける。
「ここはわが家の所領に近いので、せがれが毎日のように人を遣わしてくるのじゃ。信濃の動きはそれでわかるわの」
なるほど、それでこんな贅沢もできるのかと、一益は合点した。
阿続の方が点じてくれた茶を喫しつつ膝元にある茶入れを見ているうちに、「珠光の小茄子」の姿が思い浮かんだが、あわてて打ち消した。
「せがれの心配は、われら人質がどうなるかじゃ」
「さあて、人質を傷つけるつもりはござらんが、このままではわれらとともに兵糧を食い尽くし、この城で飢死かな」
隠さずに言ってやった。嘘ではない。小諸城は小さな城で、三千もの兵をやしなう兵糧の蓄（たくわ）えはない。早晩、兵糧が足りなくなるのは目に見えている。
「いやいや、兵糧を食い尽くす前に、どこかから攻め潰されよう。まわりは敵ばかりじゃ。越後の上杉が来るかもしれん。木曾どのが攻めてくるかもな。その前に北条が追いかけてくるかもしれん。この城が攻められれば、人質などどうなるかわからん。まず生きてはいられまい。そうじゃないかえ」
一益は小さくうなずいた。認めたくはないが、その通りだ。事態は切迫している。

阿続の方もうなずき、つづいて思いもかけぬことを言いだした。
「それならいっそ、こうしたらどうじゃ。われら人質をそっくり、木曾どのに進呈するのよ」
「ああ？」
人質を木曾どのに進呈？
どういうことか。
阿続の方は真剣な表情で訴えた。
「木曾どのは信濃一国をほしがっておる。ならば佐久と小県の人質は貴重じゃ。人質を殺すとおどせば、佐久と小県の地侍たちはみな木曾どのになびくかもしれんからのう。つまり、木曾どのに人質という通行賃を払うのよ。わしらも死ぬよりはええしな」
なるほど。佐久と小県の人質を渡すから、かわりに木曾路を通してくれと交渉するのだ。
奇策だが、木曾義昌が信濃一国を狙っているとすれば、うまくいくかもしれない。
一益は茶碗をおいて笑みを浮かべた。
「婆さま、よう言うてくれた。恩に着るぞ」
「なあに、箕輪で茶をふるまってくれた礼よ」
さっそく使者を遣わして交渉してみると、阿続の方の見通しどおり、義昌はこの提案を受けた。佐久や小県まで兵を出すつもりらしい。
義昌の野望のおかげで、一益は小諸城を出られる運びとなった。
小諸から上諏訪をへて木曾路に入り、人質を義昌に渡して、無事に木曾路をも通りぬけた。

伊勢へもどってきたのは、本能寺の変からひと月後の七月一日である。ともあれ百里以上の道を踏破し、敵地から生還したのだ。
一方、甲斐の河尻与兵衛は、本多庄左衛門の遺臣たちがあおり立てた地侍衆によって館を攻め破られ、討ちとられてしまった。
そしてその遺体は、逆さまに吊されて墓穴に埋められた。よほど甲斐の人々の恨みをかっていたらしい。
与兵衛が甲斐を治めていたのが二カ月あまりでしかないことを考えれば、そこまで恨みをかうようなことをしたとは思えない。おそらく信長のしたことまで与兵衛の所業として、罪を背負わされたのだろう。
忠義を貫くという生き方は、ひとつの主義主張を貫くということだから、一方で大きな反発を呼ぶのも避けられない。その上、一益のように国よりも小なすびをほしがる遊び心も、与兵衛にはなかったようだ。信長の命令を忠実に実行したにすぎないのだが、甲斐の人々にはその姿が悪鬼のように映ったのである。
与兵衛の墓はいまでも「逆さ塚」と呼ばれ、人々に忌まれている。

本能寺の変に黒幕はいたか

一

このあたりで、本能寺の変の黒幕について書こうと思う。
とはいえ、あまり気が進まない。なぜなら、本能寺の変に黒幕などいなかったと私は考えているからだ。
と書くと、なんだ矛盾しているではないかと呆れられそうである。なぜいるはずのない黒幕について書けるのか。いないと考えているなら、その理由を書けばいいだけではないか。日ごろノーテンキな小説ばかり書いているからといって、本人も信じていない話で印税を稼ごうなどとは志が低すぎるのではないか、と。
ごもっともである。
しかしまあ、気が進まずとも果たさねばならない義務というものは、世の中にいくらもあるもので。
そう。これは「義務」なのである。
なんとなれば、「本の題名に『本能寺』を入れる以上、本能寺の変の謎に言及し、真相究明をしなければならない」という不文律が、出版界には存在しているから。
なにが不文律だ、そんな馬鹿なものあるはずがないと思うのなら、書店で調べてみられるとよろしい。

本の題名に「本能寺の変」とあれば、それはもう例外なく、なぜ本能寺の変が起こったかを解き明かす謎解き本である。歴史書であれ小説であれ、百パーセントそうだといってまちがいはないだろう。
なにしろ本能寺の変は「永遠のミステリー」であり、「日本史最大の謎」なのだから（注：新・歴史群像シリーズ⑨『本能寺の変』（学研パブリッシング）より引用）、題名に本能寺をうたって、その謎について言及しない本など「空気読めない」であり、「掟破り」なのである。
まあ不文律かどうかはともかく、実際問題として題名に本能寺とあれば、読者の方々は真相に迫る謎解きを期待して買われるであろう。そうした読者に、「あれ、これちがうじゃねえか。謎解きしてねえぞ。カスだなこれ」などと思われたりすると、そのあと二度と私の本を買ってもらえないにちがいない。そうなったらゆゆしき事態である。
さらに、いま歴史解説書、あるいは歴史小説の分野では、本能寺の変には黒幕がいて、裏から光秀をあやつって信長を襲わせたのだ、といういわゆる「黒幕説」が盛況である。ブームといってもいいかもしれない。世の中の趨勢である。となると無視はできない。たとえそれはちがうだろうと思っていても、挨拶くらいはしておかないと、世の中においていかれてしまう。
だから私としては、『とまどい本能寺の変』と題した本を上梓する以上、本能寺の変の真相と「黒幕」についていやでも書かねばならないのである。
それと、本能寺の変の真相については私なりに持論があるものの――どんな持論かは本文の後半で書くつもり――、それでもなおすっきり割り切れず、残るものがある。そのあたりも、

黒幕について書こうと思った理由である。

さて、前置きはこのくらいにして、本題に入ろう。

まず、光秀が信長を討った理由を検討する作業の手はじめに、これまでの研究や論争の行方を概観してみよう。

なにしろ本能寺の変は「日本史最大の謎」なので、過去の研究の蓄積が半端ではない。その成果を利用しない手はないし、また無視しては先に進めないのである。

光秀が信長を討った理由として最初に出てきたのは、「野望説」である。すなわち天下人の座を奪うために光秀は信長を討った、という理解だ。

天下を奪う野望こそ光秀の反逆理由だったというのは、本能寺の変当時に生きていた人々が等しく持った感慨らしい。変の翌年書かれた『惟任謀叛記』という書には、光秀は「年来の逆意」があったとされていて、前々から天下人の座を狙っていたように書かれているし、このころ日本に滞在していたポルトガル人宣教師、ルイス・フロイスの本国あて報告書には、「光秀は野心旺盛な男で、日本の主になることをのぞんだ」とある。

光秀自身、変のあとに各地の大名へ味方になるようもとめる書状を送っているから、天下取りの野望があったと思われても不思議ではない。また、食うか食われるかの戦国の世にあっては、ただ信長を殺すだけでなく、天下をその支配下に収めなければ、今度は自分が狙われて危険だという事情もあっただろう。だからだれしもすんなりと「野望」を受け入れたのではなかろうか。

時代が進み、江戸時代になると「怨恨説」が出てくる。

野望説だけでは物足りないと思われたのだろうか。それとも関ヶ原と大坂の陣をへて天下が統一されたあとでは、信長を討てば天下が転がり込むという考えがあまりに短絡的で、現実的ではないと考えられたのか。

「怨恨説」はその字の通り、信長が悪逆きわまりない主君だったために光秀が虐待され、耐えきれずに立ち上がって長年の恨みを晴らした、という解釈である。怨恨をふくむきっかけとなった事件としては、

・丹波八上城を攻めたさいに人質に出した母を、信長が約束を守らなかったために殺された。

・中国表へ出陣するにあたって、本来の領地である丹波と近江の領地をとりあげられ、まだ征服していない石見と出雲を与えられた。

・意見のちがいによって信長から一度ならず打擲された。

史実かどうかはさておき、そんな話があげられている。恨みを晴らすために殺したというのなら、話はわかりやすい。

本能寺の変のあった天正十年、つまり一五八二年から、江戸、明治大正をへて昭和末期までの四百年間、異説が唱えられたことは何度もあったが、学問的にも世間的にもひろがることはなく、この二説で用が足りていたようだ。

「野望」と「怨恨」のちがいはあれ、どちらも光秀の心境に理由をもとめるもので、実行者が

光秀であることは明白な以上、どちらであってもさほど大きな差はない、ともいえる。
ところが一九九〇年ごろになって、この静かな寡占(かせん)市場ににわかに動きが出てくる。「朝廷黒幕説」なるものが登場したのだ。光秀は実行者ではあるものの、その背後には朝廷があって、黒幕として光秀を動かして信長を討ったのだ、という主張である。
真犯人は光秀とは別にいるというのだから、野望説、怨恨説とは根本的にちがう説である。
それまでも黒幕説や陰謀説はあったが、論拠があやふやで学問的にはとるに足りないと見られていた。しかしこの時は優秀な在野の研究者の方々が主体で、競うように当時の公家の日記など一次史料を読み込んで構築した論説だけに、主張に説得力があって学会をも巻き込み、世間の注目を集めることとなった。
そしてその後、論争の深まりとともに黒幕さがしが盛んになってゆく。
朝廷が真犯人という説がまかり通るくらいならもう何でもありだと思われたのか、あるいは黒幕の存在という考えが刺激的で、歴史に関心のある人々の知的遊戯としての需要にマッチしたのか、一大ジャンルとなり関連する出版物もふえた。「黒幕説」もしくは「陰謀説」が流行となったのである。
この流れの中で黒幕＝真犯人とされたのは、朝廷のほかに当時、宣教師を日本に送り込んでいたポルトガルのイエズス会、信長に追われた前将軍の足利義昭(よしあき)、信長の同盟者とはいえひどい扱いを受けていた徳川家康、信長亡き後の天下をとった羽柴(はしば)秀吉、本能寺の変の直前に信長から切腹を命じられた斎藤利三(としみつ)などである。当時目立っていた人物や、変後に利益を得たとさ

れる存在がほとんど網羅され、いまや黒幕は出尽くした感がある。
といったところが、本能寺の変の謎をめぐる論争の、この四百年あまりのおよその流れである。
戦国時代以来、ふたつの説のあいだでゆったりと揺れ動いていた議論が、この二十年あまりのあいだに急に活発化、複雑化しているのがおわかりいただけたかと思う。
先にも書いたように私は黒幕などいなかったと考えている。だが、もしかしたら、と気になる人物はいる。
以下、変の真相に迫る前に、黒幕の候補者としてその人物の姿をみてみよう。

二

気になる人物、それは朝廷関与説でも重要な役割を果たす公家の大立者、近衛前久(このえさきひさ)である。なぜ気になるのかといえば、この人、本能寺の変のあと、山崎合戦で光秀が敗北した直後、行方をくらましているからである。
合戦のあった六月十三日、もしくは翌十四日に京を出奔(しゅっぽん)している。そして山崎合戦の四日後、六月十七日の公家の日記にこうある。
「近衛殿、入道殿、嵯峨(さが)にお忍び候、打つと申すべき候とて人数嵯峨へ越し候、おぬけ候、御(お)方(かた)御所にてもおきづかい也、見舞に参り候、近衛殿今度ひきょう事の外也(ほかなり)」

近衛殿は前久、入道殿とは公家の勧修寺尹豊前内大臣である。

山崎合戦の直後、理由は不明なれど京から行方をくらまして嵯峨にひそんだ前久を打つ（討つ）ために兵が向かったが、前久はその前に逃げたという内容である。そして前久がなにか悪いこと（ひきょ）をしたと非難している。

だれが前久を討とうとしたのかというと、その三日後、六月二十日に別の公家の日記によって、織田三七信孝（信長の三男）と判明する。

「近衛相国、三七殿より御成敗あるべきの旨、洛中相触る」

なぜ御成敗あるべきなのかはよくわからないが、信長の遺児であり、また秀吉とともに山崎合戦を戦って光秀を滅ぼした信孝が追いかけているのだから、これはもう本能寺の変の犯人捜しに他ならない、とだれでも思うだろう。近衛相国こそ本能寺の変の黒幕ではないのか、と。

たしかに一見すると、ひどくあやしげな動きである。

では、この近衛前久とはどんな人物なのだろうか。

まず特筆すべきは、その育ちのよさである。公家の中でも筆頭格の近衛家に嫡男として生まれ、そのまま支障なく育って家をつぎ、十八歳で正二位右大臣、十九歳で関白、さらに公家の一大勢力、藤原氏の筆頭を意味する藤氏長者になっている。二十歳前にして「位人臣を極め」たのである。

なぜ若いうちにそんな出世ができるのかというと、公家社会が家格と前例を重視する閉じた世界だからである。

公家は、大きく堂上家と地下家に分かれている。

内裏の、清涼殿南廂にある殿上に昇殿が許される家が堂上家、許されない家が地下家である。当然、堂上家のほうが家格が上で、摂政関白や大臣、参議などに任官し、朝廷の中枢に参画する。一方、地下家は書記や出納など朝廷の事務仕事につく家柄である。

堂上家の中も、家格によって六つの階層に分かれている。その最高位が摂家と称される近衛、九条、鷹司、二条、一条の五家で、この五家でなければ摂政関白になれないとされている。五家は藤原北家嫡流が鎌倉時代に分かれたもので、うち近衛家が本家であり、筆頭格である。前久はその近衛家の第十六代当主となった。公家の中の公家だから、若いうちの昇進も当然なのである。

しかし前久は、近衛家当主という立場に満足していなかったようだ。公家社会を出て、武士になろうとした形跡が見られるのである。

その最初のこころみは永禄二年（一五五九）、前久が二十四歳のとき、上洛してきた越後の長尾景虎（のちの上杉謙信）に対して「与力同然の覚悟」を示し——つまり、家来になるつもりであるといって——、翌年、越後へ罷りくだるという形であらわれた。京を出て越後にはいると、当時、関東へ出陣していた景虎にしたがって越後から関東へとうつり、下総の古河城にはいっている。どうやら景虎の関東支配に協力しようとしたらしい。

だが周知のように、景虎の関東支配は成功しなかった。いったんは関東を席巻し、北条家を小田原城に追い詰め、十万の兵で取り巻いたものの、開城させることはできず、兵を越後に

引いている。

このとき景虎は関東管領に就任し、形の上では関東を支配するようになったものの、直後に自身が川中島で武田と対戦するなど越後本国から動くことができなくなり、上野（こうずけ）や下野（しもつけ）に出てくる北条や武田の力を抑えられなくなってしまった。以後、何度か関東に出陣するがうまくゆかず、結局は越後に引き籠もってしまう。

前久も、景虎とともに古河城を去り、越後にもどった。おそらく敵に追われる中で、あわただしい退去だったのだろう。そして景虎が引き留めるのもきかず、逃げるように京へもどった。結局、二年半の旅だった。

この越後・関東下向で前久がなにをしたかったのか、史料を読んだだけではっきりしない。ただの物見遊山や食客（しょっかく）としての下向（げこう）でないことはたしかだが、関東の武士に対して関白の威光がそれほど意味があったとは思えないし、また武力をふるった形跡もない。

景虎とともに関東を制圧し、支配者として君臨しようとした、といったことは考えられる。なにしろ京にいては公家や朝廷の存在は薄くなるばかりで、所領は武士に押領されて食うにも事欠き、朝廷では費用がなくて天皇の即位式もできぬありさまだった。公家の筆頭といっても、現世での実力は一郡を支配する武士にも劣るほどだったのである。気位の高い前久にとっては、耐えがたい状態だったのだろう。そこで関東という新天地に出て、公家筆頭の地位にふさわしい力と財力を得ようと思ったのではないか。

だが坊ちゃん育ちの前久が通用するほど、武士たちの世界は甘くなかった。関白さまは関東ではなにもできず、尻尾を巻いて京へ逃げ帰ったのである。

その後は懲（こ）りたのか、しばらく目立った活動をしていない。京で近衛家の長としておさまり、関白の職務をつとめていた。

波乱が起きるのは、永禄十一年（一五六八）、織田信長が足利義昭を奉じて上洛してからである。

この年の十一月、前久は京から逃げ出す。「武命に違（たが）う」、つまり新しく将軍になった義昭と対立して、身の危険を感じたためらしい。

同時に関白の職も解かれた。義昭によって京からも政界からも追放されたのである。

なぜ追放されたのか。真相は藪（やぶ）の中だが、後年、前久本人が書き記した書状によると、悪人に讒言（ざんげん）されたため、としている。おれは無実なのに、将軍にあることないこと吹き込んだやつがいる、というのだ。

公家社会の頂点に立つだけに、前久には敵が多かったらしい。

そもそも公家社会には家礼という慣行があって、派閥（はばつ）ができやすくなっている。家礼は「カレイ」とも「ケライ」とも読む。若手の公家が五摂家のいずれかに出仕し、公私にわたって奉仕する中で朝廷での政務や慣例を習い、奉仕される摂家のほうからは、家礼に位階の昇進など便宜をはかったり庇護したりする、という仕組みである。

一見すると武士の主人と家来に似ているが、公家社会では武士のように主人から俸禄を与えられる場合は少なく、主従というよりもっとゆるやかな関係である。現代でいえば政党の派閥

に似ている。摂家が派閥領袖、家礼が陣笠議員といったところだろうか。

摂家が五つあるのだから、派閥も五つはあっただろう。戦国時代、どのような力関係にあったかはわからないが、前久に対しては二条家がライバルとして存在したらしい。讒言もそのあたりから出たのだろうか。

ともかく前久は追放され、子息とともに大坂に逼塞した。そしてのちに河内、丹波とうつり、じつに七年間の逃亡生活を余儀なくされたのである。

京へもどったのは、前久を追放した足利義昭が信長に見放され、京を追われたあと、天正三年（一五七五）である。信長が呼びもどしたものらしい。

そのあと前久は信長に協力し、石山本願寺との和平の調停や、九州の島津氏と大友氏の講和に奔走する。

信長の家来になったわけではないが、失われた所領を信長によって取りもどしてもらったり、新しい知行をあてがわれたりしているから、事実上の家来として活動しているといえるかもしれない。天正九年（一五八一）の京都馬揃えに騎馬で参加したり、天正十年に信長が武田家討伐に信濃、甲斐へ出陣すると、前久も従軍しているのは、そのあらわれだろう。

信長との関係は良好で、鷹狩りに同行したりたびたび安土城を訪れたりしている。その姿は親しい友人のようである。

前久は公家に似合わず鷹狩りと乗馬が好きで、その点でも信長と波長が合ったのだろう。信長は二条に屋敷をもうけた（天正七年に誠仁親王にゆずっている）が、そのとなりに前久が住む

屋敷を建てた。所領についても、いずれは一、二カ国をあてがうという話があったようだ。

とはいえ、親密なばかりかというと、そうでもないような挿話もある。『甲陽軍鑑』にのっている話だが、武田征伐のあと甲州にて、前久が信長に同道して駿河へ参るべきかと奏者をとおしてうかがいを立てたところ、信長は馬上から「近衛わごれなんどは木曾路を上らしませ」と同行を拒否したという。

わごれとは「我御料」で、「対等もしくはそれ以下の相手に対して親しみをもって用いる語」、つまり現代語なら「おめえ」とか「あんた」くらいだろうか。これが事実なら、前久の体面はおおいに傷ついたことだろう。

そうしたところに本能寺の変が起こったのである。そして変から十二日後、山崎の合戦で光秀が負けた直後に前久は逃亡している。

果たして前久は本能寺の変の黒幕なのだろうか。

三

前久の疑惑について検討する前に、本能寺の変の真相について、私の持論を披露したい。

まず、「なぜ光秀は信長を討ったのか」という大きな謎にとりかかる前に、光秀その人について検討してみよう。

私が注目しているのは、光秀の年齢である。

通説では変の当時、五十五歳だったとされている。映画やテレビでも光秀役は三十〜五十代の俳優が演ずることが多いようである。

しかし通説ほどあてにならぬものはない。働き盛りの武将としてふさわしい年齢なので、五十五歳説は広く受け入れられてきたが、その根拠は実はひどくあいまいなのである。

昭和三十三年（一九五八）刊、高柳光寿著の『明智光秀』（吉川弘文館）に「光秀の年齢」という項目がある。

ここでは、まず最初に「光秀の年齢はわからない」としつつも、『明智軍記』という書物では五十五歳としているとし、この書は悪書で信用できないが、

「しかし何だかそれくらいではなかったかというような気もする年齢である。そして光秀の年齢はこの書以外には全く所伝がない」

と結ぶのだ。

これが五十五歳説の根拠である。

著者の高柳氏は日本歴史学会長をつとめた戦国史学の重鎮で、しかも学者による光秀の評伝はこれが最初、ほかに異を唱える学説もないこともあって、「何だかそれくらいではなかったかというような気もする」だけで光秀は五十五歳とされてしまったのだ。

高柳氏が最初に「光秀の年齢はわからない」と釘を刺しているのに、結果的に数字だけが一人歩きしたのである。昭和三十年代とは、まことに大ざっぱな時代だったようだ。

しかし、学問は進歩する。

昭和三十三年以降これまでに、いくつかの史料上に光秀の年齢が記載されているのが発見され、報告されてきた。その結果、五十五歳説のほかに五十七歳、六十三歳、そして六十七歳の三つの説が新たに出てきたのである。

それぞれの説を検討してみよう。まず五十五歳説の出所である『明智軍記』は、江戸時代中期、元禄のはじめごろに刊行されている。つまり光秀死後百年以上もたってから書かれた軍記物である。

軍記物とはなにかといえば、「江戸時代に書かれた時代小説」と思ってもらえばよい。すなわち「創作物」であり、面白く読まれることを眼目として書かれ、木版刷りで出版された書物で、歴史の事実を伝えるものではない。高柳氏は『明智軍記』を「誤謬満載の悪書」と指弾しているほどである。事実と空想を混じえて書かれているので、歴史史料としてはあつかえない。

またいくつかの系図類も五十五歳説をとっている。系図類までふくめると、史料の数からいえば五十五歳説が一番多いようだ。しかし系図類は、信頼性としては軍記物と同等か、それ以下の評価しか与えられていない。前記の高柳氏も系図類は重視せず、というより無視して論を進めている。

五十七歳説は、肥後熊本藩細川家の家史である『綿考輯録』にある説だが、これは十八世紀終わり、つまり光秀の死後二百年ほどたってから編纂されたものであるし、六十三歳説は軍記物で、『明智軍記』とほぼ同じころに書かれた『織田軍記』にあり、いずれも史料の信頼性

という点で疑問符がつく。

その中で、『当代記』という書物に、「明智、時に六十七歳」との注記があるのが昨今、注目されている。これは戦国史研究家の谷口克広氏がその著『検証　本能寺の変』（吉川弘文館）で指摘されたのを嚆矢とする（光秀の年齢に関するこの章の記述も、同書に教えられるところが大きい。紙面を借りて御礼申しあげます）。

『当代記』は江戸時代初期に書かれており、しかも軍記物ではなく、年代記の体裁になっている編纂物、つまり史実を伝えるために書かれたものである。時代小説の『明智軍記』よりはるかに信用できる書物なのだ。書物の信用力が書いてある内容の確実性を保証すると考えれば、六十七歳説は有力となる。

以上をまとめると、五十七歳、六十三歳説は史料の信頼性で劣り、支持しにくい。おなじく信頼性は足りないものの、史料の数でいえば五十五歳説に軍配があがるが、史料の信頼性の高さからすると、六十七歳説をとるほうが合理的ということになる。

どちらをとるかという話になるが、私は六十七歳説をとりたい。『当代記』の記事は全般におよそ信頼できるものであるし、五十五歳という「らしい」年齢でなく、六十七歳というちょっと「意外な」年齢を書き込むあたり、それなりの裏付けがあったはずと思うからだ。なにより光秀死後数十年の、生前の光秀を見知っている人がまだ生きていたであろう時代に書かれている点が強い。

しかし光秀の年齢を六十七歳とすると、別の問題が生ずる。人生五十年といわれた戦国時代

に、六十七歳のご老人が鎧を着て合戦をするなど、感覚的には受け入れがたいのである。本当に光秀はこんなに老けていたのだろうか。

だがちょっと調べてみると、当時でも高齢者は十分に活躍していたのがわかる。

織田信長の右筆に七十歳前後と思える者が楠木長諳と武井夕庵のふたりおり、京都所司代の村井貞勝も七十歳前後、旗本の武将にも少なくともひとり――稲葉一鉄――はいる。

本能寺の変の時点で、信長の下には方面軍団長ともいえる家老格の重臣が四人いた。畿内をうけもつ光秀のほか、北陸方面の柴田勝家、関東の滝川一益、中国の羽柴秀吉である。

それぞれの年齢をみると、秀吉だけは飛び抜けて若く四十六歳だったが、滝川一益は五十八歳、柴田勝家は六十歳前後（五十七歳、五十八歳など諸説ある。『フロイス日本史』には六十歳に達しているとあり、高柳光寿氏は六十二歳としている）だった。ここに明智光秀六十七歳を入れても、さほど違和感はないように思える。

さらにいえば、徳川家康が大坂夏の陣を指揮したのが七十四歳、毛利元就が最後の子供を作ったのが七十一歳と、元気なお年寄りはいつの時代にもいるものなのである。

光秀が六十七歳だったとしても、戦国武将として不自然ではない。やはり『当代記』の記述を信じていいのではないかと思われる。

と、年齢について結論を得たところで、つぎに光秀の「小さな謎」について考えてみたい。

ここで「小さな謎」というのは、本能寺の変前後に見られる光秀の不審な行動のことである。さまざまな史料に、本能寺の変の少し前から死の直前までの光秀のようすが描かれている

が、その中に気になる動きがあるのだ。たとえば左のようなものである。

①徳川家康を接待するよう命じられた光秀の安土屋敷で、用意の魚が腐って悪臭をはなった。これを聞いた信長が腹を立て、宿舎を堀久太郎のところへ変更した。光秀は面目を失って、魚や調度品を堀へ投げ込んだ。（川角太閤記）

②家康の接待について信長と話し合っていたとき、信長の好みに合わぬ要件で光秀が言葉を返したため、信長は立ち上がり、怒りを込め、一度か二度、光秀を足蹴にした。（フロイス日本史）

③光秀が愛宕山に参籠したとき、神前で二度三度と籤をとった。（信長公記）

④愛宕山で連歌を詠み終え、寺僧が笹粽を出したとき、笹の葉をむかずに口にした。（林鐘談）

⑤本能寺を襲う前夜、亀山城下に兵をあつめた光秀は、酉の刻（午後六時）、自身で兵のあいだを馬で乗りまわり、三段に備えた。（川角太閤記）

⑥おなじく前夜、兵を進発したあとで重臣五人をよんで信長を討つとあかし、もし同心しないときは本能寺へひとり乱入し、腹を切る覚悟と迫った。（川角太閤記）

⑦細川藤孝あてに出した書状の中で光秀は、畿内は五十日百日のうちに平定するだろうから、そうしたら十五郎にまかせて引退すると表明。

⑧山崎の合戦に負けて勝竜寺城に籠もった光秀は、夜半、ひそかに抜け出て、大道を通ら

ず、田の畔、藪原の中をつたい、忍び忍びに落ちていった。（惟任謀叛記）

⑨勝竜寺城を抜け出た光秀は、隠れ歩きながら、農民たちに多くの金の棒を与えるから自分を坂本城に連行するようにと頼んだ。（フロイス日本史）

ほかにもあるが、信用のできそうな史料に限るとこれくらいだろうか。

こうした挿話のどこがおかしいかというと、たとえば①の挿話では、信長に人々のうわさがとどくほど悪臭がひどいのなら、なぜ光秀自身が気がつかなかったのか、という点である。

この時点、陰暦五月末は現代では七月上旬だから、冷蔵庫もない戦国時代に生魚が傷むのは当然である。そのあたりの配慮がないのもおかしい。

なおこの挿話を荒唐無稽だと否定する人も多い。『川角太閤記』も軍記物の一種であり、創作が盛り込まれているのは確かである。しかしここでは「その時節の古き衆の口」と情報提供者があったことを記しており、この節に関しては信用していいと思う。

②は、信長を怒らせている時点ですでにおかしい。光秀は織田家中ではよそ者として孤立しており、信長の支持だけが頼りだった。『フロイス日本史』にこうある。

「……（光秀は）その才略、深慮、狡猾さにより、信長の寵愛を受けることとなり、主君とその恩恵を利することをわきまえていた。殿内にあって彼は余所者であり、外来の身であったので、ほとんどすべての者から快く思われていなかったが、自らが受けている寵愛を保持し増大するための不思議な器用さを身に備えていた」

信長への取り入り方を心得ていて、機嫌を損ねるようなことはしなかったから、あれほど出世したのである。なのに、このときは足蹴にされるほど信長を怒らせたとは、どうしたことだろうか。

③の神籤のとり方も、やはり異常である。光秀の焦りをあらわしているという見方が一般的だろうが、果たしてそうか。百戦錬磨の武将が、大吉や吉が出なかったからといって未練がましく二度、三度と籤をとった、とは思えない。

また二度三度と籤をとったのは、願い事がふたつもみっつもあったから、と解釈している人もいるが、それならごくふつうのことであり、人目に立つこともなく、記録に残されもしなかっただろう。ところが記録に書き残されているのだから、やはり当時の人々の目にも異常に映ったと解釈すべきである。

⑤の異常さは、「自身で馬を乗り回し、兵を三段に分けた」ところにある。

ふつう、大将は指示を配下の使番（つかいばん）に出し、使番が侍大将に伝えて軍勢を動かすものだ。このときの軍勢は一万三千ほど。そんな大軍を動かすのに、大将自身が軍勢のあいだを走り回って指示を出すなど、尋常ではない。

しかも酉の刻といえば午後六時前後である。⑥と⑧、⑨もそうだが、このときの光秀は夕方から夜にかけて活動的になっているように見える。なぜだろうか。

⑦は、畿内を平定したら十五郎にまかせて引退する、としたところが異様である。

十五郎は光秀の嫡男だが、このときわずか十三歳だった。自分が天下を混乱に陥れたのに、

足許（あしもと）だけ整理したらあとは十三歳の子供にまかせて引退するなど、正常な判断力をもっていたら表明できることではない。

しかもこの書状は、自分から離れていこうとする細川藤孝を、味方につなぎとめようと説得するためのものなのである。十三歳の子供にまかせると書けば、説得どころか逆効果になるということが、わからなかったのだろうか。

以上は、みな細かいことである。

「日本史最大の謎」を議論しているのに、どうして「魚の腐ったにおい」が問題なのか、と首をひねる方もいらっしゃるだろう。

しかも異常さが感じられるという点をのぞけば、それぞれの項目にとくにつながりもないように見える。

だがここにひとつの仮定をおくと、不審が解ける上、すべてがつながってくるのだ。

その仮定とは、

「光秀は認知症にかかっていたのではないか」

というものである。

そう。認知症。主に高齢者の方がかかる病気である。

認知症というと「物忘れ」、「痴呆（ちほう）」といった症状が思い浮かぶが、それぱかりではない。脳の機能が全般的に低下してゆくので、さまざまな異常が見られるようになる。

たとえば「感覚の障害」も症状のひとつで、においがわからなくなったり、味覚がなくなったりする。口の中の感覚も鈍くなるから「異物食い」が見られるようになる。パンをビニール袋ごと食べて平気でいる、といった姿も見られる。

これは、先の①と④の挿話にあてはまるだろう。においがわからなくなったため魚が腐った悪臭に気づかず、口の中の感覚が鈍ったため笹を口に入れても異常と感じなかったのである。

また「物忘れ」も大きな症状だが、認知症の物忘れで特徴的なのは、「近時記憶から失われる」という点である。

つまり十五分前、三十分前の出来事を憶えていられなくなる。だから夕食を食べたすぐあとに、「夕食はまだか」と催促したりする。

その一方で五年前、十年前のことは憶えているし、若いころに習い憶えた技術は症状が相当に悪化しないかぎり衰えない。認知症にかかった和歌の先生が、入院先で患者さんや看護師さんに和歌の指導をする、といったケースも報告されている。

③は、近時記憶を失った光秀が、ついさっき籤をとったことを忘れてしまい、結果として二度、三度と籤とりをしたということではないのか。しかし若いころからならした連歌の腕は衰えていないので、愛宕百韻の連歌を詠むことはできたのである。

夕方になるとそわそわしはじめ、外へ出かけて夜中になってももどらない、という行動パターンも認知症の方にしばしば見られる。時間や場所の認識があやしくなるので、暗くなると不安がつのり、じっとしていられなくなるのである。

⑤、⑥は迫る闇にせかされるようにして、夕方から行動に出たのだろう。

なお、光秀が勝竜寺城から落ちるときは騎馬で家来たちとともに抜け出し、小栗栖の藪の中で馬上、土民に竹槍で突き殺された、という話が通説となっているが、これは小瀬甫庵の『太閤記』に書かれている話で、作者によってかなり潤色されていると見なければならない。

京の東南、小栗栖周辺、もしくは醍醐、山科あたりで一揆勢に殺されたことは各史料が一致しているが、討たれたときの状況はさまざまに描かれている。

『太閤記』のその場面は会話や息づかいまで書き込まれており、まるで見てきたようだが、それだけに作り物感がある。いずれにせよ「軍記物」すなわち時代小説の一シーンであり、史実とは思わぬほうがよい。

⑧は『惟任謀叛記』より採ったが、変後五十年以上もたってから書かれた『太閤記』より、変の翌年に書かれた『惟任謀叛記』のほうが信用できるのはいうまでもない。ここに書かれているように、光秀は徒歩で、家来たちに知らせることもなく、ほとんど供もつれず、夜中に勝竜寺城を抜け出し、田の畔道などをつたって坂本城に帰ろうとしたのだ。

⑧、⑨は勝竜寺城から夜間に抜け出て徘徊した末、自分の位置がわからなくなってしまい、土民たちに助けを求めた、と考えられないだろうか。認知症にかかった高齢者の方の夜間徘徊を思わせる行動である。

ところで、認知症は四種類あるとされている。

一番有名で、数も多いのがアルツハイマー病である。物忘れからはじまって徐々に進行し、

仕事の手順を忘れてトラブルが多くなり、自分は虐待されているという妄想が起こり、理性や感情を失って時に攻撃的になったり、あるいはやる気をなくしたりする。そのうちに歩行や入浴など日常生活ができなくなって、最後は死に至る。

ほかに脳血管性(のうけつかんせい)認知症、レビー小体型(しょうたいがた)認知症、前頭側頭型(ぜんとうそくとうがた)認知症があって、人によってはいくつか合わせて罹患(りかん)していることもある。

共通しているのは脳の機能が低下していることで、脳のどの部分が損なわれたかによって症状がちがってくる。記憶は比較的保たれていても、感情の起伏が激しくなったり、正常な判断力が失われて行動が抑制できなくなる場合もあるし、妄想や幻覚、幻視が強くあらわれることもある。

光秀の認知症がどの型なのか。医者でもない私が診断するのはおこがましいし、無理ではあるけれど、行きがかり上あえて判断すると、記憶があやしくなり位置の見当識も失われているところから、アルツハイマーではないかと思われる。おそらく近時記憶を失っただけでなく、言うことがあやしくなり、判断力が低下し、被害妄想も見られただろう。また主人を殺害するという特異な行動を抑制できなかったところや、食行動異常も見られる点からすると、前頭側頭型認知症の可能性もある。

②は、認知症によって仕事がうまくできなくなったことによる失態ではなかろうか。

数カ月前までは信長に対しても如才(じょさい)なく応対していたのに、このころは記憶や判断力が低下していて、命じられたことを忘れていたり、質問にうまく答えられず、短気な信長の怒りをかった、といった状況が考えられる。逆切れして怒鳴り返したり、あるいはとんでもない非常識なことを言ったりしたのかもしれない。⑦も、十三歳の息子に自分の後釜がつとまるという、常識外れの判断を示しているところが疑わしい。

というように、光秀が認知症であったとすると、これまで挙げた小さな謎がきれいに解けるのである。

そして、なぜ信長を討ったのかという大きな謎もあっさりと解ける。

光秀は認知症による被害妄想によって信長に対する憎しみをつのらせたばかりか、感情が抑えきれなくなっており、さらに信長を討てばどのような結果になるかが、判断力や思考力の低下によって見通せなくなっていたのだろう。だから堂々と主人殺しという反社会的かつ破滅的な行為を実行に移せたのだ。

そう考えれば、常識では理解しにくい行動も納得がゆくのではないか。

ここで光秀の年齢が鍵になってくる。五十五歳ならば認知症にかかるには若すぎる——若年性認知症もあるが、発症する確率は小さい——が、六十七歳なら可能性は、大きいとは言えないにしても、ないとも言いがたいほどになる。ちなみに現代において六十五歳〜六十九歳で認知症となる割合は……。

一般に一・五パーセント程度とされている。

六〜七十人にひとりである。

……もう少し状況証拠を提出してみよう。

戦国武将の中で、晩年は認知症にかかっていたのではないかと、識者から指摘されている者がいる。皮肉なことに、光秀を倒した男、豊臣秀吉である。

晩年に秀次一族を虐殺したり、利休を殺したりといった残虐な行動が目につくが、だから認知症、というわけではない。認知症とするその根拠は、『利家夜話』という、前田利家の話を家来がまとめたとされる書物に記載のあるつぎの挿話である。

秀吉が晩年の病床で寝ているとき、突然悲鳴をあげてもがき、臥所から這い出してしまった。そばにいた侍医や北政所たちが秀吉を寝床にもどし、わけを聞いてみると、「目の前に信長が出てきて、もはや藤吉郎よき時分なれば、迎えに参ったと言う。それがしは上様の仇を討って奉公申しあげたと弁明しても、わが子を殺したなと襟をつかまれて引きずり出された」と答えた。

右のように睡眠中に寝言をいったり身体を動かしたりし、起こすと夢の内容をよく憶えている、というのは「レム睡眠行動障害」という症状だが、この障害をもつ人は「レビー小体型認知症」になりやすいとされる。当然、「レビー小体型認知症」の人にもよくこうした障害が見られる。また晩年の秀吉には尿失禁もあったようだが、それが自律神経障害であるなら、「レビー小体型認知症」の症状のひとつである。つまり秀吉は晩年、認知症が進行中であった可能性が高いのである。

六十二歳で亡くなった秀吉が認知症であったのなら、六十七歳の光秀が認知症であっても不思議はないと私には思えるのだが。

またこれまでには、光秀がノイローゼになっていたため本能寺を襲ったという「光秀精神異常説」が唱えられたこともあった。

しかしノイローゼにしてはわざわざ愛宕山を登って――海抜九百メートルほどあって簡単に登れる山ではない――連歌を詠むなど、意欲の低下も理性の混乱も見られないため、あまり受け入れられないできた。その点、初期の認知症ならば愛宕山に登ったことも、連歌を詠めたことも説明可能である。

まして認知症のはじめのうちは、痴呆状態と正常な状態が混在することがあり――まだら呆けなどという――、ある時には正常な面を見せても、しばらくあとに非常識な行動に出ることもある。周囲の人間にはおかしいのかおかしくないのか判断がつかず、振りまわされてしまう。

おそらく光秀の家来たちも、ある時は冴えた武将ぶりを見せるのに、その後、呆けたように行動不能となったり、不可解な行動に出る光秀に当惑しただろう。どこかおかしいと思いつつ、突き進む光秀についていったのではないか。

なお誤解のないように書き添えておくと、認知症を患った人が危険な存在だ、と主張しているのではない。

認知症を患った場合、意思の疎通がむずかしくなって周囲の人々と軋轢が生ずることはある

が、社会的に大きなトラブルが起きることはまずない。高齢のため社会の中枢から距離をおいていることが多いし、脳の萎縮にともなって行動力も衰えているので、家に閉じ籠もりがちになり、静かに暮らす人が多いのである。

しかし光秀は戦国大名という「軍事独裁者」だったから、現代とは話がちがう。独裁者の行動を止められる人も組織もなかったし、意のままに動く一万数千人の軍勢という強大な破壊力も手にしていた。

認知症で被害妄想をつのらせ、感情の抑制が困難になっていた独裁者の前に、たまたま数十人の供回りだけをつれた憎き信長という恰好の標的があらわれた結果、「日本史最大の謎」である本能寺の変が起きたのである。

四

以上が私の持論、光秀認知症説である。

認知症が原因の単独犯で、黒幕はいないという結論になり、当然、前久は関係ないことになる。

しかし、少しだけ引っかかるのである。前久は本当に無関係なのだろうか。

前久の生涯を、もう少し見てみよう。

織田信孝から疑いをかけられた前久は、嵯峨から醍醐に走り、書状でもって弁明をした。こ

れが信孝の聞き入れるところとなり、疑いを解かれて京へもどることができた。

ところがそのあと、今度は秀吉に疑われるところとなり、変後、二度目の逃走となる。今度は徳川家康をたより、遠州浜松へ逃げた。そして家康を通じて秀吉に申し開きをし、聞き入れられて四カ月後に京へもどっている。

結局、二度とも疑いは晴れたのだが、そもそもなぜ逃げねばならなかったのか。

前久が後日、書いた書状によると、

「……かの佞人どもまた讒訴せしめ、悪し様に申し成し、虚名虚説沙汰のかぎり……」

と、やはり前回とおなじく、公家同士の派閥間の争いによる讒言で、悪人があることないこと訴えたせいだとしている。またもや無実の罪を着せられたと言いたいようだ。

実際、讒言があったことを察知した前久派の公家が注進におよび、それを聞いた直後に前久が逃亡した、という動きが公家の日記から推察できる。前久が何をしたのかわからないが、多分、あることないことチクった者がいたのだろう。

こののち前久は出家し、以後、一線から退く。近衛家は嫡男の信基が継いだ。

しかし前久の暮らしはその後も平穏ではなかった。

天下をとった秀吉がその権威付けのため、関白職を狙ってきたのだ。

先に書いたように、摂政関白の職は五摂家の者しか就けない決まりである。いくら天下人といっても、氏のない秀吉が関白になるのは無理だ。

どうしたかというと、秀吉は前久の猶子になったのである。猶子とは親子関係を仮に結ぶこ

とで、現代でいえば養子に入ったようなものである（ただ、養子とはちがって相続権はないとされる）。前久の子、藤原秀吉として関白になると申し出たのだ。

　天下を牛耳った秀吉の要求を、前久が断れるはずもない。近衛家は関白職を奪われてしまった。

　当初は一年かぎりとの約束だったが、一年たっても秀吉は返さず、それどころか豊臣姓を創設し、豊臣姓や羽柴姓の武将を大量に昇殿させ、朝廷を乗っ取る勢いを見せる。そして関白職は秀次にゆずり、豊臣家による関白の世襲をはじめてしまった。

　前久は、ここでもいいように利用されたのである。

　のちに秀吉が死んで関ヶ原の合戦があり、徳川家康が天下を手にすると、家康は武家と公家との官位を切り離す方針をとった。そのため関白の職は公家にもどってきて、前久の子の信基（改名して信尹）は、晴れて関白に就任することができた。

　引退した前久は逃亡する必要もなくなり、京に住み、家族にかこまれておだやかに暮らしたようである。慶長十七年（一六一二）に没した。享年七十七歳。

　さて、こうした前久が本能寺の変の黒幕であったのかどうか。

　前久の生涯を概観すると、どうにも腰の軽さが目につくのである。

　長尾景虎にしたがっての関東入りといい、足利義昭に追われて七年も流浪したことといい、行動的ではあるが、深い考えや経験によって行動しているわけではない。仕方のない面もあったにせよ、ただその時節の勢いやその場の雰囲気に流されて行き先を決めているように見え

る。

　教養は、あったのだろう。書状などを見ると達意の書きぶりで、語彙といい文章の構成といい、この時代の最高クラスの知性を備えているとわかる。

　本願寺との調停などを見ると、行動力があり、人脈もあり、政治的にそれなりの能力があったこともうかがえる。

　しかし、どうも空回りしている印象がぬぐえない。

　公家社会の代表として、朝廷や公家の立場を高めるような動きがあってもよさそうなのに、そうしたところは見られない。また天下をどうしようという、大所高所からの展望もあったとは感じられない。

　政治力があったといっても、信長や秀吉にひとつの駒としていいように使われたとしか見えないのである。

　それに、自身に悪行がなかったとしても、二度も讒言されて逃亡せざるを得ないなど、前久には敵が多かったようである。お坊ちゃま育ちだけに脇が甘いところがあったのだろうか。それともどこか人徳に欠けるところがあったのか。

　生まれ育ちは上流中の上流で、衰えたとはいえそれなりの財力もある。期待されて最高の地位にもついた。なのに、やることなすこと世間の期待を裏切ってしまった。

　なまじ教養と行動力と、家柄から来る自尊心があるため、理想論をふりかざし、解決する方策もないのにあちこちに首を突っ込みたがる。結果として失策という評価ばかりを残して退場

した。現代でも政治家にいそうなタイプである。

こうしたタイプの政治家がなにか大事を成すことは、まずない。

だから前久には信長を倒す意志も能力もなかったし、黒幕などは、たとえなりたくてもなれなかったのではないか。

本能寺の変直後に逃げたのは、やはり讒言によるのだろう。濡れ衣を着せられたという前久の主張は、信じていいように思える。

その一方で、坊ちゃん育ちの甘ちゃんだからこそ、うっかりとんでもない大ごとを引き起こしてしまったのではないか、との疑いもぬぐいきれない。たとえば、何かの拍子に深い考えもなく、無邪気に「信長を倒せばあんた、天下人やで」などと光秀をそそのかしたとか。

まったく悩ましい。

洋の東西、過去現在を問わず、こういうお騒がせな人物は存在するものである。

カタリナ・おかつの受難

一

カタリナ・おかつどの、さような考えはいますぐに捨てなされ。

おお、おそろしいことや。

いくら苦難に遭うたからといって、万物の造物主たるデウスさまを疑うなど、あってはならぬことぞ。そうしたときこそ、信心が試されるのやで。

たしかに、安土におられた仲間は苦しんだことやろな。

さようにやせ衰え、唇の色も褪せて、小袖も破れてしもうたとは、さぞつらい目にも遭うたのやろ。

安土からみなが逃げ出したのは、聞いておるわいな。バテレンさまと仲のよかった織田の上様が討たれ、坊主たちの味方、悪魔の手先の明智光秀が安土城を乗っ取ったのでは、やっと建てたカーザス（修道院）も取りあげられ、それどころか命さえ狙われかねぬ。そやさかいパードレ（司祭）さまは、みなの命を救うために逃げ出したのやろ。

われら都のキリシタンも、心配しておったのやで。都で上様が討たれたとあっては、京、安土、それに岐阜にも、いずれ悪魔の手先が攻め寄せるであろ。キリシタンたちは槍をもって追われ、せっかく築いた南蛮寺もセミナリオ（神学校）も奪われ、焼かれてしまうのではとな。

のう、心配はしても、神でもないわれらにできることといえば、祈ることのみよ。みなが無

事でおるようにと、一心にデウスさま、マリアさまに祈っておった。

それはそれは熱心に祈ったのや。そして祈りは聞き届けられたでぇ。やはりデウスさまは、われらを見捨てておかれなんだ。その証しには、安土のみなはこうして無事に都に着いたやないか。それだけでも、ありがたいことぞ。

えい、まだ人心地がつかぬと見えるの。なにやら目があなたこなたに泳いでおるぞ。

安土を抜け出てからの苦難は、もう思い出したくもない、そう申すのかえ。

ずいぶんとひどい目に遭うたのやな。かわいそうに。

そやけどな、苦難に遭うたのはなにも安土の仲間ばかりやないのやで。

都でも、そりゃあもう大騒ぎをしておった。

なにしろ早朝から何千という兵が押しかけてきて、本能寺を囲んで弓矢鉄砲の騒ぎや。あげくに火をかけよった。わたいの住まいからも、本能寺からのぼる太い煙が幾本も見えたで。

われらの南蛮寺からは、火も見えたそうな。あたりまえやな。あの本能寺と姥柳町の南蛮寺は、わずか一町しか離れておらん。

あの朝はパードレのカリヨンさまが、早朝のミサの支度をしておったそうな。

何人かのキリシタンも手伝いに来ておって、もちろん本能寺の騒ぎも目にしておったのやけど、当初はさして大ごととは思わず、いつもあるささいな喧嘩騒動くらいに思っておったそうな。

やがて、場所が場所だけに大きな揉めごとかもしれぬと言いだす者がいて、ミサの支度をし

つつようすを見ておった。するとしばらくして鉄砲の音が響きはじめ、明智の謀叛やとわかったのや。

そうやな、ほんの一刻（二時間）ほどやったかな、騒ぎがつづいたのは。

本能寺が焼けて、つづいて二条の御所まで焼けてしもうた。

織田の上様と岐阜殿が打ち負けて、建物もろとも灰になったとは、すぐ都じゅうに知れ渡ったのやけど、それからが大変やった。なにしろ明智はキリシタンを嫌っておったでの、都を明智が支配するようになれば、教会もわれらもただではすまぬとみなが思ったのや。

わたいも、家のことをおいて教会にかけつけたわいな。

そのあいだは、恐かったな。明智の軍勢は勝ち誇って、織田の残党をさがして京のおもだった家々をたずね回ったのでな。通りにも路地にも、甲冑をつけた兵が走り回っておったぞ。

教会にも来るのではないかと、パードレどのもイルマン（修道士）どのも、みなはらはらしておったが、デウスさまのお取りはからいか、兵が教会に来る前に、明智が軍勢の乱妨狼藉を禁ずる布告を都じゅうに出したので、教会は守られたのや。おお、ありがたいデウスさまの導きよのう。

なに、それはデウスさまの導きでのうて、ただ明智が京衆を敵に回したくないと思って下知しただけではないかと？

そなた、考え方がまちがっておるで。

万物を創造されたデウスさまが、この世のことはすべてお取りはからいになっておる。それ

ゆえわれらは、すべてをデウスさまにおまかせし、ただ祈るだけでよいのじゃ。その摂理は、そなたも説教を聞いて納得したのではなかったのか。

そなたがひどい目に遭うのは、デウスさまが信仰をためされておるためや。ここでデウスさまの教えを捨てるようなことがあれば、地獄へ堕ちて二度と浮かび上がれぬぞえ。

まあよい。だれでも信心が揺らぐことはある。そうした迷えるわれらも、デウスさまは温かく見守っておられるのや。

しばらく休んだら、どないや。身体の疲れがとれれば、心の迷いも消えように。

口をきくのも億劫と見えるの。さほどに安土では大変であったか。

では、しばらくわたいが話をしようかの。

なぜわたいが信仰の道に入ったか。どのように救われたかを話して進ぜよう。そなたの信心にとっても無駄ではあるまいに。

おお、さよか。聞きたいか。よしよし。すべて正直に話そうに。そのかわり、あとでそなたも話してたもれ。

さて、どこから話そうかの。

わたいは洗礼をうけてマグダレア・おきちというありがたい教名を頂戴しておるが、もともと京の生まれでの、実家は、大きな声では言えぬが公家のはしくれで、周囲からは外記どの、外記どのと言われる家であったぞ。

しかし十五歳で嫁いだ先は、公家ではのうて商家やった。もはや公家では食っていけぬと親

が見切りをつけてな、裕福な酒屋に縁を見つけてくれたのや。
だがな、世の中、先を読んだつもりでも、歩けば足許の石につまずくというのがお決まりでな。

わたいの夫はやり手での、商売は盛んで明日のまんまに困るということはなかったが、商売に聡い男というのは、例外なく女にも手が早いものでな。嫁いで三年目には、もう他の女を囲っておった。

それが知れたとき、わたいはどうしていいのかわからんかった。泣けばいいのか、怒ればいいのか、それとも暇をもらって去るべきか。

結局はなにもせず、ただじっとこらえておった。世間でもよくあることや。側女をつくるのも男の甲斐性やさかい、だれも悪口も言わんし、止めもせん。つくられる妻の気持ちなど、だれも考えん。

そなたもよう知っておろうが、キリシタンにあってはとても考えられぬことぞ。信徒の十の戒めで、デウスさまは姦淫を禁じておられる。他人を犯すなかれと。夫のしたことなど、まさに姦淫を犯しておるのや。許されるはずもない。わが夫はパードレさまの前に出てあやまちを認め、懺悔せんと地獄行きになるのや。しかしそのころはまだ、わたいもデウスさまの教えを知らずにおったさかい、どうしようものうてなあ。

商売のほうはますます繁盛して、屋敷も大きくなった。三条烏丸に間口五間の家があったが、嵯峨に別宅を建ててな、側女を住まわせるばかりか銭貸しもしておったが、そちらもよう

儲かった。夫はおのれが地獄へ行くなど、とんと頭の中になかったようや。

わたいは公家の出やさかい、商売のことなど、なにも知らん。屋敷にいて、下女を指図しながら飯の支度などして日々を送っておった。

ところが側女は商人の娘でな、商売のこともいくらか知っておって、銭勘定もうまい。それで嵯峨の店にもしゃしゃり出てな、まるで本妻のように振る舞いはじめたのや。

わたいは、これにも我慢しておった。そないなことはようせんし、世間は本妻と側女を見まちがうはずはないと思うてな。

したが、これがどうや。側女のやつ、だんだんと増長しおっての、本家の店にまで顔を出すようになりよった。当然、わたいと顔を合わせるが、最初はしおらしい挨拶をしよったのに、そのうちに顔を合わせても何も言わぬようになり、しまいには目も合わせぬようになった。まあ腹の立つこと。

そのころわたいは二十歳をいくつか過ぎておったが、血の道かのう、身体の具合が悪うなってきた。顔は火照り、走ったわけでもないのに心ノ臓は早く打ち、夜も眠れなくなった。これは大変と、医師にかかったがな、いくら薬を飲んでも効かん。

わが家は念仏宗やった。そなたは武家の娘やさかい、禅のほうかや。

ああ、やはりな。

禅寺の、悟りを開いたという坊主に帰依しておったのやな。禅の教えを聞くのは、それはそれできついことらしいの。

わたいは念仏宗よ。ひたすら阿弥陀さまにおすがりして極楽往生するのが、念仏の徒の願いでな、わたいも子供のころは、父母にならってよく念仏を唱えておったものよ。
身体が悪うなって、薬も効かぬ。これは信心が足らぬゆえ、仏の罰があたったと思うてな、ああ、いま思えばとんだ間違いであったが、そのころはまだありがたいデウスさまの教えを知らなかったさかい、仕方なかったわいの。
そこで寺参りをはじめてのう。
坊主のお説教を聞き、すすめられるままに念仏を一日に千回も唱えたものや。ああ、千回唱えれば極楽往生まちがいなし、家内も安全、暮らしも健やかになると言われてな。
一日に千回唱えるにはな、朝から晩まで、それこそ飯と飯のあいだじゅう、暇なく唱えなければならんぞえ。わたいは家の奥に籠もって念仏を唱えつづけたわ。
だがいくら念仏を唱えたとて、身体も治らず側女のずうずうしさも変わらぬ。ほとほと疲れ果てたわ。
デウスさまの教えに出会ったのは、そんなころでの。さあて、もう二十年も前になるやろか。都には織田の上様など姿ものうて、松永どのやら三好どのやらが町を治めておったの。
都に南蛮人が来たとはうわさで知っておったが、珍しい服を着て、珍しい貢ぎ物を殿ばらに捧げるだけの、わたいには関わりないお人と思うておった。
ところが家の下女が説教を聞いてキリシタンになっての、それから教会で聞いた説教をわたいに教えてくれるようになったのや。

最初に万物を創造されたもうたデウスさまの話を聞いたときは、なにやら怪しげな、と思うたにすぎんかった。
デウスさまとはつまり、阿弥陀さまのことではないかと思うたのや。衆生を救いたもうためにあの世にいて、みなの願いを聞き届けてくれるなら、阿弥陀さまとおなじやないかと。いまでも洗礼を受けておらん人はよく間違えるけど、わたいもおなじやったのや。
つぎに聞いた話は、欲深い有徳人についての福音やった。貧しい人を救う機会がいくらでもあったのに、善行を施さなかったゆえに地獄へ落とされた有徳人の話や。そなたも聞いたやろ。
これには少し心が動いてな。
わたいの婚家も豊かでな、有徳人にかぞえられたやろ、そやさかい、地獄に堕ちるのはいやなと思うたのや。
それでもまだ、デウスさまの教えを信じる気にはなれなんだ。疑っておったのやな。人はだれでも新しいものには用心するさかい、わたいも子供のころから慣れ親しんだ教えを捨ててまで、新しい教えに従う気にはなれなんだのや。
ところがある日、下女にさそわれて教会へ行ってみたのや。ああ、そのころは教会といってもごくふつうの家やった。いや、ふつうどころか、粗末なあばら家といったほうがええようなところでな、二間四方の土間と同じ広さの板の間があるだけ、しかも壁は穴だらけで、通りから中にパードレさまがいなさるのが見えたものや。

下京は六角通り沿いの玉蔵町にあったのやが、物見高い京雀が群がっておってな、面白半分にパードレさまの説教を聞いておった。
家事をすませて出たので、昼下がりであったか。こわごわのぞいてみると、正面の壁に白い布がかかっておって、そこに赤い十字架が立っておった。
あとで知ったのやが、パードレさまはせまく汚い家を少しでも教会らしくしようとして、敷布団を壁に掛け、紙に描いた十字架を張り付けておったそうな。
そして板の間の中央にパードレさまがすわり、前の文机の上には祈禱書をおいて説教しておった。マントをはおり、赤い角帽をかぶったパードレさまが、なんとも頼もしく見えたことぞ。
左右には日本人の信徒がすわって、目をあたりに配っておった。うちひとりはロレンソさまやったかな。
群衆は取り巻いて眺めておるだけやったが、説教が終わると中からふたりの坊主が出てきてな、宗論を挑んだのや。
坊主の宗旨はさて、何やったかな。なにしろ二十年前のことやさかい、定かに憶えておらんのやが、禅坊主ではあらなんだ。法華宗かお念仏の徒ではなかったかな。
ふたりとも三十路であったろうか。頬が赤くつややかでな、いかにも精気に満ちた坊主どもであったぞ。
「御身の話は聴聞した。いくつか疑念の点があるによって、お答えを願いたい」

そんなことを言ってパードレさまに迫っていったわ。どんな問いやったと思う?
「御身がひろめにこられたデウスなるものは、人が見、目で認めることができるものであろうか」
いまではデウスさまの教えも広まっておって、だれもさような問いはせんわな。そやけどあのころはキリシタンも珍しかったさかい、さかんに問われたのや。パードレさまはにっこりとうなずいたな。
「その問いにお答えする前に、まずお坊さまはそれについてどうお考えかうかがいたい。形ある物と精神ある物とのちがいはいかに」
と問い返したのは、相手の程度をためすためやった。どこまでわかっているのか、その程度によって答えも変えねばならんでのう。
「ちがいとは言葉の上だけで、そのふたつは実際はひとつのものじゃ」
そう言わせればしめたものや。パードレさまは、有形的実体と精神的実体の相違と、デウスが四元素の結合からなる肉体的存在とすれば不合理が生ずることを説明したのや。
いまのわれらには自明のことやが、そのときは初めて聞く鮮やかな理屈の筋立てに息をのんだものでな。
これを聞いた坊主たちの顔は見ものやったぞ。青ざめてな、目を見開いて口をぱくぱくさせ、言い負かされた悔しさがわたいにも見てとれたわ。
思えば、わたいがキリシタンになろうと思うた初めは、このときやな。

それでもまだ迷いがあって、踏ん切りがつかなんだ。あのころキリシタンになるというのは、とんでもない別世界に飛び込むようなものでな、それはそれは大きな決心がいったのよ。いまはそうでもなさそうやけどな。

それでつぎの日も教会へ行ったのよ。心がはやってな、家事もそこそこに、朝のうちに出かけたのや。

あばら屋の中でやはり説教があったあと、今度は坊主が十人ほどもあらわれたわ。見れば先頭に立つのは、昨日やり込められた坊主よ。仲間を連れて仕返しに来たのやな。

坊主たちは問いを発するような形にして、その実、キリシタンたちの悪口を言い立てておった。わたいが聞いておっても、答えようのない問いばかりやったな。

このときの対応が見事やった。ちょうどパードレさまがおられず、ロレンソさま、さよう、そなたもようご存じのロレンソ了斎さまが相手をしたのやが、まずは悪口ばかりを言い立てる坊主たちに言いたいだけ言わせておいて、逆に問いを発したのや。

「御身たちがさように言われるなら、釈迦の教えにある『草木国土悉皆成仏』、つまりこの世に存在する万物はすべてすくわれて仏になる、と述べている点について教えていただきたい。なぜ理性をもたず、徳行も悪行もなし得ないものが、来世で栄光に浴する、すなわち仏になれるのか。来世での栄光や劫罰は、この世での徳行や悪行に対してなされるものではないのか」

とな。

坊主たちは、まさかキリシタンたちが仏教を知っているとは思いもよらなかったようでな、

おどろいて顔を見合わせるばかりで、だれも答えられなかったの。結局は黙り込んだまま、立ち去っていったわ。

これを見て、わたいの心はますます動いたぞ。念仏を千回唱えてもまるで効き目がなかったんは、そもそも教えがまちがっておったからと気づいたのや。

わたいはそれから毎日教会に通った。そしてデウスの教えが厳しい戒律をもっておって、パードレさまたちが妻も持たず、高潔な暮らしをしておると知って、初めて洗礼を受ける決心をしたのや。

それから二十年にもなるさかい、もちろんわたいの身にもいろいろあったぞ。

まず洗礼を受けたと知った夫からは、離縁されたな。得体の知れぬ神を信ずる者とは、一緒に暮らせんと言うてな。ああ、どうせ姦淫をしてはならぬという戒律を守れぬ男や。惜しくはないわい。さっさと離縁状をもらって家を出たわ。

実家からも縁を切られた。さような外法を信ずる者は家に入れぬと言われてな。外法よ外法。あのころのデウスさまの教えはそんな言われ方をしたのよ。いまでもないではないがな。

婚家にも実家にも入れず、わたいは一時、路頭に迷うことになった。

さよう、デウスさまはわたいに試練を与えられたのや。信仰を貫けるか否か。貫いて天国へ行くか、それとも挫折して地獄に堕ちるか。

わたいはもちろん貫いた。

幸いなるかな、デウスさまはお見捨てにならなんだ。数日は教会のお世話になったが、その

うちにある商家に紹介されてな。そう。わたいに教会を教えてくれた下女が、下女仲間に頼んで見つけてくれたのや。

いまもそこに奉公しておる。朝は水汲みからはじまって、拭き掃除をして朝餉を作り、昼は繕い物などして、夕には夕餉をととのえる。日曜にはミサに出てありがたいお説教を聞き、一日の休息をとる。

ああ、下女の暮らしや。まことに心安らかに暮らしておるぞ。これもキリシタンになったおかげでな、あのまま商家の妻でおったら、数年ももたずに狂い死にしていたであろ。いや、わたいは救われたのや。

そのようにありがたい教えを捨てるなど、わたいには考えもつかん。これカタリナ・おかつどの、考え直すならいまぞ。

マグダレア・おきちさま、お話ありがとう存じまする。

さようにくわしく身の上と、洗礼を受けられたいきさつをお話しいただいた上は、わたくしの身に起こったことと、なぜデウスの教えを捨てようとしたのかを、お話しせずには済まされますまい。

ええ、いまや教えを捨てるのに迷いもござりませぬが、話をせねば納得もしていただけないでしょう。

さて、何からお話ししましょうか。

まずは出自をと。はあ、とりたてて差し障りもありませぬゆえ、そこから話をはじめましょうか。

わたくしは尾張は中島郡の生まれにござりまする。

家は代々その地の侍で、織田家に仕えておりました。といってもふだんは下人を使って田畑を耕し、陣触れがあると父は下人ひとりに槍をもたせ、自分は馬にまたがって出て行く一騎駆けの侍でしたが。

十五の年にとなり村の地侍に嫁ぎました。ふたつ年上の夫はやさしくて、子もできて仲よう暮らしておりましたが、嫁いで四年目の秋に合戦に出たところ、足と腕に矢疵を負ってしまい、下人にかつがれてもどってきましての。

当初は「なんのこれしきの怪我」と気丈に振る舞っておりましたが、足の傷が膿んでしまい、熱が引かなくなって、薬も効かずに十日ほどで亡くなりました。

ええ、侍とははかないもので。いくら強がったとて矢弾にはかないませぬ。

わたくしは泣いて過ごしましたが、泣きの涙も乾かぬうちに、義父母のすすめがあって、幼い子を婚家において実家にもどりました。そして一年ほどして、今度は少しはなれた津島の夫のもとへ嫁入りいたしました。

二度目の夫は織田の上様の馬廻り衆で、十七も年上で、熊のように総身に毛の生えた大男でした。一見して卒倒するほどこわかったのですが、父がすすめるのでは拒めませぬ。

けれどこの夫は、見かけとちがってやさしかった上、いくさ場でよう働いたのか、はたまた上様の御運が上り調子で、合戦に勝ちつづけたゆえか、だんだんと所領がふえ、暮らしが豊かになってゆきました。

お屋敷も、津島の在所から小牧の城下へ、そして岐阜へと、上様のお城が移るにしたがって引っ越しましたが、移るたびに広い大きな屋敷に住むようになりました。

このころの上様は、先月に京からもどられたと思えば、今月は越前へ、つぎの月は伊勢へとあちこちに合戦に出るようになり、それはもう陣触れが多くて。

夫は家を空けることが多くなって、わたくしは生まれた子の面倒をみながら心細く暮らしておりました。

しかしながら、思えばあのころが一番幸せでございましたな。岐阜の町はにぎやかで、しかも敵から攻められる恐れもありませなんだ。屋敷には夫はいなくとも、下男下女がいて暮らしには不自由せず、また実家も岐阜に移っていましたゆえ、ときには茶飲み話をしに寄ったりして、寂しさをまぎらわすこともできましたし。

兄が継いだ実家のほうも、たくさんいる子供たちが織田家中のさまざまな侍大将に仕えて、それぞれ武功をあげ、末頼もしいことでございました。

それから安土にまいりました。ええ、上様の城ができたと同時に、岐阜から移るようにとお下知がありましてな。

ご自身は安土に移っても、家族まで岐阜から呼びよせるのはなかなか大変なことで、ずいぶ

ん遅くまで岐阜に家族をおいてお叱りをうけた者もいましたが、夫はさっさと引っ越しをすませてしまいました。

夫はだんだんと出世して、家来もふえていきましての、わたくしも奥方と言われるようになりました。

いえ、めっそうもない。奥方とは名ばかり、まるで下女頭のようで、家中の切り盛りには苦労しましたぞ。

家来というても、早ければ十二、三の子供が奉公じゃというて入ってきますからの、飯の支度から着るものまで、わたくしが世話を焼かなければなりませなんだ。ええ、台所で下男らとならべて飯を食べさせて。実の子が五人も十人もいるようで、目のまわるような忙しさとはこのことかと思うたこともございました。

さて、安土へ移って二年もしたころでしたかの、夫がデウスの教えを聞いてきたのは。

熊のような大男ではあったものの、それでも死ぬのはこわいと見えましてな、夫は禅のえらいお坊さんに帰依して、ときにお寺にまいり、座禅など組んでおりました。ええ、幾たびも合戦に出ておりましたので、大怪我こそしなかったものの、小さな手疵はしょっちゅう負って帰ってきてましてな、いつかは死ぬほどの怪我をすると思っておったのでしょう。

禅で悟りを得ると死もこわくなくなるとか。夫はその境地をめざして座禅を組んでおったようです。

禅寺は庭がうつくしいので、わたくしも時にお参りしては、お坊さんの説教を聞いておりま

した。それゆえ、いくらかは禅の教えを知っておりました。父母未生以前の自己の面目やら、不思善不思悪やら、むずかしゅうござりましたが、聞きかじりでなんとのうわかったような気になっておりました。

　そんな夫がある日、デウスの教えを聞いて感心しましてな。

「この天地はデウスなる大きな神が造られたもうたもので、人もデウスによって造られ、運命も決められるというぞ。ならばデウスの神に帰依して、その恵みにあずかるが得というものよ」

　といって、洗礼を受けると言いだしました。

　夫は、武勇だけの男ではありませぬ。字も書け、四書五経も読んでおりました。禅のお坊さまとも公案の話をしていたほどで、知恵もある男です。それがパードレどのと話をして、いっぺんに惚れ込んだのですから、デウスの教えはずいぶんと理屈の通った教えなのだなと思ったものです。

　わたくしは最初、止めました。

　それまでまったく聞いたことのない神がなにやら怪しげだったのと、キリシタンになるなど、先祖からの宗旨を捨てるのかと周囲からもあれこれ言われましたので。

　はあ。たしかに上様はキリシタンに寛容で、パードレのフロイスさまなどにずいぶんとやさしく接しておられたとか。

　でも、それは南蛮の文物がめずらしくて、上様の好みに合ったのと、鉄砲に使う焔硝や鉄

砲玉にする鉛を、南蛮船から手に入れるためではなかったでしょうか。上様ご自身がデウスの教えを信じていたかどうかは、また別のお話で。

　わたくしは、上様は禅の坊主のように、死んでしまえば魂はなくなり、来世などもないと信じていたと聞いておりまする。

　それでも上様は、法華宗や念仏宗よりはデウスの教えがお好きなようで、デウスの教えをすすめはしませなんだが、馬廻り衆が信じるのを禁じはしませんでした。そんな上様の下で、夫はデウスの教えを信じるようになりました。よほど死と、死後に地獄へ堕ちるのがこわかったのでしょう。

　そして自分だけでなく、家来や家族にもデウスを信じるよう、強いてきました。

　わたくしも最初はいやだったのですが、ほかの仏さまの教えがすべて間違いで、ただデウスを信じる者だけがハライソ（天国）へ行けると聞いて、ずいぶんとお得な教えだなと、ああ、お笑いくださるな。

　正直なところ、夫との仲もよく、子供もすくすくと育ち、これといった悩みもなかったので、それほど信心する気にもならなかったのです。どの宗旨でもそうですが、暮らしに満ち足りている人は、さほどよい信者にはならぬのではありませぬか。

　それでも夫には逆らえませぬ。家来たちといっしょに半年ほどパードレさまの説教を聞きに通い、ひととおり聞き終わったところで洗礼を受けました。説教は、みな腑に落ちました。とくに、

「この世にはわれら人間をはじめとして、非常に精巧に造られたものが多い。まずはじめに至高なる存在があって、その存在が造物主となってこの世の精巧なものを造られたと考えなければ、この状況は到底説明できない。ゆえに造物主はどこかにおわすのである」

という教えには、なるほどその通りだと納得もいたしました。

夫が熱心なキリシタンとなったことで、わが家は安土でも有名になってしまいました。そのころはまだキリシタンが少なかったのです。

また夫はしょっちゅうカーザスやセミナリオに出入りしたので、わたくしも何かと出かけることが多くなりました。

ああ、ご存じでしょうが、安土のカーザスにも京とおなじような三階建ての建物がありました。お城のある山のふもとに広大な敷地を占め、三方を石垣に囲まれて、まるで城塞のようでした。一階が信者たちが集まる広間で、茶の湯ができる座敷もありました。二階がパードレたちの居室、そして三階にセミナリオをもうけ、子供たちが学んでいました。お城をのぞけば三階建ての建物などはなかったので、城下でもひどく目立ったものです。

これをみな信者たちの寄付で維持するのですから、わが家もずいぶんと寄付し、台所が苦しくなったほどでした。

思えばあのころから、わが家の運が傾いたような。

なんと罰当たりなと仰せですか。デウスさまを信じるようになって運が傾くなど、あるはずもないとの仰せでしょうか。

しかし、そうは申せませぬ。わが家中だけ見ても、矢弾にあたって手疵を負ったり討死(うちじに)する者は、キリシタンとなった者、ならなかった者の別なく出ておりますし、キリシタンになったから手柄を立てたと言えるような者もおりませぬから。それにわが夫も……。

ああ、さようなことで言い争うのはやめましょう。どう転んでも決まりの着かぬ話でしょうから。

さて、そろそろわたくしがデウスの教えを捨てようとしたきっかけをお話しせねばなりませぬ。

あれは六月三日のことでしたか。

ええ、本能寺のことは、その前の日、二日の昼すぎには耳にはいっておりました。というより、二日のうちに安土の町は大騒ぎになっておりました。明智の軍勢が攻め寄せてきて、城下に火を放つにちがいないと、だれもが思ったからです。

明智の軍勢が本能寺を焼き、こちらに向かって進発したことは、伝わっていましたし、城を攻めるとなれば城下の町を焼くのはごくふつうですから、われらの家が焼かれるのは疑う余地もありませんでした。

いや、あの日のみなの慌てぶりといったら、もう話にもならぬほどで。

家財を車に乗せ、牛に引かせて東へ向かう者、大荷物を背負って妻子の手を引き、北の追分(おいわけ)へ向かう者などは、まだ冷静なほうでした。多くの人々は着の身着のまま、家財をほうりだして身ひとつで逃げ出しました。なにしろ京から安土までは一日で行き着けまするゆえ、早ければ

ば二日の夕方にも、明智の軍勢があらわれると思われておりましたので。
中には自分の屋敷に火をかけて退去したお侍もいましたな。あれはもう、明智に味方すると大っぴらに広めているようなものでした。
瀬田（せた）の橋が焼き落とされ、明智の軍勢も数日は渡れぬとわかったのは、あの日の夜でしたろうか。それであの晩は安土で過ごすことができました。
夫と子は上様について都にのぼっておりました。そのためわたくしはその日、町が混乱する中でも、屋敷を去りませんでした。上様と同時に多くの馬廻り衆が死んだと聞いて、夫と子供の身が心配で、安土を去れなかったのです。
翌日、カーザスに出かけて行きました。ええ、信心というか、カーザスで懸命に祈れば夫や子の命が助かるかも、という気持ちもありました。
カーザスでも、大騒ぎになっておりました。
明智はデウスの教えを信ぜず、それどころかキリシタンに悪意さえもっているのがわかっていましたから、安土に来たなら容赦なくカーザスを焼き払うにちがいないと、キリシタンたちはみな思っていました。
しかし、カーザスに人は少なかったです。
いつも広い敷地に出入りする人が絶えず、朝には数十人から百人ほども見かけるのに、その日はセミナリオの子供たちを合わせても三十人ほどでした。キリシタンたちも、逃げたようでした。みないざとなるとわが身がかわいいのでしょう。

わたくしが着いたときには、湖の船頭がパードレさまに向かって、沖の島へ逃げるよう、さかんに言いつのっているところでした。
さようです。キリシタンが明智の手から逃れるには、湖の中にある沖の島が最善だと言うのです。
そのときは、なるほどと思いました。明智の軍勢も、沖の島まで追いかけてくるほど暇ではないだろうし、沖の島からは羽柴（はしば）どのの城がある長浜や、京に近い大津の湊へ逃げることもできる。ひとまず身を隠すには絶好のところと映ったのです。
その船頭はキリシタンでなかったので、少々ひっかかりは感じていましたが、あまり熱心にすすめるので、パードレさまも決心をつけたようでした。カーザスは大きな建物で、貴重な家財や銀など、置き去りにするには惜しいものもたくさん置いてあります。多くのものが積める船で移動できるのも魅力だったのです。
カーザスに居残る者を決めると、残りのキリシタンたちはそれぞれ持てるだけの家財のほか、銀の燭台（しょくだい）や振り香炉、聖杯、濃紅色のビロードの衣服など貴重な品をもって湊へと走りました。キリシタンたち、というよりカーザスに住む南蛮人たちは豊かです。銀を豊富にもっており、それを衣の下に隠して急ぎました。
わたくしも銀の延べ棒をもたされて湊へ走りました。
町は多くの人が逃げ去ったあとで、乱妨をしても止める者がいないため、物盗りが横行していました。数人がかたまって、金目の物をもつ人を襲い、強奪するのです。

湊へ走ったキリシタンも何人か恐ろしい目に遭いました。最後にカーザスを出たジョアン・フランシスコさまも、追い剝ぎにあって身ぐるみ剝がれました。

わたくしの胸の内にデウスの教えに対する疑いが生じたのは、このあたりからです。万物を創造し、この世の審判をするデウスならば、どうしてデウスの使徒たるパードレさまを、こんな理不尽な目に遭わせるのでしょうか。

教えを広めたいなら、まったく無駄なことです。パードレさまも、ご自身がデウスの使いであり、人々が天国へ行くか地獄へ行くかを左右する権限があるなら——デウスの使徒というのなら、当然に手を貸しているのでしょう——、かように逃げまどうなど、あり得ないことでしょう。たとえ「世の中には悪魔がいて、デウスのご意志を邪魔している」と聞かされても、疑問は消えません。

とにかく湊に着いて、船に乗りました。

城山の横にある水路を通り抜けて船が沖へ出たときには、これで追われずにすむという安堵の思いで、みな喜び合ったものです。

ところが島に着く前に様子がおかしくなりました。船頭はもちろん、水夫たちが刀に手をかけ、われわれを取り囲んだのです。

パードレと船頭とのあいだで交わされる話を聞いていると、どうやら船賃で揉めているようでした。

パードレたちは沖の島まで行くのにせいぜい全員合わせて一、二貫文の支払いで済むと思っ

ていたのに、船頭はいまは火急の時であって、だれもが船を欲しがっている、その貴重な船を提供したのだから船賃も当然高くなると主張し、ひとりあたり三貫文を払えと言うのです。

かぞえてみるとわれらは二十八人いましたから、八十四貫文です。法外に高いと言わざるを得ませんが、船頭の言い分にも一理あります。たしかに安土は混乱しており、身の危険が迫っていました。そこからやすやすと逃げ出せる船は貴重な乗り物であり、高い雇い賃を払っても乗ろうとする人はいたのです。

船頭は、キリシタンは金持ちだと知っているので、主張を曲げません。事実、それだけ払ってもあまるだけの銀を、パードレたちは持っていたのです。

しかしパードレたちも憤然として支払いを拒みました。不当な要求に屈するわけにはいかないと思ったのでしょう。

それでわれらは沖の島に着いても自由にしてもらえず、船頭と水夫たちに捕らわれて、船頭屋敷の中にある馬小屋に押し込まれました。船賃を払うまでは自由にしないと言うのです。槍と弓をもった見張りがついているので、逃げられません。

船頭はわれらを殺して家財も銀の燭台も聖杯もみな奪おうとしていると言う者がいて、わたくしは震えあがってしまいました。安土の町の混乱を見たあとでは、そんな話もあり得ぬことではないと思われたのです。

われらは祈りました。デウスさまに、マリアさまに、船頭らに殺されぬよう、祈りを捧げました。

一方でパードレたちは、抜け目のない手だても使いました。ひとりの若者に、持ち込んだ大量の銀の延べ棒と、銀の燭台などの貴重品を託し、夜になってから馬小屋を抜け出し、近くの山中に隠すよう命じたのです。

見つかれば容赦なく殺される危険な仕事でしたが、その若者はなんとかやり遂げ、手許から貴重品をなくすことができました。

また別に、助けを呼ぶ手だても講じました。

この際ですから、だれか有力な者にすがるしかありません。仲間内で話し合った結果、なんとわたくしが、明智家に仕えている実家の甥に、助けを求める手紙を書くことになりました。なにしろ織田家が滅びたあとで、有力者といえば明智家中の者しかいませんでしたから。ええ、実家の兄の四男坊が、数年前から明智家で小姓（こしょう）をしていたのです。

パードレたちも、船頭たちに殺されるか否かという場合ですから、もはや明智を悪魔だとは言わなくなっていました。

この手紙は、また別の若者が馬小屋を抜け出して、坂本にいるはずの甥まで届けることになりました。あの夜にはうまくいったかどうかわかりませんでしたが、結果としては若者は小舟を盗み出して坂本まで漕ぎつき、首尾よく甥に届けることができました。

翌日、船頭たちはわれらの持ち込んだ家財や服の中まで調べ上げました。しかし銀などは山に隠したあとですから、めぼしいものは残っていません。あての外れた船頭たちは、われらをどうするか、相談しているようでした。

囚われの身となってからは、ごくわずかな粥（かゆ）と白湯（さゆ）しか口にしていませんでしたし、暑さの中で馬小屋に押し込まれて寝ることもできなかったので、みな疲れ果てていました。祈りの声もほとんど聞こえません。逃げることもかなわず、もうここで死ぬのだと思いました。

助けの船が来たのは、翌日でした。わたくしの書いた手紙が、甥に届いたのです。甥は安土のカーザスに残っていたキリシタンたちと相談し、船を仕立てて助けに来てくれました。

船には兵も乗っていましたし、明智家中の者という名乗りもきいて、かなわぬと思ったのか船頭たちは抵抗せず、われらを解きはなちました。それでも相当な銀を船賃として支払ったと聞いています。

われらは甥の仕立てた船に乗り、明智の城のある坂本へ漕ぎ着けました。そして甥——明智家の小姓——の家に入り、休むことを許されました。やっと危機から脱したのです。

もちろん、キリシタンだからといって、明智家中の者に襲われたりもしませんなんだ。明智家は数十人のキリシタンに関わっているほど暇でもなかったし、盗賊の真似をするほど統制が乱れてもいなかったということでしょう。

結局、われらは恐れていた明智家に助けられたのです。明智が悪魔だとは、わけのわからぬ思い込みにすぎず、大きな間違いだったのです。

しかもパードレたちはこのあと、命の恩人である明智の家中の者をも裏切りました。

わたくしの甥の同僚が、キリシタンとして有名な大名、高山右近（たかやまうこん）を説得する使者として出立するにあたり、パードレからも高山右近あてに一筆書いてほしいと頼み込んできたのです。パ

ードレは快諾しておきながら、日本語では明智に味方するように書き、南蛮の言葉では反対に、絶対に味方するなと書いたのです。

ひどい仕打ちではありませんか。

受けた恩義を仇(あだ)で返すとは、このことでしょう。

詰まるところ、パードレたちにとってデウスの教えを信じぬ者はみな敵であり、その者から受けた恩義に報いるなど、考えもできないようなのです。おのれのみを高みにおき、他の者をみな見下しているのです。あまりに一方的で、人の世を貫く義や徳に欠ける考えではないでしょうか。

もうおわかりでしょう。わたくしがデウスの教えに愛想をつかしたわけが。

一事が万事と申します。こんな不徳なパードレたちが、万物の創造主であり世のすべてを司(つかさど)るデウスの使徒であるなら、その主であるデウスは、よほど迂闊(うかつ)で人を見る目のない創造主にちがいないと思ったのです。そんなデウスに人々を見分け、善人だけを天国へ行かせる力などあるのでしょうか。

あるいは、そのデウスなるものも、明智が悪魔だという思い込み同様、パードレたちのおかしな思い込みに過ぎないのではないかとも思いました。

その上、京に着いてから、わたくしの夫と子供が二条御所で討死したとわかりました。あれだけ深くデウスを信仰しても、なにもいいことがなかったのです。天国へ召されたと？　そんなこと、誰にもわかりませぬ。

これでわたくしは目が醒(さ)めました。デウスを信じようが信じまいが、自分の運も世の中も何も変わらないのだと。

苦難に遭ったときこそ、人は本性をあらわすと申します。わたくしも自分の本性に立ち帰ることにいたします。

夫と子供をなくしたわたくしには、もはや安土にも都にも住み処はありませぬが、もとよりデウスの教えにも安土にも、何の未練もありませぬ。わたくしはただ悲しみを胸に抱いて生まれ在所に帰り、侍の家に生まれた娘として一からやり直すだけです。

マグダレア・おきちどの、わたくしの話はこれまでです。

お止めくださいますな。そしてそなたさまも、よく考えたほうがよいのではありませぬか。デウスの教えを信じてから、いったい自分の身に何が起こったか。本当によいことばかり起こったのでしょうか。デウスを信じないと、なにか困ることでもあるのでしょうか。

よくよくお考えあれ。

もうお会いすることもござりますまいが、つつがのうお過ごしくだされ。

主のご加護をとは、申しませぬ。

仏の御慈悲も願いませぬ。

ただ、ご自分のお頭(つむり)で、よくお考えあれと申すのみです。

北方城の悲惨な戦い

一

「でかしたぞ、光秀！」
大声で叫んだ安藤道足の皺だらけの顔には、赤みがさしている。
「ようもようも、しでかしたものじゃ。かような快事は近ごろ聞いたこともないわ」
「まことに祝着至極。かほどの吉報に接したのは、それがしも憶えがござらぬ」
と、道足のとなりで笑みをうかべているのは松田鷹助。安藤家の家老だった男である。
「いやあ、天道おそろしきかな。天はすべてお見通しよ。はは、増長して天罰をくらったな、信長めが」
楽しそうに言う道足の口もとには、唾が白い泡となって溜まり、濡れたように輝く目は灰色に濁っている。齢八十を超えており、髪は白くなり歯も欠けているが、まだまだ声は誰にも負けぬほど大きい。
「いや、まだわかりませぬぞ。もそっと慎重にうわさをあつめたほうが……」
道足の子——といっても四十を過ぎているが——の安藤平左衛門が、うかれる老父をたしなめる。
「信長を恨みに思う者は多うござるゆえ、そうした者たちが何かとり違えて流したうわさかもしれませぬ」

「なんのなんの。かような大事、間違いなどであるものか。信長はくたばりおった。討たれる理由は山ほどあるわい。天罰と仏罰がかさなって、それに何万人の恨みが降り積もったのじゃ。あれほどの悪人、長生きできるはずがあるものか」
道足は目尻を下げて気持ちよさそうにうなずく。
「うんうん、仏罰仏罰。こうなることは、目に見えておった。のう岡八兵衛」
「松田でござる。松田鷹助でござる」
むっとしたように鷹助が言う。岡八兵衛は安藤家のもうひとりの家老である。
「ああ、父上はこのところ、ちと耄碌がすすんでおってな」
と平左衛門はあわてて鷹助に耳打ちした。鷹助はぎょっとした顔で道足を見た。
道足は何ごともなかったかのように泰然としている。
六月初旬の暑い盛りのこととて、蟬の声が雨のように降ってくる。木々が青々と生い茂る山中なのでいくらかは涼しいが、それでも三人は額に汗を浮かべながら対面していた。
安藤家はもともと西美濃の豪族で、稲葉、氏家とともに西美濃三人衆といわれていた。
西美濃は平らな野がつづき、揖斐川や長良川の支流が多く水が豊かなため物成りもよい。したがってここを領地とする者たちの力は大きく、永禄十年（一五六七）に信長が美濃の斎藤家を攻略し得たのも、稲葉ら三人衆が斎藤家を見限り、信長についたためだった。
信長に従ったあと三人衆は、その旗本として数々の戦いに参じた。
伊勢の大河内城攻めから姉川の合戦、長島攻略、摂津の有岡城攻めなど、当時伊賀守と名乗

っていた道足と平左衛門も懸命にはたらいたつもりだったが、信長は醒めた目で見ていたようだ。二年前の天正八年（一五八〇）に突然、納得しかねる理由で非を咎められて城と領地を取りあげられ、蟄居に追い込まれてしまった。身柄は西美濃三人衆のひとり、稲葉一鉄の預かりとなって汾陽寺という山寺に押し込められ、いまに至っている。

鷹助は、安藤家の追放後に所領の北方にもどって百姓をしていたが、今日、信長討たるというおどろくべき一報をもって、六十近い老身ながら汾陽寺まで馬を飛ばして来たのだ。

「まずは祝杯をあげねばならんな、家中の者に触れをまわせ。今宵は信長の死を肴に飲み明かすぞと」

「いや、たとえ人でなしの大悪人とは申せ、死んだ者を肴にとは、他への聞こえも悪うござる。ちと遠慮なされませ」

平左衛門がたしなめても、道足は首をふった。

「遠慮など、いらんわい。酒じゃ、酒。一升や二升では足りんぞ。いまから里へ下りて、村中の酒を買いあつめてこい！」

「いや、そんな銭はどこにも……」

「こりゃ平左、わしに逆らうのか！」

道足の目が吊り上がっている。

「……わかり申した」

やむなく家人に、あるだけの銭で酒を買ってくるよう命じた。

七十を過ぎたころから道足は人の言うことを聞かなくなり、剣呑な性格になっていたが、二年前に信長の怒りをかい、蟄居を命じられてからというもの、輪をかけて堪え性がなくなり、自分の言うことを聞かないとすぐに怒り出すようになった。耄碌もして、人の名前を取り違えるようになっている。嫡男の平左衛門も、弟の七郎とよく間違われる。しかもいまだ口も足腰も達者で、怒り出すと脇差を抜いて振りまわすから、危なくて仕方がない。ここは逆らわないのが一番だ。

——しかし、世の中はわからぬものよ。

つい数日前まで、世に波乱の起こる兆候などなにひとつなかった。甲斐の武田をほろぼし、中国の毛利をも攻め潰しそうな信長の勢いは誰にも止められず、天下をその手に収めるのもあと一、二年のうちかと思われていたのだ。

なのに朝のほんの一刻（二時間）ほどのあいだに——鷹助の話によると——、建物もろとも灰になってしまうとは……。

「まことに天下の大変事だわ。耄碌した親爺がうかれるのも無理はないわい」

「なにか言うたか」

「いえ、こちらのことで」

「祝杯をあげたあとは、さっそく殿にご出馬をあおがねばなりませぬ」

鷹助が機嫌をとるように言う。

「出馬か。みな、支度はしておるのか」

「それはもう。いまごろは槍を磨いて待っておりましょう」

「ふふん、そうじゃろう、そうじゃろう」

道足はにんまりと目を細めた。

安藤は古い家である。それだけに譜代の家臣たちが何百人といる。道足が信長に追放されたあと、他家に仕えた者もいるが、多くは帰農し、西美濃の席田郡から本巣郡に散在する先祖伝来の地を耕してひっそりと暮らしている。

しかし信長がこの世から消えたとあれば、道足も寺に押し込められている理由はなくなる。道足が立ち上がり、信長に取りあげられた旧領を回復して領主に返り咲くと宣言すれば、知行をなくして不遇をかこっている家臣たちはみな勇躍し、鎧櫃を背負い槍をもって駆けつけてくるだろう。

「まずは祝杯よ。さあ、今宵は飲むぞ」

道足の心はもう旧領に飛んでいるらしい。にこにこ顔で杯をあげる真似をしている。

——おいおい、大丈夫か。

平左衛門は不安になった。旧領の回復というが、そんなに易々とできることではない。いまは稲葉家の所領になっているから、兵をあつめ、稲葉勢と一戦して実力で取りもどさねばならない。

その上、信長が討たれたとなれば、天下の情勢は混沌としよう。誰がつぎの覇者になるのかを見極める必要もある。まず光秀となるのだろうが、主殺しを犯しているだけに、すんなりと

諸将の支持が得られるかどうかわからない。徳川どのや柴田権六なども考えられる。老いた親爺がそこまで考えているとは、到底思えない。旧領回復の機会が訪れたことはうれしいものの、前途は多難と思わざるを得なかった。

「結局、わしが尻ぬぐいをすることになるのか……」

「平左、なにか言うたか」

道足が耳に手をあてて問う。

「いえ、何も」

耳が遠いようなふりをしながら、ひっそりともらす独り言は聞こえるらしい。まったく油断ならない親爺だ。

なおも話の尽きない道足と鷹助を見ながら、平左衛門は思う。

そもそも安藤家は、どこで道をまちがえたのかと。

二

「光秀の大馬鹿者めが！」

息子の彦六から本能寺の変の報告を聞いた稲葉一鉄は、大声をあげた。

ここは西美濃の揖斐郡にある清水城である。信長の旗本をつとめていた一鉄は、老齢を理由に形ばかり隠居し、それまで本拠としていた曾根城を嫡男の稲葉彦六にゆずって清水城に移っ

ていた。
その彦六が、一鉄の前でかしこまっている。
「大恩ある上様を討つとは、なんと天道を恐れぬ仕打ちか。悪鬼の仕業よ。とてもまともな者のやることとは思えぬ」
憤怒の表情でしばらく宙をにらんでいたが、やがて目を彦六に向けると、
「で、そなたは何とした。逃げ帰ってきたのか」
と問うた。彦六は信長の中国遠征に従うべく京の町中にいたが、本能寺が襲われたと聞いて駆けつけたときには、もはや明智勢が勝ち鬨をあげたあとだったのだ。
「逃げ帰るとは人聞きの悪いことを。これから起こるであろう乱にそなえて、いち早く兵を引いたのでござる」
彦六は胸を張って答えたが、一鉄は鼻先で嗤った。
「同じことやろが、この阿呆が。目の前で上様が襲われたなら、たとえ小人数でも敵に斬ってかかって、上様の前で討死せんか。それこそ家の名誉というものぞ」
「わしが死んでも、上様が死ねば恩賞ももらえぬ。犬死じゃ」
「ふん。そなたが死んでも稲葉の名は残る。あとのことは心配するな。家を継ぐ者はいくらでもおる」
「親爺どの、それはなかろう」
気色ばんだ彦六の剣幕に一鉄は口を閉じたが、目を畳に落とすと、

「それにしても、思いもよらぬことが起こるものよ。わしも七十年近く生きてきたが、世の中の先行きなど一向にわからん」
としんみりと言葉を継いだ。
「まことに。天下の平均しを目の前にしておったのに……。一番おどろいておられるのは、上様ご自身でしょうな」
「まあ、のう。これを油断と言ってしもうては酷やろうな。信頼する重臣に裏切られるとは、誰も考えぬ」
「まことに。まさかあの、上様の覚えがめでたい光秀めが謀叛とは……」
「いや、先ごろ光秀は上様に折檻されておったからの、恨みを含んだかもしれんて」
「斎藤内蔵助や那波の件か」
「おお、上様に直訴して、光秀のわがままを暴き立ててやったわい。光秀のやつ、口答えしよって、上様に蹴飛ばされたそうな」
カッカと一鉄が笑った。
稲葉家の家臣だった斎藤内蔵助と那波直治が、稲葉家を辞したあと光秀に仕えたので、一鉄は今年になってから上様に、光秀が不当な引き抜きをしたと、近習の堀久太郎を通じて訴え出たのである。
訴えは聞き入れられ、那波は稲葉家にもどり、内蔵助は切腹と裁断が下った。光秀が裁断を拒否し、怒った信長に折檻されたと聞いている。それがほんの十日ほど前のことである。

「すると……、今度の件にはうちも関わっておるのかな」
と彦六が腕組みをし、眉をへの字にして言うと、
「おや、そうなるかな」
一鉄も考え込み、ふたりの会話がしばらく途絶えた。
一鉄が訴え出なかったら光秀も上様に折檻されることなく、したがって上様を襲わなかったのではないか？
稲葉家はひどく余計なことをしてしまったのではないか？
まさかと思うが、どこかから非難されることはないだろうな。
そうした疑念がふたりのあいだを行き来し、重苦しい時間が過ぎていった。
「ま、起こったことは起こったこと。いまさら考えても仕方あるまい」
重苦しさを振り払うように、ぽんと膝をたたいて一鉄が言うと、
「さようさよう。忘れましょう。で、これからどうしましょうかの」
と彦六も腕組みをといて応えた。
「さて、当面、世は乱れような。光秀めが天下を押さえられるとも思えぬし……。さりとて、誰か他の者が出てくるとも考えにくい。また元亀以前の世にもどろうな」
「各地に大名が乱立し、いくさが絶えぬ世になりましょうか。さもあろうなあ」
彦六の言葉に、一鉄もうなずく。
「されば、稲葉の家としては好機よ。ひとつ美濃一国もいただこうか」

「親爺どの、気はたしかか。寝言はたいがいになされ」
彦六があわてて言う。
「なにを申す。それくらいの気概がなくて大名がつとまるか。美濃どころか、岐阜中将どの（織田信忠）の領地をそっくりいただこうかい」
むほほ、と一鉄は目を細めている。彦六は首をふって問いかけた。
「大風呂敷はあとにして、まず、わしらはどちらにつくかを決めねばならんわ。光秀につくのか、それとも光秀を仇と狙うであろう三介さま（織田信雄、信長の次男）や三七さま（織田信孝、信長の三男）にお味方するのか。親爺どの、どうなさる」
「利のあるほうにつく。決まっとるわ」
一鉄はためらいなく言い切った。
「いくら大義名分があっても、討ち滅ぼされてしまってはどうにもならん。名分よりは力よ。力があって、勝つ方につく。家を保つにはそれしかあるまい」
「それはそうじゃが……。ならば光秀か。上様を討ったあとだけに、勢いはあろう」
「その勢いも、いつまでつづくか見定めてからでないと、危のうて味方できんわい。まず当面は様子見よ。あわてて動いても何もよいことはないわ」
ふん、と鼻から息を吹き出した一鉄は、彦六をにらみ据える。
「それより彦六よ、足許は大丈夫か」
「は？」

「足許よ、足許。この機に乗じてわが所領を違乱する者は、おらんか」
「いや、それは……。なにしろ京からもどったばかりで、まだなにも聞いておらんが」
「これだけの大乱や。きっと出てくるぞ、悪い虫がな」
一鉄は目を庭に向けた。強い西日に照らされた庭の木から蟬の声が聞こえてきた。

三

夜中、ひそかに汾陽寺を抜け出た安藤道足の主従は、一昼夜かけて西美濃の本巣郡北方に到着した。
「いやあ、久しぶりやの」
夕暮れの光の中で旧領の光景を目にした道足は、感に堪えぬといった声を出した。
「北の山の姿といい、川の匂いといい、なつかしいわい」
「まことに、この二年のあいだ、われらもお待ち申しあげておりました」
鷹助がいくらか高い声で応える。
「城は、どうなっておる。あのままか」
「城はそのまんまなれど、稲葉の手の者が入っておりまする」
「む、追い払わねばならんな」
「はっ、われら手の者が御下知を待っておりまする」

「よしよし。みなの者にも苦労をかけたな」
道足の言葉に、鷹助は涙ぐんだ。
「この二年というもの、われら、武門の誇りを傷つけられ、武勲も台無しになり……」
「すまなかった。わしが油断したばかりに、そなたらにも迷惑をかけてしもうた」
頭を下げる道足に鷹助は、
「おお、もったいのうござる。頭を、頭をあげてくだされ。あるじの苦労は家臣の苦労、殿はわれら以上に口惜しい思いをなさっておられましょう」
と涙声をあげている。
「いや、そなたらこそ、苦労したはずや」
「なんの。われら、お家のためならば、いつなりと犬馬の労をいといませぬで」
感極まったのか、鷹助の涙声がますます高くなる。道足は大きくうなずき、のたまった。
「よくぞ申した。岡八兵衛よ」
「いえ、松田でござる。松田鷹助にて」
「お、そうやったか」
頓狂な声を出した道足を、鷹助がにらんだ。
老人たちの愁嘆場をよそに、平左衛門は頭の中でこれからの手だてを練っていた。
——まずは光秀に連絡をとらねばならんな。
いくら旧臣があつまってくるといっても、人数は知れている。旧領を回復し、その後も保持

するためには後ろ楯が必要だ。だれを頼むかといえば、いまのところ明智光秀以外には考えられない。気の利いた者を使者に出す必要があるだろう。

そして美濃全体の動きも気になる。とくに信忠が討たれて空城となった岐阜城に、だれが入るのか。それによってこちらもどう動くかを考えねばならない。こちらが兵をあつめれば、いまの領主である稲葉一族がだまっていないだろう。どう対処するのか……。

やるべきことはいっぱいある。こちらの気持ちも考えず、ただはしゃぐ老父の姿を見ながら、平左衛門の気持ちはしだいに重くなっていった。

その夜、鷹助の屋敷に旧臣たちがあつまった。

「いやあ、このときを待っており申した」

「天に道理ありと申す。二年で殿がもどって来られたとは、まさに道理がはたらいたのでござりましょう」

と、どの顔も明るい。無理もなかった。安藤家の没落によって武士としての誇りを奪われた上、これまでは領主として年貢をとる立場であったのに、いまは逆にとられる身なのだから。それがまた昔の姿にもどるとあれば、うれしくないはずがない。

「さて、稲葉の仕置きはどうかな。みな丁重にあつかわれておったかな」

道足が問う。信長に取りあげられた安藤家の旧領は、みな稲葉一鉄に与えられていた。したがって旧臣たちは稲葉家に年貢を納めているのだ。

「殿、聞いてくだされ。それがひどいもので……」

旧臣たちの口からは、稲葉家に対する不満がつぎつぎに噴き出した。もと武士としてのあつかいがなく、そこらの百姓たちとおなじに見られている、年貢の取り立てが厳しくて、このままでは家が立ち行かなくなる、等々。

平左衛門からすれば、帰農したかぎりはそこらの百姓とおなじあつかいになるのは当然だと思うのだが、旧臣たちはそう思っていないらしい。安藤家の旧臣として侍の待遇を期待していたようだ。

話を聞いているうちに、道足の顔がしだいに険しくなっていった。

「おお、みな苦労かけたな。聞いていて怒りが湧いてくるわい。一鉄のやつ、わがかわいい家来どもを、犬猫のようにあつかいおったな」

と道足が言いだしたので、平左衛門は首をひねった。なにも犬猫にたとえなくてもいいではないか。そもそもそんなことはだれも言っていないし。

だが道足は自分の言葉にあおられるように、顔を紅潮させて怒りを高めている。

「よおし、生意気な稲葉の小倅めを、天にかわって成敗してくれる」

稲葉一鉄はたしかに道足より年下だが、小倅ではなく七十近い高齢ではなかったかと、平左衛門はまた首をかしげた。しかし一座の空気は熱くなっていて、そんなことはだれも気にしていない。

「そもそも、なぜわしばかりが酷い目に遭わされねばならんのか。あの稲葉の小倅め、抜け目なく立ちまわって、信長をだましおった。よほどうまく焚きつけたと見えて、わしは申し開き

もできずに退散させられたわい」
　汾陽寺で、それこそ何度も聞かされた愚痴(ぐち)を、道足は話しはじめた。
　たしかに二年前の信長の折檻状は一方的で、とても承伏(しょうふく)しかねるものだった。だが力では信長に逆らえず、やむなく言いなりになってきたのだ。
「いまこそ弓矢にかけて領地を取り返してくれる。者ども、稲葉の奴腹(やつばら)に、目に物見せてくれようぞ！」
　興奮した道足の言葉に、みなが立ち上がり、「おう！」と声を合わせて気勢をあげた。

「ふん。やはり出てきおったか」
　安藤道足が旧臣どもを糾合(きゅうごう)し、北方の城を襲ったとの一報が清水城にもたらされても、一鉄はおどろかなかった。
「あの老いぼれ、この世に未練たっぷりやったでの。いずれ暴れるとは思っておったが、存外早かったな」
　八十歳ほどの道足と七十歳にならんとする一鉄は十歳ほどしか違わないはずだが、本人の頭の中ではよほどの違いがあることになっているらしい。
「しかし、これはやっかいですな」
　と彦六は顎(あご)をなでている。
　北方城は、この清水城から南東に二里（約八キロメートル）ほど、彦六の住む曾根城から東

に一里半ほどのところにある。
　道足の旧領といっても、いまは稲葉領である。自領の城を攻め取られたのをほうっておいては、武士の面目(めんぼく)が立たない。
「岐阜のようすもはっきりせぬのに、足許で騒ぎを起こされては……」
　しかも北方は岐阜と曾根の中間にあるので、何かことがあって岐阜へ出る際に邪魔になる。
「だから言うたであろう。足許に気をつけよと。このことよ」
「気をつけるもなにも……。昨日の今日ですからな」
「こりゃ。それで戦国の世を生き抜くつもりか！」
　一鉄の癇癪玉(かんしゃくだま)が破裂した。
「まったく甘すぎるわい。おのれの肉を食らわれてから、やあ気がつかなんだと言うのかや」
　彦六も心得たもので、一鉄に逆らわずに本題に入った。
「さて、まずは人数をあつめますかな。向こうの人数は、せいぜい数百でしょう。八百もあつめればよろしいか。あれしきの城、八百もいらんと思うが……」
「この愚か者めが！　兵は常に手一杯にあつめるのや。足りぬとわかってからでは遅いぞ！」
「は、なるほど。ではさように」
　さらりと受け流して、彦六はうなずいた。
「あの城は早々に潰しましょうに。これから何が起こるかわからぬのに、目の前に腫(は)れ物があっては面倒でござろうて」

曾根の城へもどってから、彦六は家来たちに残らず陣触れをかけた。この城だけでも千はあつまるだろう。清水の城の分を合わせれば、まず千四、五百になるか。

——やっかいなことやが、手にあまることでもないわな。

西美濃三人衆のひとりといっても、しょせんは一度没落した者である。さしたる力はない。なにほどの手間もかけずに退治できるだろう。

重臣たちと、兵をどこに配るかを検討しながら、彦六は思う。安藤家もかわいそうだと。

いまの安藤家の立場は、とても他人事とは思えない。もしかすると安藤家と稲葉家は、立場が逆になっていたかもしれないのだから。

四

北方の城は東西一町半（約百六十メートル）、南北に三町ほどの敷地に水濠をめぐらし、土塁を掻きあげた平城である。周囲には重臣の屋敷があるほかは、水田と荒れ地が広がるばかりだった。

昨日まで稲葉家の一族が城主面して入っていたが、もとはといえば安藤家の城である。城の内部は心得ている。夜明け前、ひそかに安藤家旧臣をあつめて城近くに隠しておき、小者たちを城内に忍ばせ、門の閂を抜かせた。待ちかまえていた旧臣たちが門戸を押し広げて城内に入り、いっせいに鬨の声をあげると、あわてふためいた稲葉家の者は一戦もせずに逃げていっ

た。屋敷に火をかける暇もなかったらしく、城はそっくりそのまま手に入った。

ここに安藤家の旧臣があつまった。その数およそ五百。

「はっはあ。もどってきたわ。先祖代々の地にもどってきたぞ」

道足は顔を赤くして喜んでいる。

——さあ、これからがむずかしいわ。

上機嫌の道足を本丸の屋敷に入れたあと、平左衛門は西北の隅にある櫓にのぼり、西のほうを見晴らした。

城を奪いとったのだから、稲葉家がだまっているはずがない。軍勢を駆り催して攻め寄せてくるだろう。その攻勢をはね返さなければ、城も領地も保てない。

どこに兵を配って、待ちかまえるか。いや、いっそ先手をとって稲葉の城に攻め寄せるか。

西のほうに動きはない。それだけを確かめてから、二の丸の母屋にもどった。

「まずは祝杯や。祝杯をあげるぞ。酒をもて、酒を」

やることがなくて退屈したのか、本丸に押し込めておいた道足が出てきて催促する。

「いや、防戦の支度を先にしておかないと……。それがしはちと、あとで」

「なにを申す。これほどめでたいことを祝わぬでどうする。まずは飲め」

しつこく迫る道足のとろんとした目と血色のよい唇は、すでに相当飲んでいることを示している。そして酔った老父は、限りなくしつこい。

「……では一杯だけ」

椀に注がれた酒を飲みほし、道足を納得させてから、二の丸の広間に家臣たちをあつめて軍議をはじめた。最初から道足を臨席させると話がまとまらない恐れがあるので、最後に呼ぶと告げておいて、道足抜きではじめた。

「さあ、城はとりもどした。これからいかがする」

暑い最中とて、鎧を脱いで帷子姿や半裸で居ならぶ家臣たちに問うと、

「まずは城の備えをかためるべし」

「いや、この城は脆うござれば、先手をとって稲葉の城へ攻め寄せるべし」

と、ふた通りの意見が出た。どちらも一長一短があるので、時をかけて検討を重ねるうちに、攻めて出ようという意見が優勢になっていった。

ここは城といっても外郭はただ土を掻きあげただけで石垣はなく、近ごろはやりの天守もない。外濠の内側にはさらに内濠があって本丸、二の丸などと区分けしているが、濠を渡って軍勢が押し寄せてきたら、もう抵抗する術もないほど脆い要害である。守るよりは攻めて出たほうが気が楽だ。

「曾根の城も清水の城も堅いぞ。この人数で攻めきれましょうか」

鷹助が言う。どちらも平城だが、この城よりは濠も深く、土塁も高い。守る人数も多いだろう。不意を突かぬかぎり、攻めきれない。

軍議はふりだしにもどり、紛糾した。

——それにしても、稲葉が敵とは。

軍議をよそに、平左衛門は考え込んでしまった。もともと稲葉家と安藤家は所領が近くて家格もおなじほどで、西美濃三人衆として助け合って戦国の世をくぐり抜けてきたのである。

どうして両家は道を違えたのだろうか。

両家の運命が大きく分かれたのは、二年前の天正八年（一五八〇）のことだ。

それまで稲葉も安藤も、信長の旗本として多くの合戦に出陣し、おなじ持ち場ではたらいてきた。所領の高も兵力もほとんど同じだった。

その年の八月、大坂石山の本願寺が開城した。長年織田勢と戦ってきた一向宗が、ついに信長に屈服したのだ。

京から大坂に入った信長は、焼失した本願寺跡を見てまわったあと、すぐにおどろくべき行動に出た。自筆で本願寺攻めの責任者、佐久間信盛へ十九条からなる折檻状をしたため、右筆の楠木長諳にこれをもたせ、佐久間父子を面詰させたのだ。

折檻状には、石山本願寺攻めに五年もの歳月をかけたことを、「武篇道不甲斐なし」と決めつけ、はたらきの悪さを難じ、家禄を召し上げて追放すると宣言してあった。この上はいずれかの敵を平らげるか、さもなくば高野山にのぼって赦免を待て、請けないときは二度と赦免あるまじとまで指図されて、佐久間父子は着の身着のままで高野山へ落ちていった。

これを伝え聞いて、織田家中は静まりかえった。

信長が家来衆に厳しいのはいまに始まったことではないが、佐久間ほどの大物を追放するような荒っぽいことは、絶えてなかったのである。もしやわが身に災いがおよぶかと、みなが身

構えていたところ、信長は京にもどってから、宿老である林秀貞と丹羽氏勝を追放した。そして最後に道足と平左衛門も領地取りあげの上、追放に処すと宣告されたのだ。

林と丹羽が追放になる理由ははっきりしていた。宿老格としてふさわしいはたらきがないからだ。しかしこちらについては、佐久間のときと違って理由ははっきり明かされなかった。ただ「先年、上様ご迷惑の折、野心含み申す故」とだけ伝えられた。そして弁明の機会は一切与えられず、汾陽寺へ追われた。

――あれはまったくの濡れ衣よ。

と平左衛門は思い出す。ご迷惑の折に野心を含むとは、元亀三年（一五七二）に甲斐の武田信玄が三河に攻め込んだとき、武田方に内通したとされたことを指すのだろう。

だが、そんな事実はない。

武田からは、たしかに内通を誘う使者が来た。おそらく信玄は織田家を討つため、まず美濃を切り崩そうとして、多くの美濃侍にはたらきかけたのだろう。安藤家はそのうちのひとつだったに過ぎない。

使者には返事を出さず、内通はしなかった。だからなぜ安藤家だけが罪に問われ、追放されたのか不思議で仕方がない。たいしたことと思わず、そのまま済ませてしまったのが失敗だったのか。

信長に武田からの使者が来たことを告げて、内通する意志がないことを明確にするべきだったかもしれない。そうすれば今ごろは……。

「どうなされた。物思いにふけるときではござらんぞ」

と、鷹助が話しかけてきた。

「いや、昔のことを思い出しておってな、われらはどこで陥穽に落ちたのかと」

「はあ、陥穽でござるか」

「かような目に遭うとは、陥穽に落ちたとしか思えぬでなあ」

「ま、誰でも世の中、思った通りにはいかぬもので」

そんな軽い話ではないのだが。

「おお、軍議はどうなった」

そこへひょっこりと道足が顔を出した。

「いや、父上、まだもめておりますゆえ、およそまとまったところでお呼びいたす。それまでしばしお待ちを」

と平左衛門は止めたが、「いつまで待たせる気や」と道足はかまわず上座にすわってしまった。そしてしんとなった旧臣たちに向かって、赤い顔のまま吼えた。

「稲葉の小倅ひとりに、何をもめておる。あやつを討ち果たすに策など無用よ。いますぐに打って出よ！」

「いや、それは……」

平左衛門はあわてた。あとさき考えずに出陣するのは危険すぎる。平左衛門も鷹助も少し待てと止めたが、道足は聞かない。

「ええい、二年のあいだに侍の気概を忘れたか。いくさに勝つ秘訣は、一にも二にも先手をとることぞ」
みなの者、そうではないか、と旧臣たちに賛同をもとめる。旧臣たちは、
「まさに殿のおおせのとおりや」
「早々に襲うにしかず！」
と沸きあがっている。平左衛門と鷹助が「いや待て」「せめて物見を遣わしてからにしろ」と止めても、聞き入れる者がいない。
「よう言うた。さすがにわが家来どもや。そうと決まったからには、さっそくいくさの支度をせい！」
道足のひと声で、たちまち打って出ると決まってしまった。

その夕刻、稲葉一鉄と彦六は兵をひきいて呂久の渡しを渡り、曾根城から半里ほど東にある宮田村まで来ていた。
「やつらが押し出してくるだと？」
彦六は首をひねった。物見の報告では、安藤勢五百ばかりが北方の城を出たという。先遣隊がこの先の本田村まで来ているらしい。
「はて、人数が少ないのに籠城せず、野で戦おうとは……。気をつけなされ。やつら、死を覚悟しているかもしれませぬ」

と物頭の村瀬大隅守が言うが、
「老いぼれ自身は死ぬ気でも、家来たちがついてゆくものか。そんな心配は無用や」
一鉄が嗤った。
「あやつ正気か。伏兵も隠せぬこんな野原に小勢で出てきても、勝ち目がないとわからぬか」
「まことに。まずはひと当て、当ててみましょうかの」
彦六は一族の若者、稲葉左近と加納雅楽頭に命じて、数十人の雑兵を出してみた。
——まずもって、安藤も終わりかな。
美濃では由緒ある家だが、戦国の世を泳ぎ切れなかったということだ。
家が滅びるのは、べつに珍しいことではない。美濃国の守護だった土岐家など、いまや跡形もない。最後の当主、土岐頼芸は美濃を追放されたあと諸国を流浪し、甲斐の武田家に寄食していたところ、武田家もこの春に滅びてしまったので、一鉄が情けをかけて美濃へ連れて帰った。いまは稲葉領内の谷汲村で、ひとり余生を送っている。
隣国近江でも六角氏と浅井氏が信長に滅ぼされてしまった。そして強勢を誇った当の信長も、数日前に討ち滅ぼされた。
そう見てゆくと、強いから生き残るというものでもないし、勢力が小さいから滅びると決まったわけでもない。いったい何が家の運命を決めるのだろうか。まったく不思議だ。
「こりゃ彦六、なにをぼんやりしておる」
一鉄に声をかけられて、はっと我に返った。

「かようなところにおっては、下知もできんわい。軍勢を進めるぞ」
号令がかかって、千を越す軍勢は横に広がり、畦道や野原を進んだ。
本田村が見えてきた。深田と湿地に囲まれた中に一段高い荒れ野があり、そこで両軍が入り乱れて戦っている。
「なんじゃ、押されておるぞ」
一鉄が怒声を発した。こちらの旗色は悪かった。先に出した数十名は討ちとられたか、姿が見えなくなっている。おなじほどの人数では、先に来て待ちかまえていたほうが有利なのだ。
「彦六、二の手を出せ。緒戦で負けては士気が鈍っていかん」
命じられるまま、彦六は村瀬大隈守に八十騎をつけ、駆けさせた。ひとりの騎馬侍に足軽が二、三人はつくから、三百名あまりの軍勢となる。
一団は荒れ野に突っ込んでゆき、しばし戦って安藤勢を駆逐した。そのようすを見て、一鉄は満足げに下知した。
「よしよし。では腰兵糧を使え。しばらく休んだら、進むぞ」

五

先手をとるはずの安藤勢だったが、稲葉勢のほうが動きが早かった。こちらの攻勢を見越したかのように、兵を城の前に進出させて待ちかまえていた。

先遣隊を討ちとられて、士気が一気にしぼんだ。
「やはり多勢に無勢。この小勢で攻めるのは無理と覚えてござる」
「まずは守りをかため、援軍を待ってはいかがか」
家来たちが弱気になり、前に進むどころか後ずさりしはじめた。無理はない。稲葉勢の人数はどう見てもこちらの倍はある。
「親爺、いかがする」
平左衛門は道足にうかがいを立てた。持ち前の大声で叱咤してくれるかもしれないと期待したのだ。
「………」
道足は無言だった。口をあけて宙を見ている。
――都合の悪いときは呆けたふりか！
まったく迷惑な老人だ。
「退け。城へ入れ！」
平左衛門の指示で、残りの兵は北方城に入った。
稲葉方は城の西にある糸貫川の前にとどまり、ようすをうかがっている。そろそろ日暮れだから、攻めるのは明日にするつもりだろう。決戦は、明日だ。城内に篝火を焚き、見張りを厳重にするよう命じておいて、兵たちを休ませた。
その夜も暑かった。平左衛門は甲冑ばかりか籠手も臑当もはずし、帷子一枚で横になった

が、眠れるものではなかった。

城に籠もって援軍を待とうにも、あてはなかった。明智光秀と連絡をとるために出した使者は、まだもどって来ない。光秀自身、どうなっているのかもわからなかった。

——なぜ、わが家はかような目に遭うのか。

輾転と寝返りを打ちながら思うのは、それだけだ。なぜ信長の怒りに触れてしまったのか。なぜ稲葉家のようにうまく立ちまわれなかったのか。

それはまず……。

城内のどこかで鼾をかいているであろう、老父道足の顔を思い浮かべた。家を保つのに、道足の力量が不足していたのではないか。道足は嫡男で、大切に育てられてそのまま安藤家のあるじとなった。苦労を味わっていない分、わがままだし、人間の鍛え方も足りないのではないか。逆境を切りぬける手並みなど、望むべくもなかったのだ。

対して稲葉一鉄は、稲葉家の六男に生まれ、幼いころに寺へやられたが、十一歳のときに父と五人の兄がみな戦死したため、還俗して家をついだのである。幼い当主が家を保つためには、さまざまな苦労があっただろう。それを忍んできたのだから、一鉄の人格は練れている。

その差ではないのかと思う。

追放の原因となった、信玄との内通の疑惑にしても、稲葉一鉄もおなじように信長に疑われ、呼び出されて申し開きをしたと聞く。だがその態度が見事だったため、その後は不問に付された。うちの親爺も一応は詫び言をしたようだが、気に入られなかったらしく、数年後にい

きなり追放の憂き目にあった。

ほんの小さなずれが、人の運命を大きく変えることもある。

信長にしても、本能寺で倒れるまでにあわやという危機はいっぱいあった。

まず元亀元年（一五七〇）、千草越えの山道で善住坊という鉄砲の名人に二つ玉を撃ちかけられたことがあった。十二、三間（二十メートル強）と外すはずのない間合いだったが、弾は身体をかすめ、袖を射抜いただけに終わった。もう五寸、弾道がずれていたら、信長は即死だっただろう。

さらに天正四年（一五七六）、大坂攻めの途中、天王寺に味方の軍勢が一揆勢に取り籠められたことがあった。これを救出しようと出陣した信長は、一万五千の敵にわずか三千の兵で打ちかかって勝利を得たが、そのとき鉄砲で足を撃たれた。これもかすり傷に終わったが、ほんの少し弾がずれていれば致命傷になったはずだ。

いずれもまことにわずかな差で死を逃れたのである。信長は強運だった。それも本能寺に襲われるまでのことだったが……。

稲葉とわれらの差も、小さいことなのだろう。だが、結果は大きく違ってしまっている。

暗闇の中でため息ばかりついているうちに、廊下を荒々しく踏み鳴らして足音が近づいてきた。部屋の前で止まるや、緊迫した声がした。

「申しあげます。稲葉勢、糸貫川を渡り、こちらへ向かってきております」

平左衛門ははね起きた。外はまだ暗い。

「みなを起こせ。出陣すると触れよ」
いくさ支度をうながす太鼓が鳴り、城内がざわめいてきた。
城に籠もっていては勝ち目がないことは、平左衛門にもわかっていた。黎明の中、安藤勢は城を出ると少し西へ向かい、稲葉勢に向けて三段に構えた。
鶴翼に構えた稲葉勢は、ひたひたとこちらに寄せてきた。一町ほどの間合いになると、いっせいに鬨の声をあげた。
こちらからも鬨の声で応じ、まずは矢弾の交換がはじまった。
安藤勢と稲葉勢のあいだで先手同士の競り合いがあった。稲葉勢は数にものをいわせて押し切り、包むように安藤勢に迫ってきた。
松田鷹助は槍をもって稲葉家の剛の者、長山与左衛門と渡り合い、討ち止める寸前までいったが、与左衛門の手の者に斬りつけられてその場に倒れた。岡八兵衛は家来どもとともに打って出て、十文字の槍をもって寄せ手を追い散らし、その勢いで一鉄の本陣めがけて馬を馳せたが、陣前で稲葉の手の者に討たれた。
平左衛門は諸方を下知して戦ってきたが、あれよあれよという間に二の手、三の手も押され、陽が高くなったころには安藤勢の敗勢は明らかになっていた。
――これまでか……。
無念だが、兵数の違いはどうしようもない。やはり無謀だったか。
「親爺どのはどうなさる。腹を召されるか、落ちるか」

八十歳の身に鎧兜をつけ、本陣の陣幕の中にぽつんと腰をかけている道足に、平左衛門は問いかけた。
「どちらも御免よ。落ちてもゆくところがないわ。腹を切るのも大儀や」
「また、さようなわがままを」
気怠そうに言う道足に腹が立ったが、それ以上言うのはやめた。道足とて、望んで落ちぶれたのではない。運なのだから、自分の力ではどうしようもなかったのである。
さて、自分も腹を切るか、それとも打って出るかと思案していると、
「いま思えば」
と道足が言いだした。
「あのとき信玄坊主についておけばよかったかのう。さすれば信長は討たれて、わが家も安泰だったかもしれん」
なにをいまごろ詮ないことをと思ったが、ふとその口調に引っかかるものを感じた。
「親爺どのは、もしかして武田方に内通しておったのか？」
不安になって問い質すと、
「おお、しておったとも」
と、さらりと言ってのけるではないか。
「あのとき信玄坊主が病にならず、兵を美濃境まで寄せてくれれば、わしは立ち上がって岐阜の城を攻めるはずやった」

平左衛門は声もなかった。まさか、本当に内通していたのか。
「そなたにはだまっていたがの。あの信長の尊大な面に腹が立ってな、まだしも信玄のほうがよかろうと思って、ひそかに文のやりとりをしておった。昔のことやがのう」
なんという無謀で愚かなことをしていたのか。
「しかしな、信長に尻尾はつかまれなんだぞ。二年前に言い渡されたときは仰天したが、あれも当て推量よ。露見するような下手な真似はしておらん。もし当時、露見していたら追放などでは済まず、磔になっておったわ」
道足は薄笑いをうかべている。
信長もあやしいとは思いながら、確実な証拠を摑めなかったのだろう。だからだまっていたが、やはり怒りを抑えきれず、二年前に他の者とあわせて腹いせのように追放に処したのだ。
――やはり運だけではなかったのか！
もやもやが晴れて、これまで不思議に思っていたことがすとんと腑に落ちた。親爺が愚かなことをしたせいで、安藤家は没落したのだ。
それがわかっていたら今回も親爺のいうことなど聞かず、もっと慎重にことをすすめたのに……。
だが遅かった。本陣の備えが破られ、陣幕の前にわらわらと敵兵が駆け込んできた。
「安藤平左衛門どのと見受ける。それがしは稲葉家中の者にて加納悦右衛門と申す。その首もらいうける。いざ勝負！」

と叫びながら、黒糸縅の甲冑を着込んだ大男が槍を向けてきた。

巳の刻（午前十時）になると、安藤勢の本陣には稲葉勢の旗印しか動いていなかった。
「あまり後味のいいいくさではないのう」
と、城から五町ばかりはなれた高台にある本陣で、稲葉彦六はひとりごちた。いずれ安藤道足と平左衛門の首がもたらされ、首実検をすることになるだろうが、いかに戦国とはいえ、昔からの知り合いの首を見るのは切ない。そう思っていると、
「こりゃ彦六、大将がつまらなそうな顔をするな。士気にかかわるわい」
と一鉄に叱られた。
「大将はな、いつも泰然として、何ごともなかったかのように下知するものよ。そうでなくば将士は安心して戦えん」
「そりゃそうやが、今度ばかりはなあ」
「なにが今度ばかりは、や。だれが敵になろうとどっしりと構えておれ」
「わかったわかった。もう言わんでくれ」
四十に近い身で説教は願い下げだ。彦六は床几にすわった。やがて安藤父子を討ちとったとの知らせがもたらされた。
「でかした。さればもう雑兵は追うな。勝ち鬨をあげて兵を引け。それから首実検じゃ」
扇子でぽんとみずからの膝をたたき、一鉄が言った。

大将を討ちとる完勝に終わったのだから、もう敵を気兼ねする必要もない。近くの寺に入ると、陣幕を張って実検を行った。

甲冑をまとったままの一鉄が陣幕の奥の床几に腰かけ、扇子を手にしている。左右に彦六ほか宿老、物頭格の者がいならぶ。そこへ小姓が進み出て、一鉄に弓をすすめる。一鉄は扇子を腰にさし、弓を左手に受けとると、弓杖をついた。

幕の外から甲冑武者が首を首板にすえて進み出る。一鉄はそっぽを向いて首を見ないようにしている。奏者が、

「石田五郎兵衛が討ちとりたる、安藤道足の首なりぃ」

と高らかに告げると、一鉄は立ち上がり、弓を射るごとく足を運んでから右手で太刀を抜きかけ、作法どおりに左の目尻で道足の首をひと目見た。

石田五郎兵衛は、首を手に急いで退出した。

「次なるは、加納悦右衛門が討ちとりたる安藤平左衛門の首なり」

と平左衛門の首が持ち込まれ、そのあとに家老の松田鷹助、岡八兵衛の首も披露された。

午の刻（正午）にはすべて片づいていた。西美濃三人衆と称された安藤家は滅びた。二年前までは織田信長の旗本として威勢を誇り、昨日までは五百の兵を動かしていたのに、おなじ三人衆の仲間に討たれ、もうこの世に存在しないのだ。

——他人事ではないわな。

わが家の明日の姿かもしれない。油断するな。彦六は兜の緒をしめ直すつもりで自分にそう

言い聞かせた。

「まだ油断ならんぞ。岐阜の動きはどうや。軍勢はしばらく城に入れておけ。こちらが揉めているとわかると、他の大名たちが手を出してくるぞ」

と一鉄は厳しい顔をしている。

——親爺があれなら、まだまだ安心かな。

彦六は思う。七十近いのに、耄碌の気配は微塵もない。安藤家のようになる心配は、当分なさそうだ。

「では進発せよ。おお、こたびはでかしたな、ええと、悦右衛門よ」

「それがしは石田五郎兵衛にござる」

声をかけた男にむっとした声を返されて、

「おや、そうやったか」

と一鉄は目を丸くしている。

「これはしたり。歳をとると、どうも物忘れが激しゅうてな」

とまどい顔の一鉄を見て、彦六の頭にかすかな不安がよぎった。

信長を送る

一

おなべの夫、信長は、子供のようなところがあってかわいい男だ。

十歳以上も年上で性格は激しく、家来には峻烈に対するが、ふたりきりになると甘えてくるし、少し邪険にしてやると、すねてむくれたりもする。

もっとも、あまりむくれさせると青筋を立てて佩刀を抜きかねないから、そこは加減がいるが、どこを押せばどう出てくるかは、長年暮らした中で知り尽くしている。いまでは信長を掌の上で転がすのも、そうむずかしいことではない。

その信長は昨日、中国征伐に出かけていった。いまこの安土は留守城である。

「やれ、まだ登りかえ」

おなべは侍女に向かってこぼした。安土山の中腹にある総見寺まで降りていって、信長の健勝を祈り、石段を登って本丸の前までもどってきたところだった。

総見寺は城内にあるといっても山の中だから、登り下りには苦労する。門の前で足をとめ、額の汗をぬぐってひと息入れた。自然に、目の前にそびえる天主をあおぐ形となった。

安土城天主は、見れば見るほど奇怪なものだ。

そもそも城といえば、堀と土塁の中に平屋の建物がいくつかあるだけなのが普通なのに、この天主は七階建てである。こんな高さの建物など、天下広しといえど他にはない。

高いばかりではない。屋根がすべて瓦葺きというのも贅沢だが、その瓦は青く、しかもところどころに金箔が張ってある。破風や軒下にも金の金具が使ってあるから、建物自体が燦然と輝いている。そして最上階の屋根の棟には、寺院のように武骨な鬼瓦ではなく、金箔でかざった美麗な鯱がのっている。これも他では見られないものだ。

以前に住んでいた岐阜城にもおなじような建物はあったが、大きさも壮麗さも比べものにならない。子供のような信長の考えつきそうな、奇抜な建物だと思う。

空は青く晴れわたり、ときどき湖から風が吹いてくる。蝉の声が騒がしいほかは、のどかな朝だった。

きらびやかな天主は、信長と妻妾の住まいでもある。

二階には部屋が二十もある。三階には八室、四階にも十室あって、平生は百人以上の侍女や小姓たちが立ち働いている。

天主三階の自室にもどると、おなべは扇をつかった。それだけでなく、

「障子を開けておくれ。いいから、大きく。この暑中に、なんの遠慮がいるものかえ」

と侍女に命じて、廊下に面した障子を大きく開け放させた。若いころからの形のよい目鼻立ちは変わらないが、このごろ身体のあちこちに肉がついて、顔も丸みをおびてきたおなべは、暑さが苦手である。

安土城は琵琶湖東岸の小山の上に建っているので、風はよく通る。風通しだけを考えると、夏場にこれほど涼しい住まいもそうはない。

ただこの三階にも、部屋はいっぱいある。いかに風を自室に取り込むかが勝負だった。

「もっと開けなされ」

「でもこれ以上は、廊下から見えましょうに」

「見えてもええわ。上様のお成りもないし、今日ぐらい、ぱあっと開けてたもれ」

命じられた侍女が障子を全開にすると、途端に廊下を通る赤い色彩が目についた。

桃色に紅をあしらった華やかな小袖を着たその女は、軽く会釈をして通りすぎた。そのあと痩せた老女があらわれ、まあと声をあげるとわざわざすわり込んで礼をし、立ち去っていった。ふたつ隣の部屋に住む信長の側室、あここと、その乳母である。あここは公家の三条どのの息女で、近ごろ信長の寵愛を一身に受けている。

「なんと派手な召し物でしょうかの」

侍女があきれたように言う。

「あれで上様の目を惹きつけるつもりでしょうか」

「これ、口をつつしみなされ」

とは言うものの、おなべの口調は咎めていない。それどころか、悪口を楽しんでいる風もある。侍女たちもわかっていて、ほかの側室たちを評するのに辛辣な言葉を使う。

おなべの夫は信長だが、信長の妻はおなべだけではない。

三階のこの一角には、信長の側室たちの部屋があつまっている。いま天主に部屋をもっているのは三人で、ほかに正室の美濃の方や、その昔に子供を産んだ側室たちが二の丸に住んでいる。信長の妻妾は、亡くなった者も合わせれば十人ほどになるだろう。産ませた子供の数は、おなべも正確には知らないが、二十人を超えていることは確かだ。

かくいうおなべも、信長の子を三人産んでいる。十歳になった長丸、六歳の弟、四歳の妹である。三人も産んだ女は、ほかには亡くなった吉乃がいただけだし、正室の美濃の方には子がないので、おなべの立場は強い。側室とはいえ、いまや天下人、信長の第一夫人として安土城の奥向きを仕切る地位にある。

もともと近江の土豪の娘だったおなべは、一度近くの土豪に嫁いでいる。その夫が隣国の信長に通じたために、南近江守護の六角氏に攻められて討死し、息子たちも人質にとられてしまったという過去をもっている。

並みの女ならば実家にもどって泣き暮らしただろうが、美人の上に気性の強いおなべはちがった。岐阜城まで出向いて、信長に息子たちの救出を訴えたのである。思いもかけないことに、このとき信長に見初められ、側室におさまったのだ。

それ以降、おなべの人生は好転した。夫の信長が着々と天下人への階段をのぼっている一方、前夫の子ふたりも大きくなり、いまでは信長の小姓をつとめているし、信長の三人の子も肥立ちがよく、すくすくと育っている。側室が何人もいて夫をひとりじめにできないのは不満だが、いまの暮らしに文句を言ってはばちがあたると思っている。

「今日は、誰が来ることになっていたかの」

汗が引いたおなべは、侍女にたずねた。

「へえ、岐阜からお寺さまが見えております。それに京からもおふたり……」
「さよか。ならば呼びなされ」
　女とはいえ信長の側近くにはべっているおなべには、やれ領地を認めろ、物成（租税）をまけろと、さまざまな頼みごとを持ち込んでくる者が絶えない。面倒なことだが、多くは親類や昔なじみの者たちだし、そうでない者もツテを頼ってやってくるので、無下にはできない。
　おなべは世話好きな上に腰が軽くて口も立つので、あちこちに顔がきく。頼まれたことを、しかるべき筋に口利きし、あっという間に解決してしまったこともある。信長に信頼され、諸方から頼りにされているのも、それなりの力があるからなのだ。
　天主には信長の許しのない者は上がれないので、おなべのほうから二の丸へ出て、御殿の一室で会った。
　御殿は山肌近くに建っているので、蟬の声が滝の音のように聞こえる。
　面会をもとめてきたのは、美濃のさる寺の雑掌僧だった。おなべは岐阜の城に十年ほど住んでいたので、美濃の知り合いも多い。
　寺領を信長の家来に押領されたと切々と訴えるので、担当となる奉行を教え、口添えすることを約束してやった。僧からはおおいに感謝され、礼物として小袖ひと襲をもらった。
「岐阜へお越しの折りには、ぜひとも当寺へまいりませ。春は桜、秋は紅葉が見事と評判でしてな。住持以下、お待ちしておりまする」
　と言い残して帰っていった。そう言われればおなべも悪い気はしない。天下人の妻におさま

った誇りと幸せを感じる瞬間でもある。
「さあ、つぎは……」
　僧を黒金門まで見送り、二の丸へもどると、取次の侍女が困ったような顔をしていた。
「どうしたえ。妙な顔をして。腹具合でも悪いのかえ」
　からかったつもりだったが、侍女は首をふった。
「それが……。じつは京衆がおかしなことを言われるので……」
　と、さらに眉根を寄せ、言いにくそうに口ごもった。
「なんやろ。申してみなされ」
　笑顔でうながすと、侍女は腹をくくったというように一度、口を閉じてから言った。
「そのう、本能寺が襲われたと……」
「え？」
　思わず聞き返した。本能寺は京での信長の宿所である。そこが襲われたとは、冗談として聞き流せない。
「襲われた？　誰に？」
「さあ、そこまでは。ただ、本能寺が軍勢に囲まれて、火の手があがっているのを見た者がいると……」
「まさか！」
　おなべは笑い飛ばした。

「いまの京で、上様に逆らえる者などどこにいるのやら。さ、おかしなことを言うておる間に、客人を呼んできなされ」

「はあ」

煮え切らない表情で侍女は引っ込んだ。

「御免なされませ」

と入ってきたのは、下京六条で唐物の絹織物をあつかう商人である。ときに見本の反物をたずさえて安土城下にもやってくる。おなべもよく利用するので、笑顔で迎えた。

「しばし無沙汰をいたしおりましたるゆえ、ご挨拶にまかり越しまして」

と型通りの挨拶をするが、なにやら落ち着きがない。しばしだまり込んだかと思うと、思い切ったように顔をあげて言った。

「ええ、かようなことを口にするのは、なんとも無礼と思し召されましょうが……」

「本能寺のことかや」

おなべはすかさず口をはさんだ。

「はあ。お聞きおよびで」

「たったいま、さようなうわさがあると聞いたばかりじゃ。本能寺から火が出たとか、軍勢に囲まれたとか、阿呆らしい話じゃが、これも一興じゃ。念のためにそなたの口からも聞かせてたもれ」

うながすと商人は、夜明け前に京を出てこちらへ来る途中、瀬田のあたりで早馬が何頭も追

い抜いていくので不審に思っていると、自分の店からも店者が追いかけてきて、こう告げたと言う。

「本能寺が軍勢に囲まれて、焼き討ちにあった、と」

その顔があまりにも真剣だったため、今度は笑い飛ばすわけにはいかなかった。

「誰が……、誰が襲ったと申すのじゃ」

「よくわかりまへんが、軍勢の旗印は桔梗だったとか」

桔梗。誰だろうか。家中で桔梗の旗といえば惟任日向守だが、まさか……。

「失礼ですが、こちらにくわしい話は、入っておりまへんので」

「いや、なにも聞いておらぬなあ」

商人の顔に動揺が走った。

「さようですか……。すると何かの間違いですやろか。まだ何ともわからんのですが、本当やとしたら……」

商人は左右を見回し、声をひそめて言った。

「ここは危のうござります。本能寺を襲った者は、つぎはここへ来るに決まっております。いまのうちにお退きなされたほうが……」

おなべははっとしたが、すぐに首をふった。

「さような話ならば、留守居の者から一番に報せがあるはずじゃ。しかし、いまだ何もないぞえ。わらわも上様の留守を預かる身じゃ。ただのうわさに怖じ気づいて、立ち退きなどできよ

うか」
それはごもっともにござりまするが、と商人はなおもじれったそうにしている。
「そなたの親切はようわかった。それで、今日の用はなにかな」
「はあ……。さようでござりまするな。本日まかり越しましたるは……」
迷い顔ながらも、商人がたずさえてきた見本らしきものを披露しようとしたとき、
「お方さま！」
と侍女が障子を開けた。顔が強ばっている。
「これ、無礼者が。客人が来ておろうに」
おなべは叱りつけたが、侍女はかまわず、
「ただいま松寿さまの従者がお着きになられ、火急の用でいますぐお目にかかりたいと申しております る」
とまくし立てた。
松寿はおなべの前夫の子である。信長付きの小姓として京へ出かけたはずだ。
ただならぬ空気を感じたか、商人はそそくさと席を外し、入れ替わりに松寿の従者が入ってきた。馬を飛ばして来たらしい従者は、荒い息で肩を上下させ、顔中から汗をしたたらせながら告げた。
「申しあげまする。上様、今朝早く、本能寺にて惟任日向守に襲われてござりまする。松寿さまは急を聞いて、軍勢が囲む本能寺に駆け込んでしまわれました」

「なんじゃと！」
思わず叫んだおなべにかまわず、従者は息を整えると、一気に語った。
「本能寺ははや焼け落ち、上様も松寿さまも行方が知れませぬ。侍衆はじめ小姓衆も、みな上様をお守りし、討死なされたご様子にござりまする」

二

おなべは言葉を失った。
いま聞いた話がまことならば、夫と子を同時に失ったことになる。
にわかには信じられなくて、悲しみも襲ってこない。ただ頭の中で、討死という言葉だけがぐるぐると回っている。何をしていいのかもわからない。だが心ノ臓は正直で、鼓動が急に速く強くなってきた。顔も熱くなった。
「お方さま！」
侍女の声に、おなべはゆっくりと振り向いた。
「いまの話、まことのようにござります。ただいま城内のあちこちで、みながうわさをしております」
みながうわさを、だと。
ぼんやりとした頭をめぐらせた。もう四つ時（午前十時）をすぎていよう。本能寺とこの城

のあいだは、早馬ならば一刻（二時間）もあれば駆け通せる。明け方六つ時（午前六時）に襲われたとしたら、もううわさになっていておかしくない頃合いだ。

「留守居の者に確かめてきなされ。そのうわさはまことかと」

やっとそれだけ言って、おなべはまたうなだれた。強い衝撃に打ちのめされたようで、立ち上がる気力が湧いてこなかった。

問い合わせに出した侍女がもどらないうちに、周囲が騒がしくなってきた。

「城から抜け出る者が出ているようで」

と別の侍女が告げる。

「上様が討たれた以上、惟任勢はこの城をめがけて攻め寄せてくるにちがいない、と言い回る者がいて、騒ぎになっております。いかがいたしまするか」

攻め寄せて……、騒ぎに……。

おなべははっと気づいた。自分は城主の妻だ。夫の消息がわからなくなったいま、自分が城を切り回さねばならないのだ。

夫と子供の死に向き合わされて、胸に大きな穴を穿たれたようで、呼吸が苦しい。それでも立ち上がり、指揮をとらねばならない。悲しんでいる暇など、ない。

――なにしろ頼りない女ばかりだから。

信長の好みなのか、正室も側室もみな気性がおとなしく、多くは一日中部屋の中でじっとして過ごしている。自分がしっかりしなければ、誰がこの城を守るというのか。

ひとつ大きく息をつき、顔をあげると、侍女に命じた。

「そなた、供をしやれ」

「は、どこへ」

「留守居役の者に、直に質しにまいるぞえ。蒲生左兵衛はどこじゃ」

信長は、出発前に馬廻り衆の中から二十人ほどを留守居役に命じていた。本丸には津田源十郎、賀藤兵庫頭、野々村又右衛門など七名。みな年寄りで、身上は百貫文ほどの微禄の者ばかりだ。二の丸にも十数名いるが、こちらは丸毛兵庫頭や祖父江五郎右衛門など、数千石の所領を持つ者がいる。中でも筆頭者は、蒲生左兵衛だろう。

これだけうわさになっているのに、自分の許へ報告があがってこないのはおかしい。本来ならここへ呼びつけるところだが、いまは動き回っていたほうが気が楽だ。

「あ、でも蒲生さまは……」

侍女が口に手をあてて言う。

「それがどうかしたかえ」

「いえ……」

蒲生左兵衛賢秀は、おなべとて顔を見たくない相手だ。だがいまそんなことは言っていられない。

「さあ、案内しやれ」

二の丸御番といっても、蒲生は二の丸にはいなかった。宿直役の屋敷に降りて、諸方との連

絡につとめているという。
宿直屋敷は、山麓から中腹までまっすぐにのびる大手道の脇にある。そこへ行くまでに騒ぎに巻き込まれないようにと、侍女が供廻りの侍や小姓を呼びあつめ、たちまち十人の集団を作った。おなべを取り囲むようにして、十人は山道を降りていった。
安土城は、山ひとつを丸ごと縄張りに取り込んでいるから、ふもとから山頂まで家臣たちの屋敷が立ち並んでいる。
あるじの信長がいない城内は、いつもより人が少ないが、それでも山頂の二の丸から降りてゆく道々、立ち話をする人や荷物をまとめている屋敷が目についた。木戸や櫓にいるはずの番衆も、ずいぶんと少なくなっている。
「ああ、お方さま」
途中、先に問い合わせに出した侍女に会った。
「いま宿直役の屋敷は人であふれていて、とても話をするどころではありませぬ」
「そんなことで使いの役がつとまろうか！」
気が立っていて、つい叱りつけてしまった。
「来やれ。どうしても留守居役に問い質さねば」
門前まで来た。侍女の言うとおり、屋敷は出入りする人でごった返していた。
供の侍が案内を乞うと、少し待たされた末に屋敷の中へ招じ入れられた。奥の間へ通されたが、庭を通るときに見ると、蒲生左兵衛は表の広間で、多くの者と額を寄せるようにして話し

合いをしていた。
奥の間へ入ると、間をおかずに広間とのあいだの障子が開き、蒲生左兵衛があらわれた。五十絡みの大柄な男で、鬢に白髪が目立つ。
「いや、わざわざのご足労、痛み入りまする。お命じいただけば、こなたより伺いましたものを」
そのまま下座に着き、大きな声で語った。
おなべはまっすぐ見返したが、できればこの男の顔は見たくなかった。
この男の一族が、おなべの前夫、高野城主の小倉右京亮を討ったのだ。指示したのは南近江の守護、六角氏だが、直接手を下したのは蒲生の者だった。つまり蒲生家は、おなべにとって前夫の仇なのである。
その後、六角氏は信長によって追われ、蒲生家は信長の軍門に降った。おなべはその前に信長の側室となっていたため、おなじ織田家中に仇の者がいることになってしまった。
これまでは蒲生家とは接触せずにすんできたのに、よりによってこんなときに留守居役になっているとは。天の采配はなんと意地悪なのかと嘆きたくなるが、やむを得ない。おなべは気力を奮い立たせて対面した。
「挨拶はよい。いかがじゃ。上様の消息はわかったか」
「そのこと。それがしも案じておるところにござるが、いまひとつ摑めぬので」
「ならば、物見の者を出しやれ」

「無論、とうに心利きたる者を出してござるが、なにぶん京の出来事ゆえ、真相がわかるまで、いま少し暇がかかるかと。ただ、いままで聞いたところでは」
とまで言ってから、蒲生左兵衛は居住まいをただした。
「上様は本能寺にてお討死。岐阜中将さま（織田信忠）は、二条御所にてお腹を召されたと」
おなべは息を吞んだ。上様だけでなく、家督を譲られた嫡男まで討たれたのか。となると、あるじを失った織田家は、どうなってしまうのか。
「上様に従っておった下男どもが逃げ帰ってきて申すことゆえ、まずまちがいは……」
そのあとは言葉を濁した。
「誰の仕業じゃ」
「惟任日向守。これはみなが申してござる。惟任の謀叛でござる」
謀叛。やはりそうなのか。おのれの家来に首をかかれたのか。
まことだとしても、まったく信長にふさわしくない最期だ。何から何まで信じられない。いや、信じたくない。だが無念なことに、どれも現実のようだ。
呆然としていると、
「今後のことは、ただいま思案を重ねておりまするが、御上﨟、公達の方々（信長の妻妾と子供）には、一時ここからお退きいただくが上策かと思うてござる」
と蒲生が言った。
「退く？　この城を出るのかや」

意外な話に、おなべは問い返した。城から出るなど、考えてもみなかった。
「御意。惟任が謀叛となれば、すぐにも軍勢がここへ押しかけてくると思わねばならず。今日明日にも……」
「待て。なぜ籠城せぬのじゃ。上様が精魂かたむけて築いた城じゃ。惟任の軍勢など寄せてきても、落ちるものではあるまいに」
この城は、天下第一の城ではなかったのか。
だが蒲生は首をふった。
「この城は、守るにはむずかしゅうござる。大手道は本丸までまっすぐにのびておるし、あの大きな天主は、火矢を射かけられれば守りようもなし。天下人の城だけに、攻められることなど考えてもおらぬ造りにござる」
信じられない。こんな大きな城が、守りにくいとは。
「たとえそうとしても、一戦もせずに退くという法はあるまいに。いまなら留守番衆も大勢おろう。長丸を大将にしてもよい。そなたが副将となって籠城すれば、伊勢の信雄どのがすぐに駆けつけて来よう。惟任などは……」
蒲生は、おなべの話をさえぎるように手を前に出した。
「守るとすれば、縄張りが広いだけに万を超す人数がいりましょう。いまはとても、それほどの人数をあつめられませぬ」
「ええい、聞けぬわ。早く籠城の触れをまわしなされ。さようなことを言うておる間に、兵と

なる者が逃げ散ってしまうぞえ」
　おなべの声は、悲鳴に近い。
「まことに。さればこそ、お退きいただくが一番と申してござる」
「退くとは、どこへ」
「それをいま、勘考（かんこう）しておるところで。さしあたっては、それがしの城へ案内いたそうかと思うてござる」
「日野（ひの）の城か！」
「は、さようで」
　おなべは、前にすわる男をまじまじと見た。
　日野城に信長の妻妾と子供たちを取り込んで、どうしようというのか。もし惟任がその勢いで天下を手にするようなら、蒲生は引き取った女子供を差し出して、手柄にしようというのではないのか。
　あやしい。疑おうと思えば疑える。なにしろ蒲生の家はこれまでも主家の六角家を見限って、信長についた前歴があるのだから。
　もし邪（よこしま）な思いがないとしても、日野城はここから四、五里（り）（二十キロ前後）しか離れていない。逃げるには近すぎる。惟任が安土城を押さえたら、すぐにも手勢を派遣して攻め落としにかかるだろう。
「もしわが城がご不満なれば、城に残るも勝手になされませ。しかし惟任めが攻めてきたと

き、守れましょうかな」
　おなべの表情を読みとったのか、蒲生が突き放すように言った。おなべは即座に言い返した。
「許さぬ。籠城の支度（したく）をなさい。留守居役として采配をふるいなされ」
　だが蒲生は首を横にふるだけだ。夫の後ろ楯（だて）をなくした女が何を言うか、というのだろう。言い争う気にもならない。おなべは怒りを抑え、屋敷を出た。

三

　蒲生の日野城へ行くなど論外だが、ではどうすればいいのか。
　逃げるとすれば、まず考えられるのは実家だが、これも近すぎる。実家は、この安土城から一里ほどのところなのだ。しかも城とは名のみで、濠一重（ほりひとえ）土塁一重の、ただの館である。軍勢が攻めてきたらとても持ちこたえられない。
　それに蒲生はああ言うが、留守城をあずかる妻としては、城を捨てるのはしのびない。やはり籠城が一番ではなかろうか。
「これ、留守居のおもだった者に声をかけてみなされ。大将となって籠城を指図する気はないかと」
　と供の侍たちに命じた。留守居役の中ではもっとも大身（たいしん）の蒲生が乗り気でないのに、誰が籠

城の将を買って出るかわからなかったが、できるだけのことはしたかった。
　そうしているうちにも時が過ぎてゆく。もうすぐ八つ（午後二時）になろうとしている。いまにも惟任勢があらわれるのではないかと、気が気ではない。
　——えい、しっかとしなされ。
　自分を叱りつけて気を落ち着けると、城主の妻として、いま自分がしなければならないことは何だろうかと考えた。
　城を敵の手に渡さないのが第一だろう。そして自分をはじめ城にいる妻妾と子供たちを守ること。そしてできれば夫の仇を討つ。
　籠城の支度は侍たちにまかせるしかないが、城内の妻妾と子供たちは、こちらで面倒を見たほうがいいだろう。まず一所（ひとところ）にあつめておきたい。事情を話して聞かせ、覚悟（かくご）をさせ、勝手に動かぬようにしておく。そしていざというときはいっしょに行動する。
　そうだ。みなに籠城に賛同してもらえばいい。妻妾たちが一致して籠城を望むと言いだせば、留守居役としても無視できないはずだ。
　女たちを説得するのは気が重いが、いい思いつきだと思われた。信頼のおける侍女を呼ぶと、
「そなたは二の丸と天主をまわって、側室と子供たちをあつめてきなされ。ええ、みなあつめるのじゃ。話して聞かせることがあると申してな」
　と命じておいて、おなべは自身で正室、美濃の方の部屋へ足を運び、事情を説明した。およ

そのことは聞いていたとみえて、美濃の方は格別おどろきもせず、万事（ばんじ）をおなべにまかせると言った。信長に三十年以上も寄り添っているだけに、覚悟はできているようだ。
　二の丸の広間にもどると、女と子供たちがおいおいとあつまってきていた。おなべの子もそうだが、小さな子がいるので、なにかと騒がしい。側室と、付き添いの上臈ひとりだけを別室にいざない、話をすることにした。
　女ばかり十人あまりもあつまった部屋で、おなべは前にすわった。
「すでにお聞き及びと思いまするが、上様の身の上、こたびはまことに思いがけぬこととなり申した」
　そう切り出しただけで、女たちの中にはすすり泣く者がいる。しばし嗚咽（おえつ）の声で話ができなくなった。
「……まことに、まことに無念なことじゃが、泣くのはあとにしなされ。すぐにも惟任の軍勢が攻めてこよう」
　おなべがそう言うと、泣き声がやんだ。
「籠城の支度をせばやと思い、侍どもに申しつけておりますれば、われらも飯の炊（た）き出しなど立ちはたらくがよかろうと思いまして、あつまってもらった次第じゃ」
　とまで言ったとき、ひとりが声をあげた。
「まことに籠城なさるのかえ。すでにこの城はあやうしとて、下人（げにん）ばらが逃げ出しておるように見受けらるるが」

見れば、痩せた老女だった。側室あここの乳母だ。余分なことを言う女だと思ったが、人の口に戸は立てられない。
「いまのうちに、どこかへ退いたほうが……」
と別のところからも声があがる。
「この城を捨てて、どこへ行きなさるつもりかえ」
おなべは語気鋭く反論する。
「じきに京より惟任勢が来よう。逃げたとて、女の足では追いつかれ、惨めな目にあいましょうぞ」
と言うと、すかさずあここの乳母が言った。
「おや、お聞きになってへんのかえ。惟任勢は、瀬田の橋で止まったとのうわさやが」
京からこの安土へ来るには、琵琶湖の尻から流れ出ている瀬田川を渡らねばならないが、近江瀬田の城主、山岡美作守が惟任勢に同心することをいさぎよしとせず、瀬田の橋を焼き落としたので、しばらくは惟任勢も進軍できなくなっている、というのだった。
瀬田川は幅も広く水深もあるので、大軍勢を渡すには橋がなければ無理だ。橋を直すにしても半日や一日でできる話ではない。
「そやさけ、今日明日にも惟任勢が姿を見せることは、あるまいぞ」
ああ、という安堵のため息が部屋中に満ちた。よかったただの、いや橋などすぐに直せるだのと話し声が湧き起こる。

「されど、攻めてくるのは必定なれば、まずは籠城の支度こそ肝心じゃ」
おなべが押し返そうとするが、女たちは勝手にしゃべりはじめていて、おなべの声も消されがちになっている。
「籠城して、もし城が落ちたら、どないなりますのん」
と、あここの乳母から声がかかった。
「まさか伊丹の城のようには、なりますまいな」
そのひと声で座は一瞬、静まりかえったが、すぐにみなが「いやじゃ、いやじゃ」と騒ぎだした。「伊丹の城のようになるのは、いやじゃあ」と。
伊丹城は、摂津一国のあるじであった荒木村重の居城だったが、村重が信長を裏切ったばかりに織田方の大軍に囲まれ、攻防戦の末に攻め落とされた。城に籠もっていた村重の妻妾と子供は捕らえられ、洛中を車で引きまわされた上、六条河原で斬られた。一国のあるじの妻妾として優雅な暮らしをしていたのに、一転して悲惨な最期を迎えたのである。
虐殺の指図をしたのは信長だった。いまや立場が逆転し、信長の妻妾と子供たちは、村重の妻子のようになると震えあがっているのだ。
「お静まりなされ。えい、静まりなされ」
おなべがいくら声をからしても、女たちのてんで勝手なおしゃべりは止まらない。ふだんから表向きは仲よくしていても、裏では陰口を言い合い、角突き合わせている者たちである。まとまるはずもなかった。

「おお、ここにおられたか」
案内の侍女を押しのけるようにして、蒲生左兵衛が開いた障子から顔を出した。
「こりゃ蒲生、無礼であろう」
おなべは叱りつけた。平生ならば、信長の妻妾があつまっているところに男どもは顔出しできないはずだ。だが蒲生は平然としている。
「いまは火急の際なれば、失礼の段、許されよ。それよりお聞きくだされ。わが日野の城から明日、乗り物五十に鞍置き馬百、伝馬二百が来ることとなり申した。この城は危のうござる。上臈衆におかれては、わが城へ退かれるよう、お薦めいたす。遅れぬよう、今夜中に手回りの品をととのえておいてくだされ。では御免」
それだけ言い、一礼すると、さっと行ってしまった。
妻妾たちが騒ぐ声は、一段と大きくなった。
こうなるとお手あげで、籠城への同意も得られぬまま、妻妾たちの打合せはお開きとなってしまった。おなべは大きく息を吐いて、自分の部屋へもどるしかなかった。
夕方にかけて、城内ばかりでなく城下町でも騒ぎは大きくなっていった。町人たちも、軍勢がここへ攻め寄せてくるのを恐れ、馬や荷車に家財を積んでどこかへと落ちてゆく。そして城下に屋敷をもつ家臣たちも、城内の誰にも告げずにいなくなるようだった。
暗くなってゆく中、おなべは十歳の長丸を頭に三人の子供をあつめ、天主三階の部屋で侍や侍女たちを指図していた。

「ひとりもいないのかえ！」
供の侍たちを叱りつける声だけが大きくなる。
「誰か、この城を守ろうとする者は、いないのかえ。上様の御恩に報いようとする者は、ひとりもいないのかえ！」
昼間からさがしているというのに、安土城に籠もって戦おうとする者がいないのだ。祖父江や丸毛といった大身の者は、所領が美濃にあるせいか、いち早く退去してしまったし、蒲生左兵衛も退去するつもりだ。賀藤兵庫頭や野々村又右衛門はまだ天主二階にいるようだが、年寄りの上に数名の家来しか持たない身では話にならない。
それにしても、ひとりもいないとは。
主従の絆など、いざとなるとまるで頼りにならないと、思い知らされるばかりだった。
家臣の中には惟任に通じて、城への案内役を買って出たとうわさされる者までいるから、蒲生はまだましなほうなのかもしれなかった。
人が立ち騒いでいる天主の中で、いますべきことはなんだろうかと、おなべは自問した。
子供たちは確保した。いっしょに逃げればよい。ほかには？
そうだ。もうひとつ、大切なことを忘れていた。混乱にとりまぎれて、誰も信長の冥福を祈っていない。経をあげてやらねばならない。
「これ、ちと使いをしてや」
山腹にある総見寺に侍女を走らせたが、すでに僧たちも逃げてしまって、用を果たせなかっ

た。これでは信長の霊魂は成仏できずにいるだろう。昨日まで天下の過半をその膝下に押さえていたのに、今日は経をあげる者もいないとは、あまりに無惨ではないか。
――おまえさま、かわいそうに。
おなべは目頭が熱くなった。
もう十数年も前、岐阜城の御殿で初めて見た信長の姿を、おなべは今でも鮮やかに思い出すことができる。
上段の間にすわった信長は、背は高かったが瘦身で、鼻筋が通り、髭が薄くつややかな顔は女のように美しかった。荒武者をも恐れさせる鬼のような大男を想像していたおなべは、大きくあてがはずれてあわてた。しかし信長はただの優男ではなかった。ととのった顔立ちの中で目だけが異様に強く輝いており、対面する者を射すくめるのだった。おなべも一瞬たじろいだが、すぐにあることに気づき、その視線をやわらかく受けとめた。
――男どもなら、ただ射すくめられるだけだろうけれど……。
おなべはちがった。鋭い眼光の中に暗い影を見たのだ。この人は寂しいのだと思った。おそらく子供のころ、肉親から大切にあつかわれなかったのだろう。母を求める子供の眼差しのようだと思った。
おなべは子供を愛しむ母の気持ちになって信長を見返した。信長の表情が変わってゆくのがわかった。ふたりのあいだに通い合うものが生まれた瞬間だった。その後、おなべが信長の側室になるのに時間はかからなかった。

その信長の霊魂が行き所なくさまよっていると思うと、かわいそうで仕方がない。だが今のおなべにはどうすることもできない。
その夜、城下の一角が明るくなった。家臣の屋敷が燃えたのだ。
「あれは山崎どのの屋敷であろう。屋敷を焼いて自分の城に引き退くのではないか」
と誰かが言った。旗本の山崎片家は近江犬上郡の土豪だが、早々と織田家を見限ったようだ。
足下の暗闇で鬼火のように橙色の炎が踊るのを、おなべは天主三階の窓から見ていた。織田家は、家臣たちからも見放されつつあった。

四

その夜はほとんど眠れなかった。
夏の朝が早いのは救いだったが、天も涙したのか、明け方から雨になり、しだいに強く降るようになっていた。
三階に部屋をもつ側室たちは、夜を徹して荷造りをしていた。蒲生の用意した乗り物や馬が、城下東南の腰越まで迎えに来るという。早い者勝ちだとばかり、明るくなるとともに雨の中を落ちていった。
侍女の中には、この暑さの中、小袖を三枚も四枚も重ね着し、両腕に小箱を抱えてゆく者も

いた。下男たちも大荷物を背負い、両手に持てるかぎりの荷をもって、あわてて出ていった。
「あさましや」
思わず声が出たが、おなべの侍女や侍たちも落ち着かない。不安そうな顔でおなべを見ては、城の中を行き来している。
おなべも迷っていた。
いくら気張っても、おなべひとりで城を守れるわけではない。信長の家臣たちがみな退出してしまったら、おなべも逃げねばならなくなる。しかも刻限は迫っている。いま惟任の軍勢を押しとどめているのは瀬田の橋だけだが、二、三日のうちには橋も直り、大軍が城下へ押し寄せるだろう。
やはり城を出ざるを得ないのか。だが、出たとしてもどこへ行く？ 日野の城は御免だし、実家も危ない。行くところがないではないか。
「お方さま！」
そこへ侍のひとりが目を輝かせて駆け寄ってきた。
「城を守る者がおりましたぞ！」
「まことか！」
思わず高い声を出してしまった。やはり忠義の者はいるのだと思った。
「それは重畳。してそれは誰ぞ」
「木村どの、二の丸御番衆の木村どのが、残って城を守ると申してござる」

「木村どのとは、次郎左どのかえ」
「は。木村次郎左どのでござる」
おなべは首をかしげた。木村次郎左衛門は、昔からこの安土周辺を領地にもつ土豪で、いまは安土山下町の奉行になっている。信長の下では作事や普請を受けもっており、当然、この安土城の普請にもたずさわった。しかし戦場での武功など聞いたことがない。名乗り出てくれたのはありがたいが、なぜこのときに及んで戦おうとするのだろうか。
「いま、どこにおりゃるか」
「門外にひかえておりまする」
「されば、ここへ呼びなされ」
おなべの部屋の外、廊下にかしこまった木村次郎左衛門は、五十前後の小柄な武者だった。雨の中を歩いてきたせいで、頭も肩もずぶ濡れだった。
「忠義の段、ありがたく思うぞ。この城は上様が丹精込めて造られた城じゃ。守り手さえいれば、裏切り者の惟任などには落とさせまいに」
とおなべが言うと、木村次郎左は面を伏せ、かしこまったまましばし黙っていたが、やがて少しだけ面をあげて言った。
「お方さまに申しあげまする。この木村、命に代えてもお城を守る所存ではござりまするが、寄せてくる惟任を押しのけられるかと申せば、ちとむずかしいと申すよりありませぬ」
「むずかしいと。なんとも奥ゆかしい言いようじゃな。そなた、手勢はいかほど抱えておる」

「足軽（あしがる）まで合わせて、五十七人にござる」
おなべは絶句した。惟任の軍勢は一万を超えているという。五十七人でどうやって戦おうというのか。
「それがし、この安土山下町を宰領（さいりょう）しておりまするが、上様よりは山下町に格別の免許を頂戴しておりまする」
おなべの顔色を見たのか、木村次郎左は話しはじめた。
「その中に、山下町は荷役や普請役を免除するかわり、上様が戦陣や上洛（じょうらく）でお留守の際には、役をつとむること、という一条がござる。いま、まさに上様がお留守であれば、それがし、積年（せきねん）の御恩にむくいるべく、役をつとめる所存でござる」
木村次郎左の話を聞きながら、おなべは察していた。この男の本領はここ、安土である。つまり城を退いて自分の領地に引き籠もろうにも、退きようがないのだ。ここを退去すれば、所領を捨てた浪人となってしまう。それよりはひとり城に残り、忠義の者として後世に名を残したほうがよいと考えたのだろう。
下心（したごころ）が見えているが、それでも味方ができただけ、感謝しなければならない。
「苦労じゃ。そなたの忠義、すぐにも報われようて」
と言って下がらせた。なおも籠城する者をさがしたが、城内には人影すら少なくなっていた。どうやら安土城を守る兵は、五十七人しかいないようだ。
もはやこれまでかと覚悟したとき、侍女が蒲生左兵衛の来訪を告げた。顔も見たくない男だ

が、なにやら虫が騒いで、「通してたもれ」と言っていた。
「まだ籠城するつもりでいなさるか」
対面するなり、蒲生左兵衛は切り出した。蓑笠（みのかさ）をつけてきたのか、頭は濡れていないが、袴（はかま）の裾（すそ）は黒くなっていた。
「いくら城が立派でも、人がいなくては守れませぬぞ。悪いことは言わぬ。わが城まで退きなされ」
むっとした。こちらが苦労しているのは、この男がいち早く退城を決めたからではないか。
「そなたには忠義の心があるのかえ。上様に御恩を受けたのなら、うそでもいいから、この城を守り通してみせるくらいは言うてみたらどうじゃ」
思わず売り言葉を吐いていた。蒲生左兵衛はちょっと目を動かしたが、
「ほう、忠義とおおせか。それがし、忠義の心があるからこそ、上臈衆をわが城に案内しようとしてござるが」
と落ち着いて返した。その姿を見て、おなべはますます激昂（げっこう）した。
「うそじゃ。上臈衆をわが城に取り込んで、惟任が天下を獲（と）りそうになれば、そっくり引き渡そうというのじゃろ。企（たくら）みは見えておるぞ！」
「これはまた、きついお言葉よ。それがし、女を売ってまで生き延びようとは思わぬ」
言葉に力がこもっていた。だがおなべはひるまなかった。
「誰が信ずるものか。六角どのが命ずるままに小倉の城を攻め、上様に通じたわが夫を殺した

というのに、六角どのが倒れれば上様にすり寄ったのは、誰じゃ」

「武士として、力のあるあるじに仕えるのは当然でござる。さりとて女を売る売らぬは別のこと。それがし、後世からあざ笑われるようなことは、決してせぬ」

おなべは蒲生を睨んだ。蒲生も睨み返してきた。

「さればお方さまにおたずねいたす。上様は、なぜ惟任に討たれたとお思いか」

意外な問いに、おなべは口ごもった。蒲生は落ち着き払って言った。

「ひとつは油断したため。もうひとつは、家来の扱いが酷かったためと思し召せ。上様は決していいあるじではござらなんだ。それゆえ、みな城を守ろうとせぬ。あの世へ行ってしまえば消えてなくなるほどの、薄い御恩でござった。忠義という前に、上様の御恩が薄かったのでござるよ」

言い終わると、蒲生は立ち上がった。

「馬と乗り物はすでに来てござる。お気が向けば腰越まで来なされ。八つ過ぎまでは待とうほどに」

そう言い捨てて部屋を出ていった。十分に言い返せなかったおなべは、唇を噛んでその後ろ姿を見送った。

——あやつらにはあやつらの理屈があるのじゃ。

と思ったが、汚物をなすり付けられたようで、悔しさは消せない。わが夫を、いいあるじではないとは何ごとか。あの蒲生も、夫、信長の生前はそれこそ目も合わせられず、出会えば廊

下でも地面でも這いつくばって叩頭してばかりいたのに。

放心したようになって部屋の中にすわっているうち、自然と涙が出てきた。

「おまえさま、なぜ先に逝ったのじゃ！」

虚空に向かって叫んだ。一度泣き出すと止まらず、声をあげて泣いた。二度も夫に死に別れた自分の不幸をのろい、急に冷たくなった周囲をのろい、憎い蒲生に言い負かされた自分の弱さをのろい、止めどなく泣きつづけた。

女の人生は夫しだいで幸せにも不幸せにもなるが、どんな夫にあたるかは、それこそ運としかいいようがない。前夫を失ったときは惑乱し、自分の不運を呪ったが、そのために天下人、信長に見初められて運が開けたのだから、人の運不運はまことにはかりがたいと思っていた。

それがまた暗転するとは、自分はなんと運のない女だろうか。

夫に天下人などは望まない。いや城主ですらなくてよかったのに。健やかで、そばにいてくれさえしたら、どんなに貧しくともそのほうがよかったのに。

小半刻（三十分）も泣いていただろうか。

さすがに泣き疲れて涙が乾くと、不意にひらめいたものがあった。

「おお、そうじゃ」

混乱の中で自分はいったい何をしたかったのかが、見えてきたのである。

そうだ。したかったのは、この奇怪な城を守ることではない。ましてや夫が残した妻妾や他の女が産んだ子供を守ることでもない。

「こうしてはおれぬ。みなの者、支度をおし。城を退くぞえ。半刻で支度しなされ」
侍女や供廻りの侍たちに命じた。侍女たちはあわてて支度をはじめた。
半刻後、三人の子供を引きつれ、侍たちに守られたおなべの一行は、城の東南にある腰越に来ていた。かぶっている笠に大粒の雨があたる。肩と背は濡れるし、裾をたくしあげている足許は冷たい。
街道の分岐点となるここには蒲生が領内からつれてきた馬と人足が大勢いて、それを奪い合う上臈衆たちで混乱していた。下人下女だけでなく、上臈たちまでも、
「この馬は妾のものぞえ」
「なにを、妾こそ早く手をかけたのじゃ」
と争っている。みな足許を泥だらけにするだけでなく、胸や顔まで泥はねをつけているが、気にする者もないありさまだった。
「これはお方さま。やはり来なさったかな」
目ざとく見つけた蒲生左兵衛が声をかけてきた。白い歯が見えている。おなべは笠をあげて軽く会釈したが、
「あいにくと馬も輿もすべてふさがってしもうて……」
と言いかけた蒲生に、
「そなたの世話には、金輪際ならぬ」
と吐き捨てて通り過ぎた。

二日後、おなべは岐阜に来ていた。
岐阜城の北、長良川のほとりにある崇福寺が、織田家の菩提寺になっている。信長が美濃を攻略するや、すぐに定めたのである。岐阜に着くや、おなべはこの寺に足を向けた。
昨日は晴れ間が出ていたが、今日はまた雨が降っている。
岐阜の町にまで混乱は及んでいて、岐阜城は斎藤玄蕃允に乗っ取られていた。しかしこの崇福寺は静かなもので、雨粒が庭の苔や方丈の茅葺き屋根をしっとりと濡らす音のほかは、なにも聞こえない。
おなべは住持に会って、ここへ来るまでのあらましを話し、信長の位牌を作って弔いをするよう依頼した。すでに本能寺のことを聞きおよんでいた住持に否やはない。
その日のうちにさっそく仮の位牌が作られ、弔いの読経がはじまった。十人あまりの僧侶が荘厳な声で経をあげる中、おなべは信長のことを思い出しながら数珠をまさぐっていた。
目を開けると、目の前に信長の位牌がある。それだけで心が安らいだ。ここには正妻の美濃の方も、若い三条どのの息女もいない。信長の妻妾の中で、いま信長の成仏を祈っているのは自分だけだ。
家来や敵には冷たく、残酷でもあった信長だが、自分にはよき夫であり、子供たちにはよき父でもあった。
そんな信長を、夫としてひとりじめにしたいと、ずっと思っていた。それは信長の生前には

かなわぬ願いだったが、いまやっとかなったのである。
自分はいま、信長に向き合ってふたりだけになっている。それがなんとも心地よい。
——もうしばらく、ここにいてたもれ。十万億土へ旅立たれる前に。
おなべはふたたび目を閉じ、波のような読経の声に身をゆだねた。

初出

「南の山に雲が起これば」『WEB文蔵』二〇一三年五月
（「中国者の律儀」を改題）
「最後の忠臣」 月刊文庫『文蔵』二〇一二年十一月号
「久々よ、怒れる武神、勝家を鎮めよ」 書き下ろし
「関東か小なすびか」 書き下ろし
「本能寺の変に黒幕はいたか」 書き下ろし
「カタリナ・おかつの受難」 書き下ろし
「北方城の悲惨な戦い」『WEB文蔵』二〇一三年六月
「信長を送る」『WEB文蔵』二〇一三年四月

〈著者略歴〉
岩井三四二（いわい　みよじ）
1958年、岐阜県生まれ。一橋大学経済学部卒。メーカーに勤務する傍ら小説を執筆し、96年、『一所懸命』で小説現代新人賞を受賞してデビュー。98年に『簒奪者』で歴史群像大賞、2003年に『月ノ浦惣庄公事置書』で松本清張賞、『村を助くは誰ぞ』で歴史文学賞を受賞。05年、『十楽の夢』が直木賞候補になる。08年に『清佑、ただいま在庄』で中山義秀文学賞を受賞。主な著書に、『あるじは信長』『あるじは秀吉』『あるじは家康』『とまどい関ヶ原』『難儀でござる』『城は踊る』『おくうたま』『霧の城』『サムライ千年やりました』『江戸へ吹く風』『光秀曜変』『むつかしきこと承り候　公事指南控帳』などがある。

とまどい本能寺の変

2014年1月29日　第1版第1刷発行

著　者　岩井三四二
発行者　小林成彦
発行所　株式会社ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区一番町21
文芸書籍課　☎03-3239-6251（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
組　版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷所
製本所　共同印刷株式会社

ISBN978-4-569-81685-2